

**県道安来布部線改良工事に伴う  
清水大日堂裏古墓発掘調査報告書**

1998年3月

**島根県広瀬土木事務所  
安来市教育委員会**

## 序

この報告書は、平成6年8月から平成8年1月まで実施された清水大日堂裏古墓等の発掘調査報告書であります。

この調査は、一般県道布部安来線道路改良工事に伴うものであります。そして、2年間の調査は、安来市の発掘調査史上最も大規模なものであったことも特記することができます。そのため、遺跡の取り扱いを2度に分けて行うなど、文化財保護行政サイドにおいてもかなりの混乱を生じたことも、今後の教訓となりました。

調査の結果は、弥生時代から近世までの墓が連続と造営されていた丘陵であることが明確となりました。特に、多数の近世墓の調査については、調査例も少なく今後の指標となるものと考えられます。

最後になりましたが、この調査の実施に対し、協力いただいた島根県広瀬土木事務所、地元宇賀荘地区の皆様に心よりお礼申し上げます。また、調査指導をいただきました鳥取大学医学部井上貴央先生、島根大学理学部徳岡隆夫先生にお礼申し上げます。この報告書が今後の文化財の保護行政に役立てば幸いであります。

1998年3月31日

安来市教育委員会

教育長 市川博史

## 例　　言

1 本書は安来市教育委員会が平成6年度から7年度鳥根県広瀬土木事務所が計画する県道安来布部線の改良工事に伴い実施した、鳥根県安来市宇賀荘町字石田292他に所在する清水大日堂裏古墓の発掘調査の報告である。

2 調査組織は次のとおりである。(以下敬称略・肩書きは当時のもの)

調査主体 安来市教育委員会

調査指導 非上貴央(鳥取大学医学部教授)・徳岡隆夫(鳥根大学理学部教授)

川原和人(鳥根県教育委員会)・村上勇(広島県立美術館学芸員)

中村唯史(鳥根大学大学院)・影山優子(鳥取大学医学部助手)

坂田友宏(米子高等工業専門学校教授)・今岡稔(鳥根県文化財保護指導員)

三浦清(鳥根県文化財保護審議会委員)

事務局 市川博史(安来市教育委員会教育長)・川井章弘(文化振興課長)

調査員 三宅博士(同課文化係長)・永見英(同課主任)・金山尚志(同課主事)

調査協力 南前孝明(米子工業高校)・(株)日立金属冶金研究所・佐藤農(和銅博物館)

青並好之(鳥根県歯科医師会歯の歴史資料館)・(財)元興寺文化財研究所

藤沢典彦(元興寺文化財研究所)・町田章(奈良国立文化財研究所)

勝部昭(鳥根県教育委員会文化財課長)・大森隆雄(安来市文化財モニター)

北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室・原裕司(浜田市教育委員会)

津金沢吉茂(群馬県教育委員会)

調査参加者 安戸やよひ・伊藤清・北風和世・坂根敬枝・祖田藤子・竹内邦吉

南波雷子・福田敬治・原セツ子・原勝・前田利夫・前田久義

三島真之・宮本百枝・椋田崇生・渡辺カナエ・大島律江・岩田林

土井浩二・矢野英隆・米田一彦・岩西みゆき・安達裕子・永田みづえ

松本明子・松本知子・山本奈美江・渡辺大輔・渡辺淳子

3 本書に掲載されている挿図の方位は、磁北である。

4 検出遺構は建物をS B、溝をS D、構をS Aで、また古錢については原寸で表現した。

7 本書は三宅・永見・金山が執筆し、三宅・金山が編集した。また、第5章の人骨の所見は非上貴央氏に原稿を依頼し、ご寄稿いただいた。各章末尾に執筆者名を記した。

6 人骨の実測は(株)ワールド航測のステレオカメラにより撮影後、標高を記入し図化作業を行った。

7 出土遺物については安来市教育委員会で保管している。

# 目 次

## 序

## 例 言

第1章 調査に至る経過 .....	永見 英 .....	1
第2章 位置と歴史的環境 .....	永見 英 .....	2
第3章 調査の経緯と概要 .....	永見 英 .....	4
第4章 検出した遺構と遺物		
第1節 A I 区の調査		
(1) 南側斜面で検出した遺構と遺物 .....	永見 英 .....	8
(2) A I 区東方で検出した遺構と遺物 .....	三宅博士 .....	14
(3) A I 区中央部で検出した遺構と遺物 .....	三宅博士 .....	63
(4) A I 区西方で検出した遺構と遺物 .....	金山尚志 .....	86
第2節 A II 区の調査		
(1) 尾根上で検出した遺構と遺物 .....	金山尚志 .....	180
第3節 B 区の調査		
(1) 丘陵頂部で検出した遺構と遺物 .....	三宅博士 .....	184
第4節 C 区の調査		
(1) 調査の概要と出土遺物 .....	永見 英 .....	210
(2) 水田面の調査 .....	永見 英 .....	211
第5章 安来市大日堂遺跡近世墓から検出された人骨の概要		
..... 井上貴央・影岡優子・土井浩二・亀崎豊美 .....	218	
ま と め .....	三宅博士・永見英・金山尚志 .....	232
図 版		



## 第1章 調査に至る経過

清水大日堂裏古墓は、昭和63年の分布調査によって発見された。但し、この発見も、該当地が当時の檜林であったためうす暗闇く、遺跡の可能性があると考える程度の認識であった。根拠となつたのは、人頭大の石の塗積であった。明確な遺跡の性格は、不明確であったが、遺跡の立地や石の存在から古墓である可能性が考えられた。遺跡名は、清水大日堂の裏山だったことから命名した。

今回の発掘調査は、一般県道安来布部線の改良工事に伴うものである。本来開発事業を実施する場合、周知の遺跡が所在する部分については、発掘調査が終了し、取り扱いが決定された後、初めて事業の実施が可能となるものである。ところが、今回の県道改良工事については、事業主体である島根県広瀬土木事務所が、埋蔵文化財調査報告書の成果から遺跡が所在しないと判断し、埋蔵文化財に関わる事前協議を行わずに事業を実施したのである。この様なことが起きたのは、この事業実施の根拠として使用した埋蔵文化財調査報告書が、最新のものでなかったのであり、また、根本的に事前協議を怠ったことにある。いずれにしても、本市教育委員会では、事業計画を作成した段階で、協議してもらうようお願いしており、このことが守られていなかつたため、この様な事態になつたものである。また、この遺跡が所在する丘陵は、「はかやま」と地元から呼ばれており、このことは、調査でも明確になった近世墓が所在する事を名前からが示すもので、土地の交渉過程の中で察知することができたのではないかと考えられる。何れにしても、今回の場合は、事業を実施した後、遺跡であることが分かった事例であり、以後この様なことが生じないシステム作りが必要である。

さて、上記の遺跡を発掘調査するまでの経過は以下のとおりある。

平成6年6月6日、宇賀荘町において、事前協議を行うことなく道路工事が実施されていることを確認した。翌日の6月7日、電話により、工事主体者と考えられる広瀬土木事務所に事業実施の有無を確認した。そして、確認できたことから、工事を実施している部分には遺跡が所在する事を話し、即刻工事の中止を申し入れた。そのため、工事は中止された。手順を踏むため、6月23日、広瀬土木事務所の依頼により、分布調査を実施した。その結果、古墓の他に横穴墓、古墳等の遺跡が所在することを確認した。結果に基づき、工事を実施するためには事前に調査を実施する必要であることを回答した。7月25日、安来市教育委員会において、市教育委員会と広瀬土木事務所が調査に伴う予算の件で協議を行い、平成6年度については、広瀬土木事務所が事務を行う事を決定し、8月22日から発掘調査を開始した。

## 第2章 位置と歴史的環境

清水大日堂裏古墳は、島根県安来市宇賀荘町字石田292番地外に所在する。この遺跡の調査は、前述したとおり、県道路改良に伴うものでその部分の約400mの範囲に遺跡等が所在するため、任意にA・B・C区の3つの調査区を設定して実施した。清水大日堂裏古墳A区は、県道が切断する丘陵の主流部分に位置する調査区である。B区はA区の北側から東側に派生した丘陵の先端部分及び西側斜面に位置する調査区である。C区は、切り通しによりA・B区から隔離された丘陵の東側及び水面で雲樹寺の北側300mに位置する調査区である。

同遺跡が所在する丘陵は、古刹である清水寺が所在する丘陵から南東に派生しており、この先端に、元享2年(1322)に弧峰覚明を開山とする名刹雲樹寺が所在する。また、この丘陵には前



第1図 遺跡位置図

述したとおり、切り通しがある。これは、A・B・C区が所在する丘陵の東側に広がる千才谷から西側の万才谷へ水を流すため丘陵が分断されたものと考えられている。この切り通しについては、雲樹寺開基牧新真左右衛門によりに造られたという伝承や「千才池」に住む大蛇の話があり、雲樹寺創建当時のものとして考えられてきた。しかし、今回の調査により、江戸時代中頃以降の所産と考えたい。この切り通しは、清水寺と雲樹寺の寺領境となっている。清水寺寺領の南端ともいえる切り通し近くには今回遺跡の名称ともなった清水大日堂の小さな堂がある。また、清水大日堂に隣接して荒神が祭られている。この荒神の祭主は清水寺の塔頭の1つである蓮乗院住職である。

この遺跡がある丘陵は、地元では「墓山」と呼ばれていた。これは、調査により明確になった100基以上からなる近世墓が営まれていたことからも納得できる。現在、宇賀荘町の町並みは伯太川の堤防近くに形成されているが、古くはこの遺跡周辺及び奥に住宅が所在したとされる。また、



第2図 周辺主要遺跡分布図

雲樹寺の丘陵から切り通し、遺跡B区東側斜面の平坦面を広瀬藩の参勤交代の道が通っていた。これは、江戸時代の主要街道であった。

この遺跡A区から南西約800mのところに一級河川である伯太川が北東に向かって流れ汽水湖である中海に注ぐ。

以下清水大日堂裏古墓周辺の歴史的環境を時代別にまとめてみたい。

#### 縄文時代

この時代の遺跡の発見例は、少なくあまり知られていない。知られているのは、黒井田町の高広遺跡、神田遺跡と島田町黒谷I遺跡である。高広遺跡からも縄文時代早期末から前期の土器が出土している。神田遺跡は、現在は、安来市営の和田団地となっている部分で、客さん古墳が所在する丘陵の裾部から縄文時代後期、晚期の土器が出土している。島田黒谷I遺跡は、国道9号線バイパス安来道路の事前調査に伴い発見され縄文時代前期から晚期の縄文土器が出土している。しかし、現在のところ、縄文土器等が出土するのみで明確な遺構は検出されていない。

#### 弥生時代

この時代も前期遺跡の発見例は、少なくあまり知られていない。中期中葉になると高広遺跡や大原遺跡から土器片等が検出されている。弥生時代の後期になると、住居跡も検出されているものの、著名な九重土壇墓などの弥生墳丘墓が検出されている。安来市に隣接する伯太町安田のカウカツ遺

跡E-1地区においては、四隅突出墳丘墓が検出されている。この墳丘墓は、安来市においては、飯梨川以西の荒島地区にしか検出されていない。伯太町内で発見されており、今後、飯梨川以東や伯太川周辺においても発見される可能性が出てきたといえる。

#### 古墳時代

この時代になると、多数の古墳の所在が明確なると共に発掘調査によって住居跡が検出されている。代表的な古墳としては、全長50mの前方後円墳で前方部が短い帆立貝型で、主体部が舟形石棺の尾壳塚古墳や伯太川を北から鳥瞰できる丘陵に50m級の前方後円墳など8基の古墳群からなる清瀬山古墳群などがある。清水大日堂裏古墓周辺は、大半が円墳、しかも10mクラスの規模のものが大半を占めるが、30m級の前方後方墳も2基所在する地域である。

#### 古代から近世

宇賀荘町は、名前のとおり莊園であったことを地名に留めている。しかし、古代、中世については、資料が乏しく雲樹寺、清水寺の資料や伝承に限られている。近代に至っても状況は変わらないものの、今回の調査でも検出された近世墓は、今回調査した遺跡以外でも宇賀荘町と九重町境の丘陵（来待石製の宝篋院塔を含む）や清井町の丘陵に所在するし、江戸時代の集落に隣接することを示すものと考えられる。また、平成6年からの島根県教育委員会が実施している歴史の道事業で広瀬藩の参勤交代の道が宇賀荘町を通っていたことが紹介されたのも最近のことであり、この時代の研究もやっと途についた状況といえる。

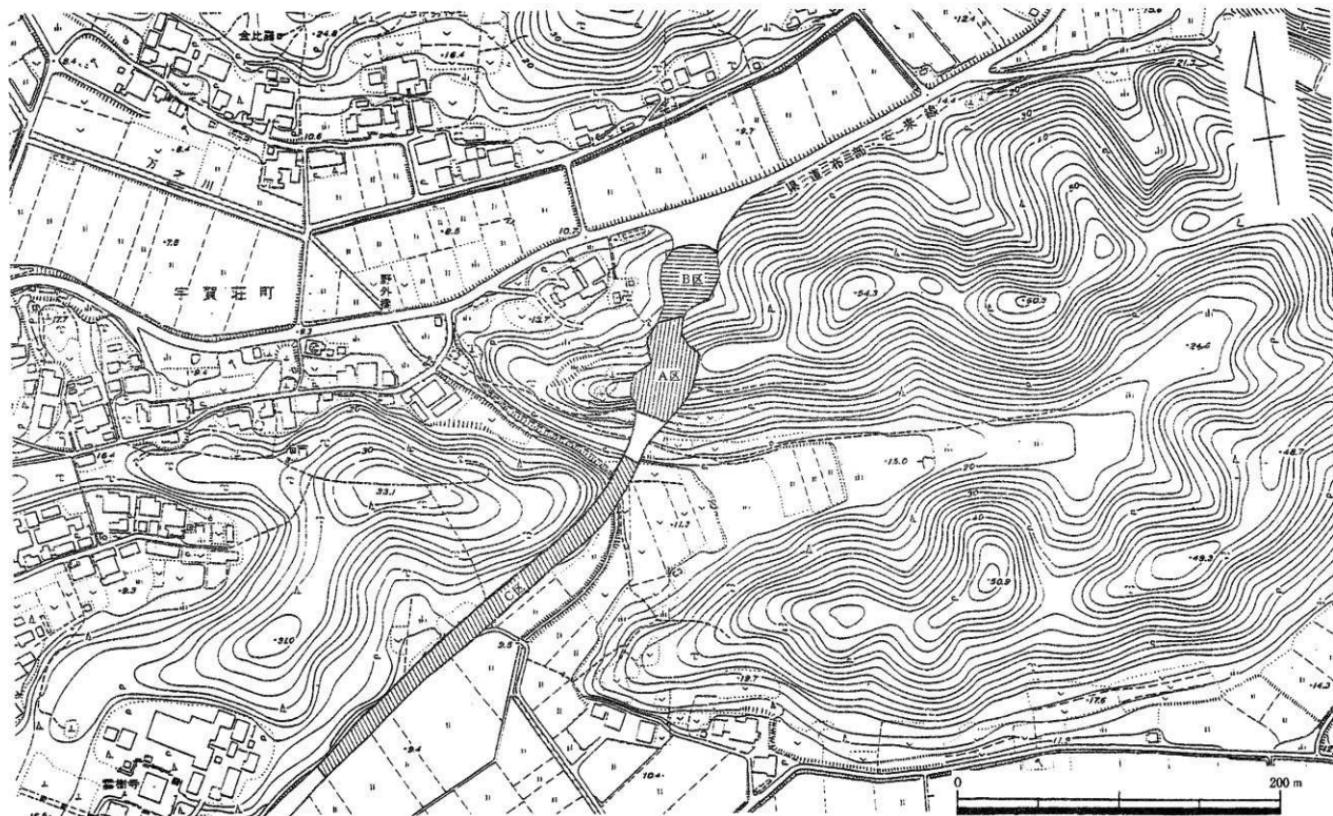
## 第3章 調査の経緯と概要

清水大日堂裏遺跡は、平成6年8月22日から島根県広瀬土木事務所の協力を得て発掘調査を開始した。当初、調査は、12月末までの予定であった。しかし、多数の遺構が検出されたことから、調査は、平成8年1月10日まで続けられた。このため、ここでは、便宜的に平成6年度実施調査について第1次調査とし、平成7年度に実施した調査を第2次調査として、その経緯と概要を以下に記述するものとする。

### 第1次調査

平成6年8月22日から調査を開始して平成7年3月末まで実施した。

この事業は、広瀬土木事務所が国庫補助事業を得て県道安来布部線改良工事を行うもので、平成6年度の事業として部分的でも道路事業を実施したいとの強い要望が平成6年12月12日にあった。これは、工事の当初計画においては、遺跡のA区から道路工事を実施していく予定を、B区にから実施するよう変更して、事業を進めたいというものであった。その後、広瀬土木事務所から文



第3図 調査区配置図

書として提出された。これを受け、市教育委員会では、2月23日に遺跡B区の取り扱いについて、記録保存とすることを安来市文化財保護委員の会へ諮問した、遺跡をA区・B区と分割しての判断して取り扱った場合、今後、A区で貴重なものが検出された場合、保存措置ができなくなる既成事実となるのではないかとの意見が出された。そのため、答申の結論は、2月29日に再度文化財保護委員の会を開催することとし、結論を持ち越した。2月29日の保護委員の会には、広瀬土木事務所から担当課長の出席も求め、第2回目の遺跡取り扱いの会を開催した。そして、その結果、上記にも記したように、今回の遺跡の調査は、広瀬土木事務所が埋蔵文化財の事前協議を怠ったことから、始まっているとの認識から、埋蔵文化財保護のための事前協議を行うためマニュアルの作成と今後、今回の様な事態がないことの確約することで、B区の記録保存、やむ得なし、とする答申が安来市教育長へ提出された。

第1次調査の概要は下記のとおりである

#### A 区

1. 南側斜面の試掘調査を実施し、遺跡が所在しないことを確認した。
2. 南斜面から横穴1基が検出され、完掘した。
3. 近世墓が多数所在することを確認した。また、数基を発掘し、深さが2mにも達するものであることが判明した。

#### B 区

1. 丘陵の先端部に古墳を検出され完掘した。鉄剣等が出土した。この古墳の主体部の下からは、弥生時代の所産と考えられるが貯蔵穴が検出された。
2. 古墳の南側の斜面には、五輪塔が多数検出され、火葬骨も散乱している。中世の集団墓と判明した。
3. 古墳の北側斜面には、平坦面があり、100を越える多数の柱穴が検出された。

#### 2次調査

2次調査は、調査予算の事情で平成7年7月10日からの実施し、平成8年1月に終了した。取り扱いについては、平成8年1月11日に文化財保護委員の会に遺跡のA区他について、記録保存に留めたい旨の諮問を行った。安来市文化財保護委員の会からも同意の答申を得た。これを得て、平成8年1月12日に、遺跡の取り扱いについて、島根県教育委員会と協議を行い、1月16日に記録保存の決定がなされた。

2次調査で行った調査概要は、以下のとおりである。

#### A 区

1. 100基以上の近世墓を確認、完掘した。時代は寛政年間の紀年名を刻む石塔があることから、

この時代の前後の所産と考えられる。

2. 調査区の丘陵頂上部からは、土壙墓群が検出され、完掘した。弥生後期後半古墳時代前半期の所産と考えられる。
3. ASB 01とした納骨堂と推定される建造物は、中世まで遡る可能性も考えられる。
4. 南側斜面に開口していた横穴の調査、完了した。

### C 区

1. 雲樹寺開基の居宅口承地の調査を実施した。
2. 「千才池」と切り通しの調査を実施した。

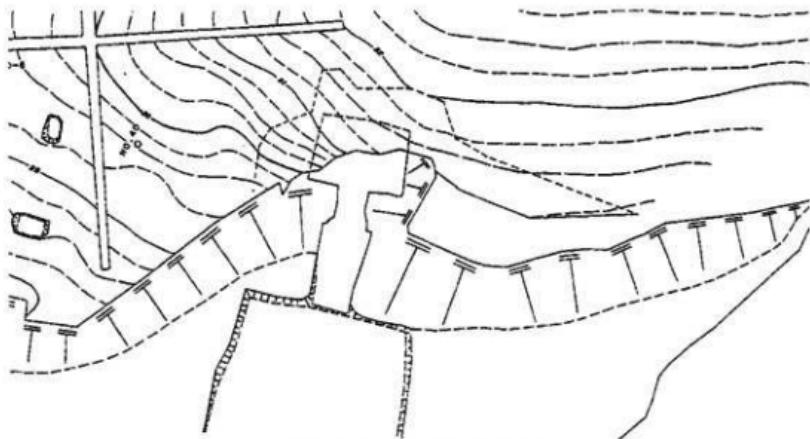
## 第4章 検出した遺構と遺物

### 第1節 A区の調査

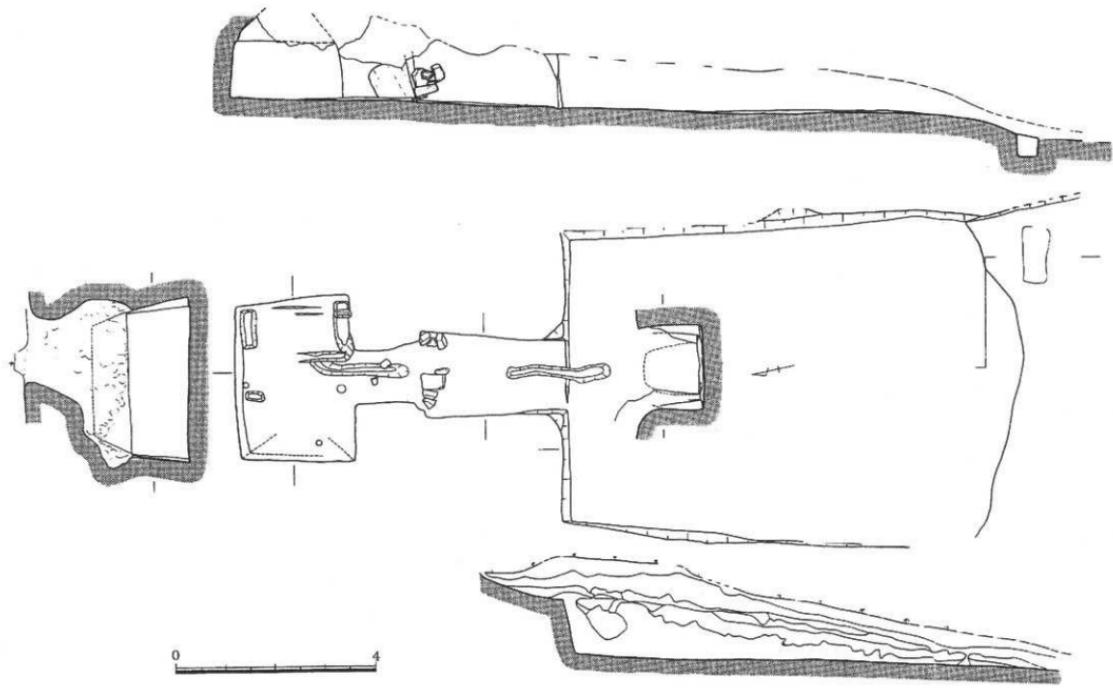
#### (1) 南側斜面で検出した遺構と遺物

##### A I 南1号横穴

丘陵の南側斜面で検出した横穴である。この横穴は、南側のトレンチ調査によって検出された。横穴の主軸は、N-17°-Eである。この横穴は、玄室、玄門、羨道、前底部からなっている。



第4図 A・II区遺構分布図



第5図 A 区南横穴実測図

## 玄室

玄室のプランは、正方形に近い方形で、奥行2.34m、幅2.4m、高さ2m（推定）である。四壁と天井との境界線は、床から1.2mのところで確認でき、断面はややふくらんだ三角形をしており、「四柱式」を呈し、平入りである。壁面は、天井の落盤や壁面の剥落も著しくノミ痕は不明である。玄室の東壁から奥壁にかけて、組み合わせの木棺を設置したと考えられる溝状の痕跡がある。溝状の痕跡は、床面全体に確認できないが、長さ2m、狭道側の幅1.1m、奥壁の幅0.8mである。溝は明確な部分で幅0.3m、深さ0.1mである。また、玄室から狭道へ溝が確認されている。この溝は、上記の木棺の西側側板から施され、閉塞部分まで続く。副葬品としては、須恵器が出土している。人骨は、検出できなかった。

## 狭道・玄門

狭道は、天井部が崩落しているために高さ不明、長さ2.8mを測る。幅は、玄門側が前庭側に比較し狭い構造のもので、玄門部底部で0.7m、玄室側で0.8mを測る。玄門は、狭門部の壁が崩落しているため不明確であるが、実測図では確認する限り、玄門側と玄室側がほぼ同じ幅の構造をしていたものである。玄門は、狭道と同じく天井部が崩落しており高さ不明、長さ1.34m、幅1.1を測る。玄門入口には、閉塞のための深い溝が狭道を直行してつくられている。ここでは、閉塞石を検出している。閉塞石は、砂岩の切石など7個であり、玄門の中央西側には閉塞石は實際にしか検出できず、東側の閉塞石も狭門に倒れて検出されている。閉塞石の下からは、土師器碗が出土している。

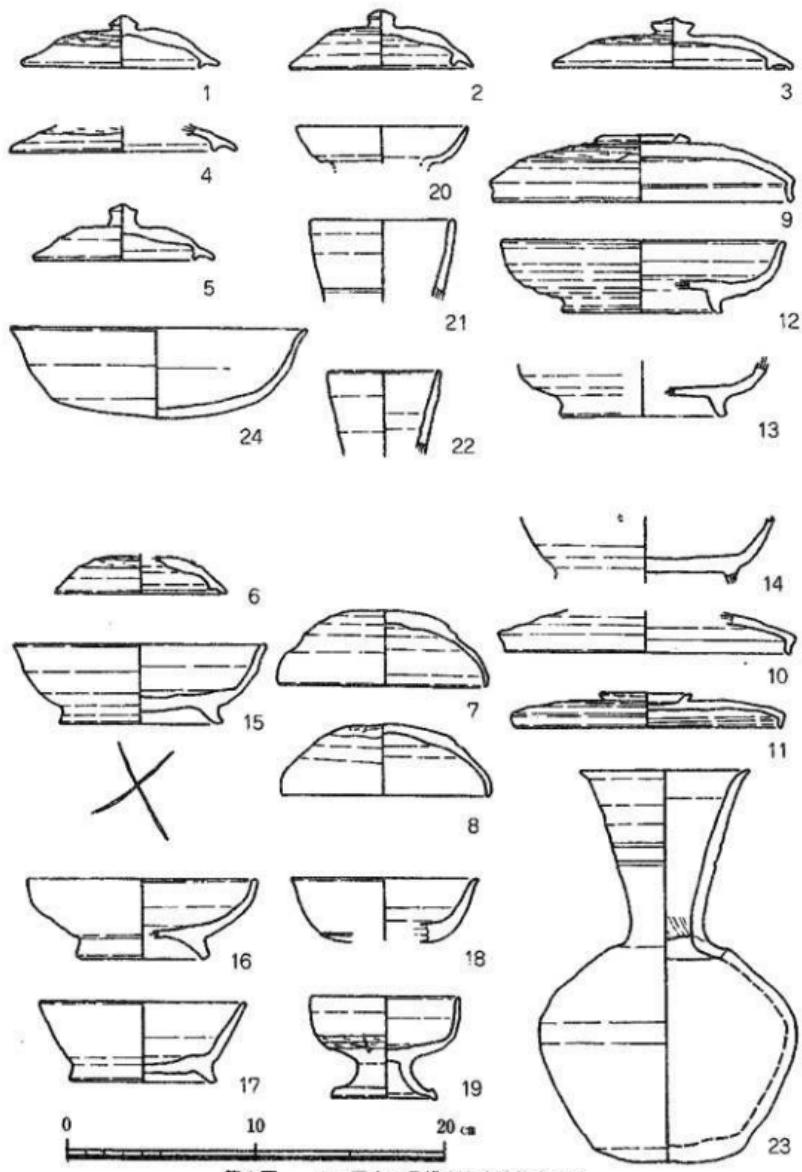
## 前庭部

地山緩斜面を広く削り前庭部をつくっている。この横穴の前庭部は、大規模なものであり、長さ9.17m、横穴側の幅5.83m、最大幅6.74mである。この前庭部の床は、狭道入口部分と前庭部の端部では、30cmのレベル差があり、狭道側が高くつくらえている。この前庭部の南東端部付近に東西辺112cm、南北辺40cmの埋葬施設と考えられるものが所在する。前庭部は、埋葬後地山ブロックで埋められたものと考えられる。須恵器が出土している。

## 遺物の出土状況

玄室からは、須恵器の蓋（図6-2・3・4）が出土しており、床面からは僅かに浮いた状態であるものの、この横穴の埋葬時期を示すものと考えられる。また、前庭部のところでも記述したとおり、地山の土を使って埋められており、そこからの須恵器の蓋（図6-7・8）が出土している。従って、これらの須恵器蓋等から築造時期は、大谷山雲縫年6期・陶邑縫年TK217併行で、大谷6B期に追葬があり、同7あるいは8期で埋葬を終えたと考えられる。

（註）島根県教育委員会「高広遺跡発掘調査報告書」1988年



第6図 A I区南1号横穴出土遺物実測図

## 出土遺物（第6図）

出土遺物は、須恵器と土師器である。

須恵器は、壺11点（1～6・9・10・11）、杯7点（12～18）、「塵」の口縁部1点（20）、長頸壺の口縁部と考えられるもの2点（21・22）、低脚杯1点（19）、壺1点（23）が出土している。

蓋7・8は、口径10.8cmを測るものである。ヘラ切りの後、肩部には沈線が認められず、強くナデを施したものである。口縁部は、緩やかに内湾する。前庭部から出土している。蓋1～3・4・5・6は、最大径9.6cmから12cmを測るもので口縁内面にかえり、天井部に宝珠のつまみが付けられたと考えられるもので、玄室、狭道、前庭部から出土している。蓋9・10・11は、上記のものより大型のもので最大径14cmから15.8cmを測るものである。輪状つまみが付けられ、口縁内面のかえりをもたないものである。玄室、前庭部から出土している。

杯18は、前庭部から出土しており、口径9.9cmを測る小形品で口縁内面のかえりを有する蓋に伴うものと考えられる。杯12～17は、玄室、前庭部からの出土で、高台が付けられており、輪状つまみを有する蓋に伴うものと考えられる。15の外面底部中央には、「X」のヘラ記号が認められる。

「塵」20は、口径10.8cm、6cm、残存高2.4cmを測る1/4が残る口縁部破片で、玄室排土中から出土した。

21・22は、玄室から出土しており、長頸壺か平瓶と考えられるものである。21の下方には沈線が施されている。

低脚杯19は、前庭部からの出土で、口径7.8cm、器高5.3cmを測るものである。外面は、ヘラ削りが確認できる。焼成は、良好、硬質である。色調は、内外面とも青灰色を呈する。胎土には、2mm大の砂粒が含まれる。この土器の外面には、「X」のヘラ記号が認められる。

壺23は、前庭部からの出土で、口径8.8cm、器高20.3cmを測るものである。焼成は、良好である。色調は、内外面とも青灰色を呈する。胎土には、1mm程の白色粒が含まれる。この土器は、頸部に2本の沈線が施されている。外面底部は、ヘラ削りが施されているが丸みを持つものとなっている。前庭部からの出土である。

土師器は、1点出土している。

碗（24）は、狭道部閉塞石の下から出土しており、口径15.8cm、器高4.7cmを測るものである。焼成は、良好である。色調は、内外面に赤色顔料が塗布され黄赤色を呈する。胎土には、1mmの砂が含まれる。この土器は、口縁部が緩やかに外反するものであり、外面底部は、丸みを有するものである。

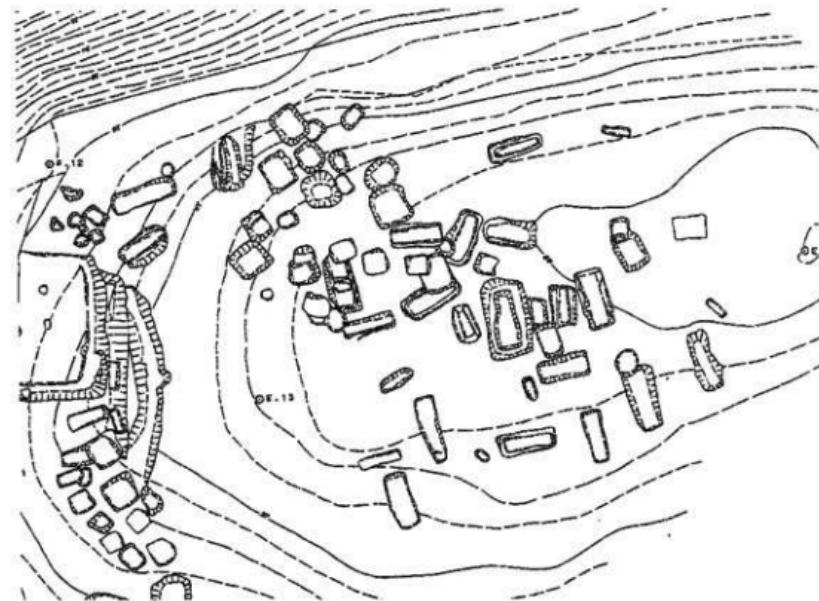
## (2) A I 区東方で検出した遺構と遺物

A I 区東方ではおびただしい数の土壙、この他きわめて浅い溝1を検出した。これら検出した遺構のほとんどは埋葬に関係するとみられるものであった。その所属時期は大別すると古墳時代前期に属するものと、中世～近世にかけてのものとがあった。

古墳時代前期に属すと推定したものは、東28号墓の東側を南北に走るきわめて浅い溝1が認められた他は、平面隅丸長方形を呈す土壙1～28号墓があった。これらはA I 区東のほぼ中央で検出したもので、いずれもその主軸方位が尾根と平行するか、あるいは直交するところに大きな特徴が見出せた。なかには32号墓のように若干の人骨片や六道鏡を伴うものもないわけないわけではないのが、ほとんど遺物は認められなかった。

近世に属すと推定したものは42～54号墓で、いずれも墳底に遺存状態が良好な人骨や副葬品が認められた。古墳時代や中世に属すと推定したものと比較すると、深さが1mから2m以上を測るものもあったことは大きな相違点があるといふ。

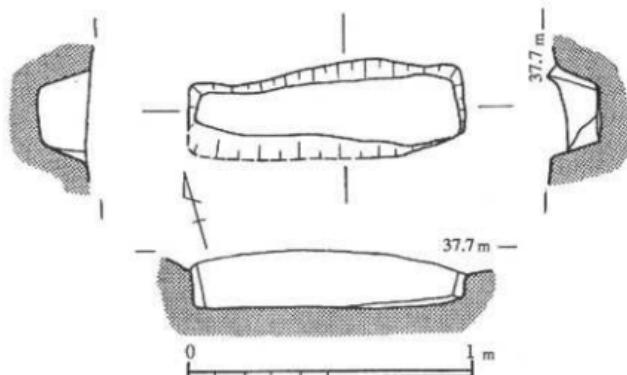
以下東方の古墳時代前期に属するもの、そして中世近世のものと順次その概要を記していくこととする。



第7図 A I 区東・中遺構分布図

A I 区東 1 号墓（第8図）この土壙は調査区の最も東にあって、尾根上の平坦面がやがて北側斜面にいたる、傾斜変換点付近に、東西方向に走る等高線とほぼ平行する形で掘り込まれている。

土壙の平面は長方形を呈し、主軸方位は N-57° - W、全長95cm、東端幅33cm、西端幅20.5cm、深さ24cmを測る。東端幅が西端と比較するとやや幅広くなっていることから、被葬者の頭位は東方と判断された。壙底はほぼ水平となっている。小型であることから、成人でない可能性が大きい。この土壙は現状では素掘りの形態となっているが、掘り込まれている位置が丘陵の傾斜変換点付近であることから、上部が流失している可能性も考慮される。



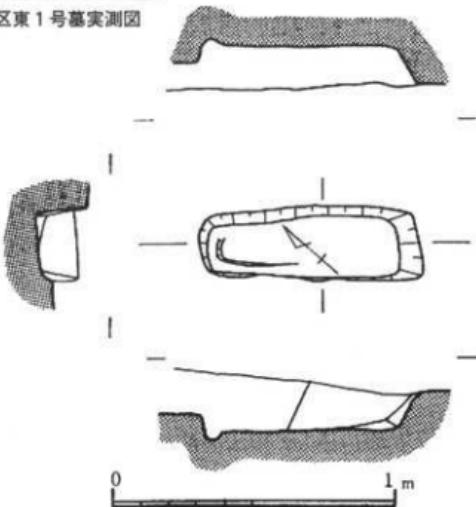
第8図 A I 区東 1 号墓実測図

#### A I 区東 2 号墓 (第9図) 調査区

の東方、尾根のほぼ中央で検出されたもので、平面は長方形を呈す。

ただし土壙上縁は、樹根の著しい搅乱を受け損なわれている。主軸方位は N-32° - W、全長77cm、北端残存幅22cm、南端幅25cm、深さ13cmを測る。土壙の形態から頭位は南東方向と推定される。

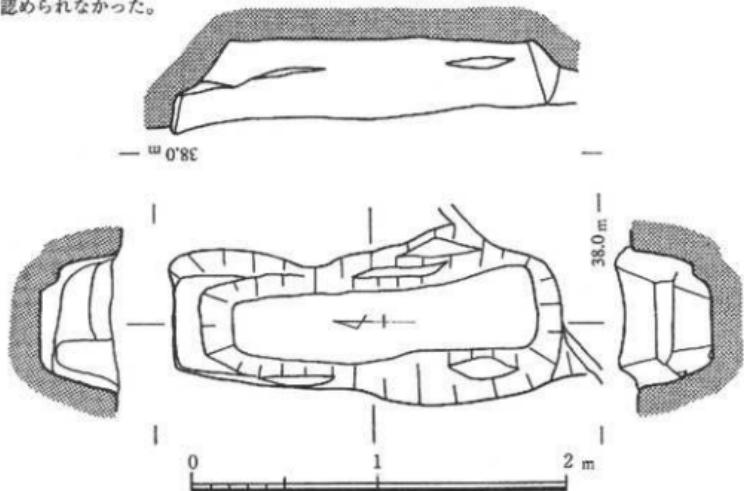
この土壙も東1号墓と同様に小型であることから、成人でない可能性が大きい。



第9図 A I 区東 2 号墓実測図

A I 区東 3号墓（第10図）前述した東2号墓の南西に位置する平面長方形の土壙で、堅敏な地山に掘り込まれている。主軸方位はN-2°-Wとなっている。全長207cm、北端幅60cm、下幅25cm、南端残存上幅70cm、下幅44cm、深さ53cmを測る。南端幅がやや広いことから、被葬者の頭位は南方向と判断された。壙底はほぼ水平となっていた。

北端壁面、西及び東壁面の一部に狭いテラスが認められた。これが最も顕著なのは、北壁面で、検出面から20cm下方に幅約15cmのテラスが、西壁と東壁に向かってほぼ水平に伸びている。このことから、東3号墓は二段掘りの土壙を意図して掘られたものと考えられる。この土壙に関係する遺物は認められなかった。

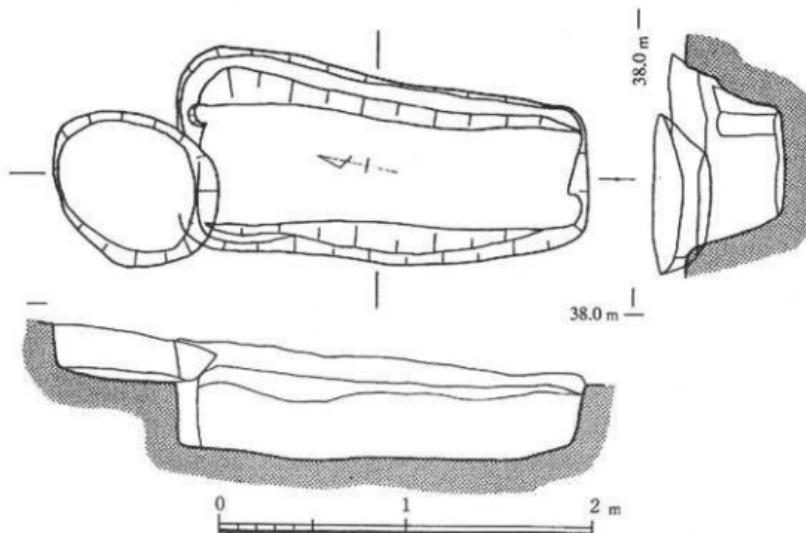


第10図 A I区東 3号墓実測図

A I 区東 4号墓（第11図）東3号墓の西に位置する平面長方形の土壙で、堅敏な地山に掘り込まれている。主軸方位はN-12°-Wとなっている。全長219cm、北端上幅108cm、同下幅62cm、南上幅70cm、深さ63cmを測る。壙底は南端がやや高くなるものの、北端の上下幅が若干広いことから、被葬者の頭位は北方向と判断された。この土壙には北端で接する平面略円形の土坑があって、その規模は上縁径80~90cmを測る。この土坑と東4号墓とは土層の観察から、東4号墓(?)~円形土坑(?)という関係が認められた。この東4号墓より新しいと判断された土坑の性格については不明である。

東4号墓の西壁面には上縁よりやや下方に、傾斜変換線が走っている。一方、東壁面には上縁より約15cm下に幅10cmを測るテラスが削り出されている。このことからすると、この土壙は東西両手の壁にのみテラスが施されるタイプのものであったと考えられる。

なお、東4号墓、円形土坑とも遺物は認められなかった。



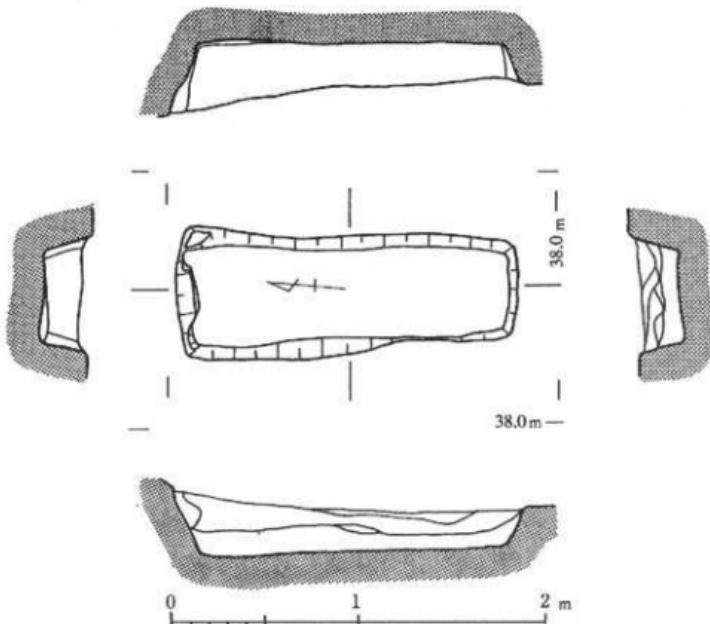
第11図 A I 区東 4号墓実測図

A I 区東 5号墓（第12図）東4号墓の西に位置する平面長方形の素掘りの土壙で、主軸方位はN-5°-Wとなっている。全長は183.5cm、北端上幅70cm、同下幅53cm、南上幅56cm、同下幅40cm、深さ40cmを測る。壙底はほぼ水平となっている。土壙の北端幅が南幅と比較してやや広いことから、被葬者の頭位は北方向と判断された。この土壙に伴う遺物は認められなかった。

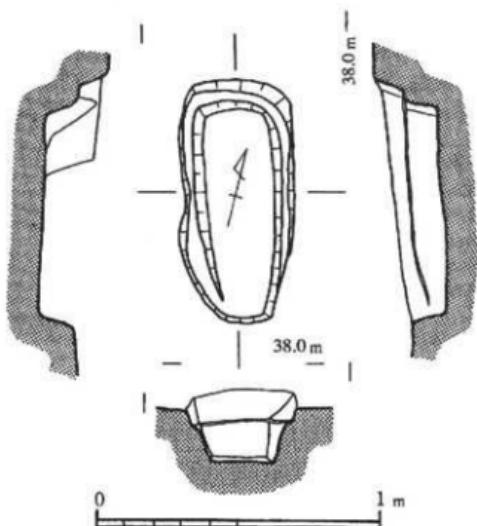
東 6号墓（第13図）東28号墓の西、東22号墓の北に位置する二段掘りの小土壙である。主軸方位はN15°Wとなっており全長84.5cm、北上幅39cm、同下幅23cm、南端下幅15cm、深さ26cmを測る。西、北、東の各壁面には上縁から下方5cmの位置に狭いテラスが削り出され、小さいながらも一応二段掘り土壙の体裁となっている。壙底は北方がやや高くなっている。被葬者の頭位は北方と判断された。これまで述べた東1・2号墓と同様に小型であることから成人土壙でない可能性が大きい。この土壙に伴う遺物は認められなかった。

A I 区東 7号墓（第14・15図）前述した東4号墓の北にあって、東西方向に走るA I 区東、尾根筋の中軸線上に位置している。この中軸線上には後に述べる東8・9・10・11号墓が西に連なって掘り込まれている。

このような一つのまとまりが認められるることは、各被葬者間の生前の密接な関係をものがたるものと推定される。土壙の主軸方位はN-10°-Wで、尾根筋と直交する形となっている。全長は210cm、北端幅90.5cm、同下幅60cm、南端幅85cm、同下幅50cm、深さ45cmを測る。西、北、東の各壁面には上縁から下方約10cmの位置に幅10cmのテラスが削り出され、二段掘りの土壙となっている。



第12図 A I区東5号墓実測図



第13図 A I区東6号墓実測図

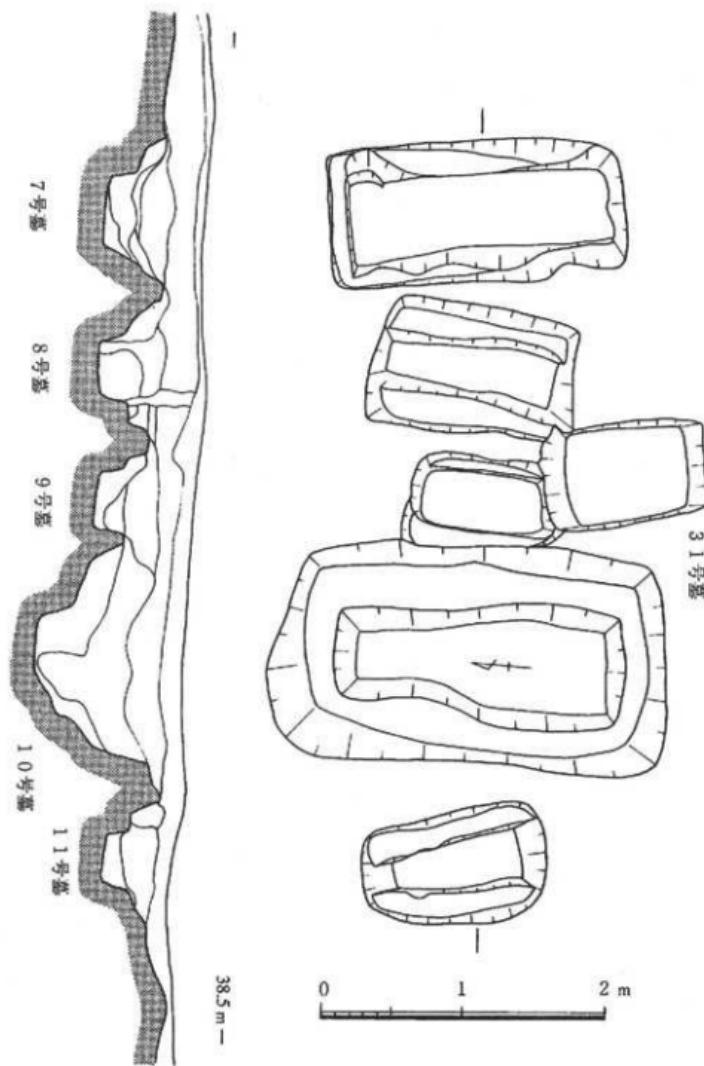
墳底はほぼ水平となっており、土壙の北端幅が南端幅と比較するとやや広いことから、被葬者の頭位は北方であろうと判断された。東壁のテラス北端が若干損なわれているのは樹根による搅乱によるもので、西、北、東の各壁のテラスは本来、被葬者の頭側にコの字形に施したものであったと推定される。この土壙に伴う遺物は認められなかった。

A I 区 東 8 号 墓 (第16図) 前述した東7号墓の西側に位置する二段掘りの土壙である。主軸方位はN-4°-Wとなっており、全長140cm、北端上幅95cm、南端上幅85cm、深さ44.5cmを測る。この土壙の西及び東壁には上縁から約20cm、下方に幅10~20cmのテラスが削り出されている。したがって、墳底幅は北端で23cm、南端で33cmを測る。土壙上縁の輪郭の大きさに比較すると墳底幅はやや狭いものとなっている。横底幅は南端が北端よりも若干広いことから、被葬者の頭位は南方と判断された。この東8号墓は南西隅において、東31号墓と重複関係が認められ、土層の観察から東8号墓(古)~東31号墓(新)という事実が確認できた。この土壙に伴う遺物は認められなかった。

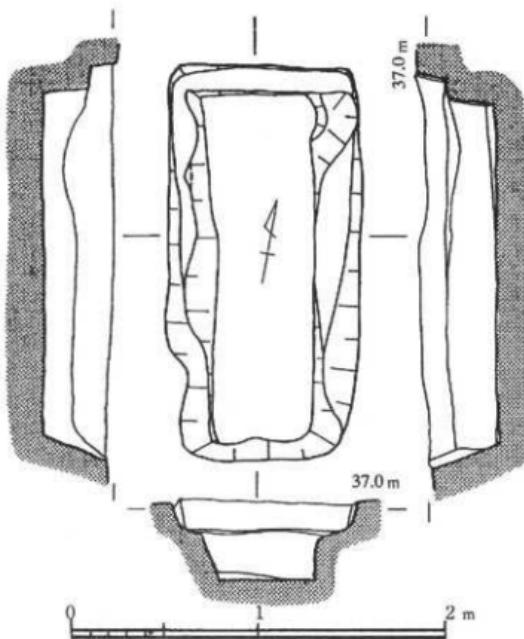
A I 区 東 9 号 墓 (第14・17図) 前述した東8号墓の西にあって、後述する東10号墓と東31号墓との間で重複関係が認められた。主軸方位はN-5°-Wとなっている。残存長95cm、南北端土壙底幅は40cm、深さ40cmを測る。東壁には上縁から約15cm下方に幅8cmのテラスが削り出されている。この東9号墓の西辺は東10号墓埋土を切り込む形で重複しており、輪郭の全体を検出しえなかつたが、土層観察用ベルト中に西側掘り込み痕跡を確認した。この痕跡を根拠とすると、中央部の上縁幅は85cmを測り、東壁と同様なテラスが削り出されていたことが知られる。被葬者の頭位については、横底はほぼ水平となっており、しかも土壙下端幅が南北ともほぼ同様な数値であるため決し難いものであった。文中でもふれたが、土層観察から東10号墓(古)~東9号墓(中)~東31号墓(新)といった関係が認められた。この土壙に伴う遺物は認められなかった。

A I 区 東 1 0 号 墓 (第14・18図) ほぼ等間隔で東西に並ぶ、東7号墓~11号墓のうち最も大型のものである。主軸方位はN-4°-Wとなっている。全長は280cm、北端上幅140cm、南端上幅150cm、深さ90.5cmを測る二段掘り土壙である。この土壙の四方の壁面には上縁より30~50cm下方に幅20~30cmのテラスがほぼ水平に向っている。したがって、これまで見てきたような長方形とならず中央より北方がやくびれた特異な形となっている。墳底も水平とならず、くびれより南方は若干高くなる傾向を示す。土壙の下段東西壁が一直線とならず、曲線を描くことからすると、ここに木製の棺材が添えられることはなかったものと思われる。

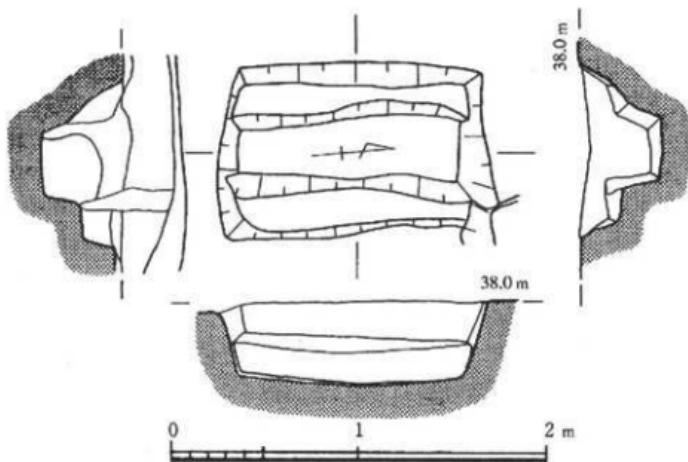
被葬者の頭位については、墳底幅を比較すると北端よりも南端がかなり広いことから、南方であろうと判断された。東に位置する東9号墓とは重複関係にあるが、東10号墓(古)~東9号墓(新)の根拠は前述したとおりである。なお、この土壙に伴う遺物は認められなかった。



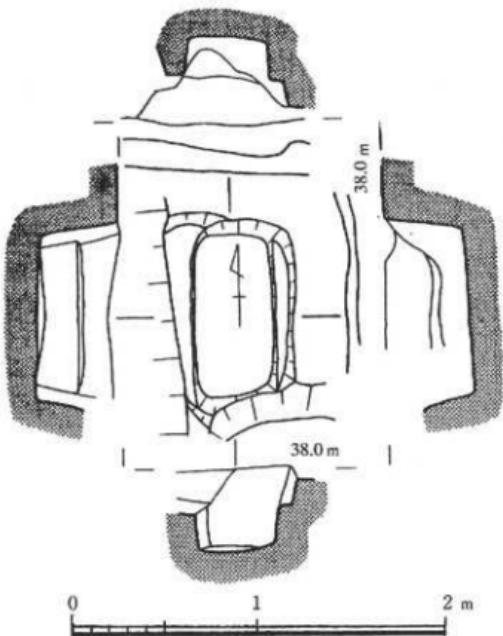
第14図 A I区東7~11・31号墓実測図



第15図 A T区東7号墓実測図



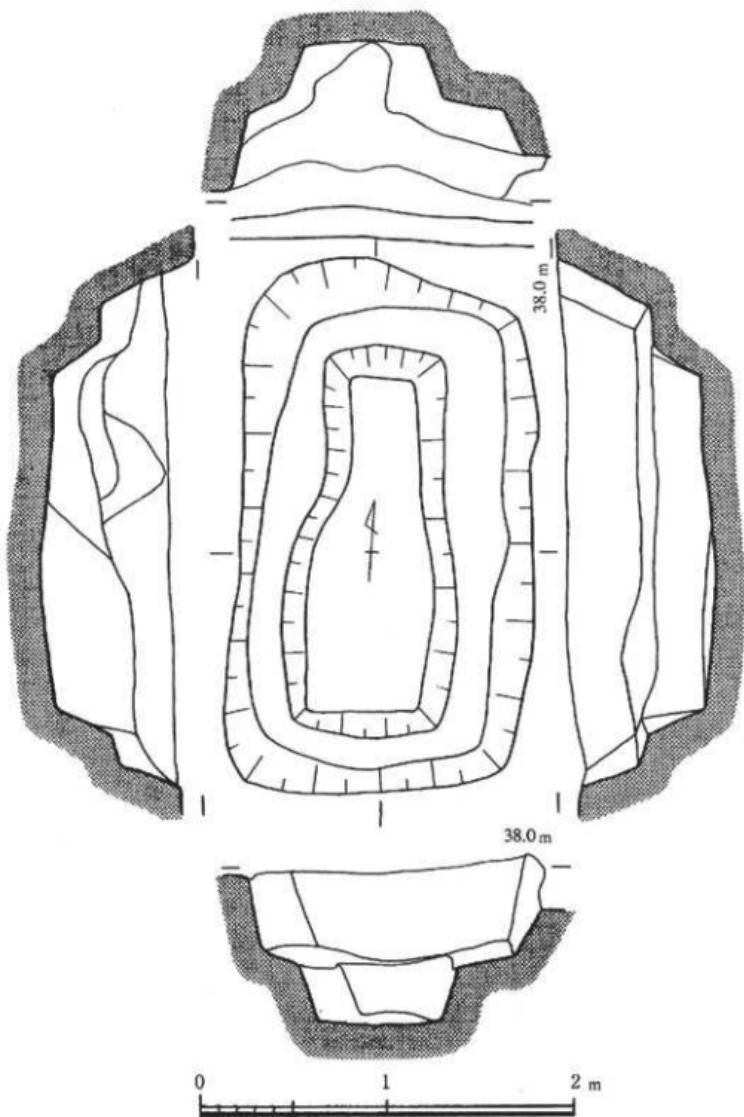
第16図 A 1区東8号墓実測図



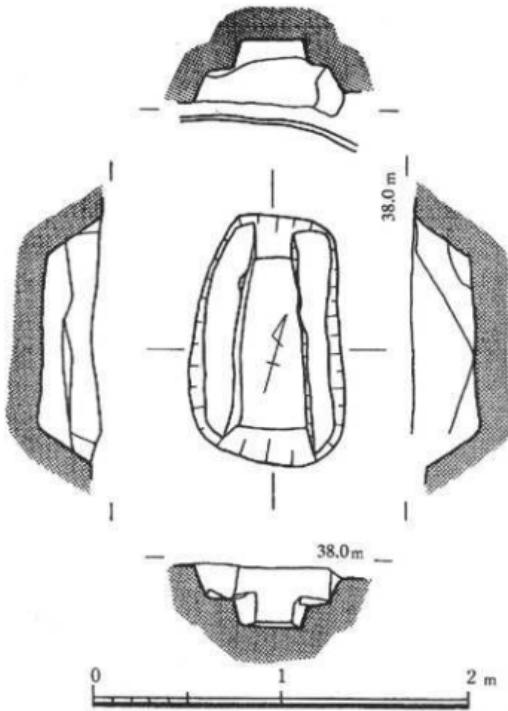
第17図 A1区東9号墓実測図

A1区東11号墓（第14・18図）東10号墓の西に位置する平面長方形の二段掘りの土壙で、主軸方位はN-4°-Wとなっている。全長130cm、北端上幅50cm、南端上幅80cm、深さ33.5cmを測る。この土壙の西及び東壁には上縁から下方20cmに幅15cmのテラスが削り出されている。したがって、壙底幅は北端で20cm、南端で35cmを測る。土壙の輪郭の大きさに比較すると土壙幅はやや狭いものとなっている点は東8号墓と同様といえよう。被葬者の頭位は壙底幅が北端に比較して南端が広いことから、南方と判断された。なお、この土壙に伴う遺物は認められなかった。

A1区東12号墓（第20図）この土壙は、前述した東1号墓の西方に位置している。ここは尾根の平坦面が北へ向かって下向し、やがて丘陵斜面にいたる傾斜変換点付近にあたっており、東西方向に走る等高線とほぼ平行する形で掘り込まれている。土壙の平面は隅丸長方形を呈し、主軸方位はN-96°-Wとなっている。全長213cm、西端上幅60cm、東端上幅50cmを測る。四方の各壁は上縁から20cm下方に幅のテラスがほぼ水平に削り出されている。このテラス面から下方へ40cm掘り下げられており壙底幅も西端がやや広いことから、被葬者の頭位は西方と判断された。



第18図 A1区東10号墓実測図



第19図 A I 区東11号墓実測図

この土壙は他のものと比較すると、細長く感じられた。これに伴う遺物については、土壙の西方上面で供獻用の土師器片が若干出土した。

出土遺物（第21図）東12号墓からの出土遺物には、埋葬後土壙上面に供獻されたものと推定される土師器があった。

図示可能なものは4点あって、いずれも複合口縁を呈す変形土器の口縁部である。

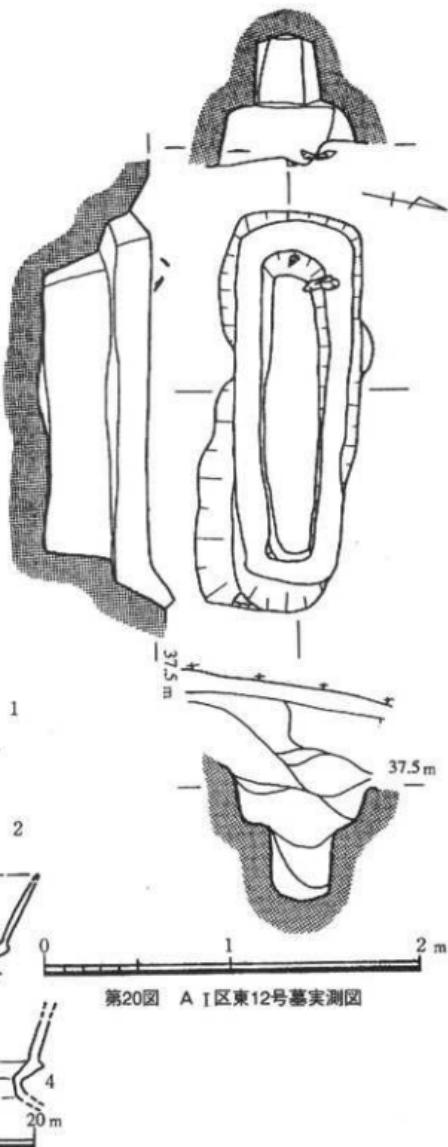
(1)は淡い赤黄色をしており、焼成は良好とは言い難い。端部は欠損しており、残存最大径13cmを測る。口縁部の立ちあがりは、ほぼ垂直となっており、胎土は緻密で器壁は薄い。(2)は淡い黄色をしており、比較的良好である。口縁はゆるやかに外反しながら立ちあがる形となっている。ただ口縁端を欠損しており、残存口径は16cmを測る。この部分の内外面は横ナデ仕上げとなっている。内面頸部以下には横方向のヘラ削りが認められる。胎土は緻密で、器壁は薄い。

(3)は淡い白黄色を呈し、焼成は良好とは言い難い。口縁の立ちあがりは直線的に外へ開く形となっている。この部分は内外面とも横ナデ仕上げとなっている。口縁端部は欠損しており、残存口縁最大径は20cmを測る。胎土は緻密である。(4)は淡い黄色をしており、焼成は比較的良好である。(3)

と同様、口縁の立ちあがりは直線的に外へ開く形となっている。頸部から立ちあがり部の境となっている小突起帯にはヘラ先によるとみられる刺突文が認められる。口線上端を欠損しており、残存最大径21.4cmを測る。立ちあがり部の内外面は横ナデ仕上げとなっている。器壁は薄く、内面は頸部以下横方向ヘラ削りとなっている。

A I 区東1 3号墓（第22図）

東12号墓の南に位置する平面

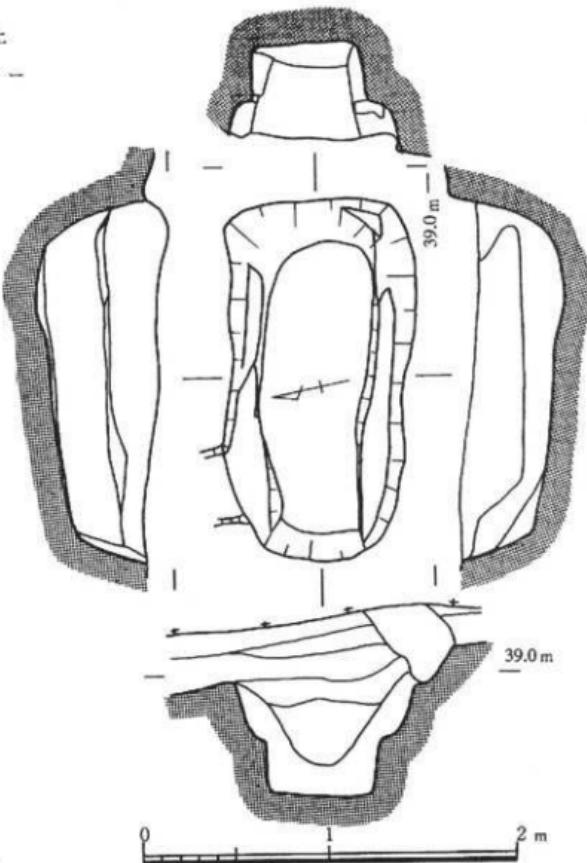


第20図 A I 区東12号墓実測図

第21図 A I 区東12号墓出土遺物実測図

隅丸長方形の二段掘りの土壙で、主軸方位はN-75°-Wとなっている。全長193cm、西端上幅70cm、東端上幅100cm、深さ70cmを測る。北、南各壁面には上縁から下方30cmの位置に狭いテラス削り出されている。墳底幅は西端が45cm、東端が55cmを測り、このことから、被葬者の頭位は東と判断された。こここの土壙に伴う遺物は認められなかった。

A I 区 東 14 号 墓  
 (第23図) 東13号墓の西に位置する二段掘り土壙で、主軸方位はN-30°-Eとなっており、全長197cm、南端上幅100cm、北端上幅95cm、深さ102cmを測る。東西南北の各壁には上縁から下方60~70cmの位置にはば10cmほどのテラスがほぼ水平に回っている。墳底幅は南端が50cm、北端が35cmを測り、被葬者の頭位は南西方向と判断された。この土壙に伴う遺物は認められなかった。

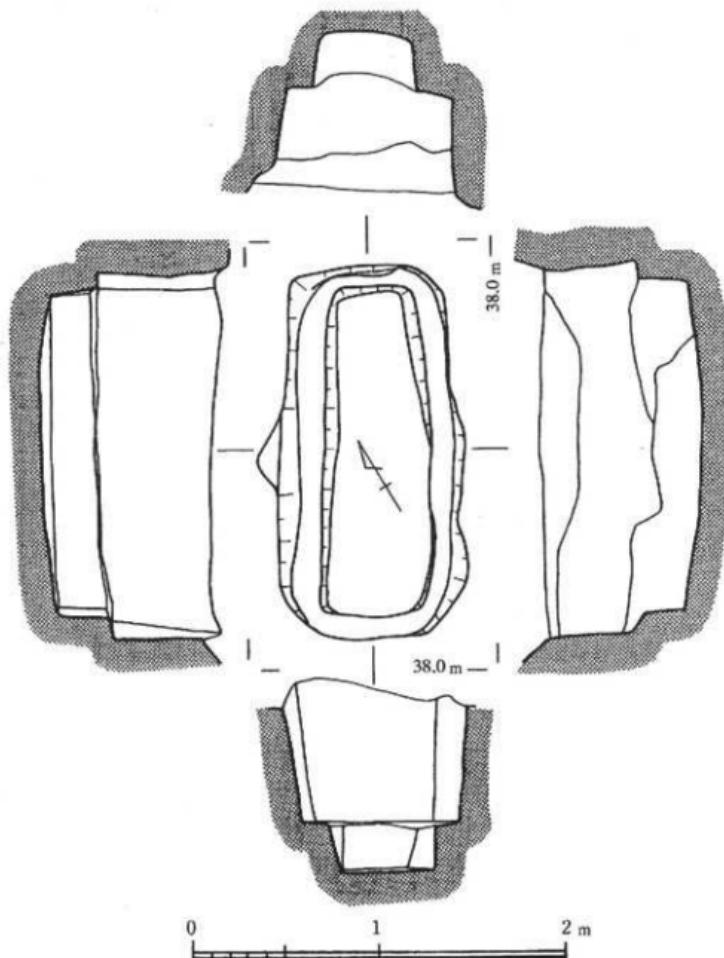


第22図 A I 区 東 13号 墓 実測図

A I 区 東 15 号 墓 (第24図) 東14号墓の西に位置する平面長方形の二段掘り土壙で、主軸方位はN-85°-Wとなっている。全長は177.5cm、西端上幅75cm、東端上幅85cm、深さ80cmを測る。北、南両壁には上縁から下方20cmの位置に幅15cmのテラス削りだされている。墳底幅は西端が40cm、東端45cmを測る。被葬者の頭位と推定した部分は墳底と同様ほぼ水平となっているが、墳底幅を考慮すると東方であろうと判断された。

この土壤に伴う遺物は認められなかった。なお土壤の上縁南東隅に樹根による搅乱が認められた。

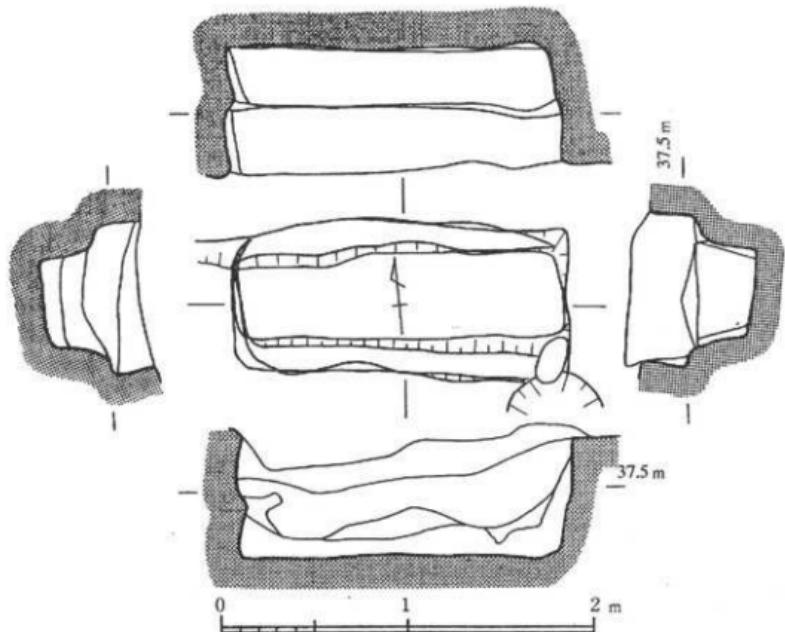
A I 区 東16号墓（第25図） 東15号墓の南に位置する平面隅丸長方形の二段掘りの土壤で、主軸方位はN-75°-Eとなっている。この土壤は北隅において、後述する東34号墓との重複関係がある、東16号墓(古)～東34号墓(新)という関係が認められた。全長215cm西端上幅深さ56cmを測る。ただし東端の上下幅は東34号との重複により、計測是不可能であった。東西南北の各壁面には、上縁から下方20cmの位置に10cm幅のテラスが削り出され、ほぼ水平に回っている。被葬者の頭位は横



第23図 A I 区 東14号墓実測図

底幅、レベル等を合わせ考えると、西方と判断された。これに伴う遺物は認められなかった。

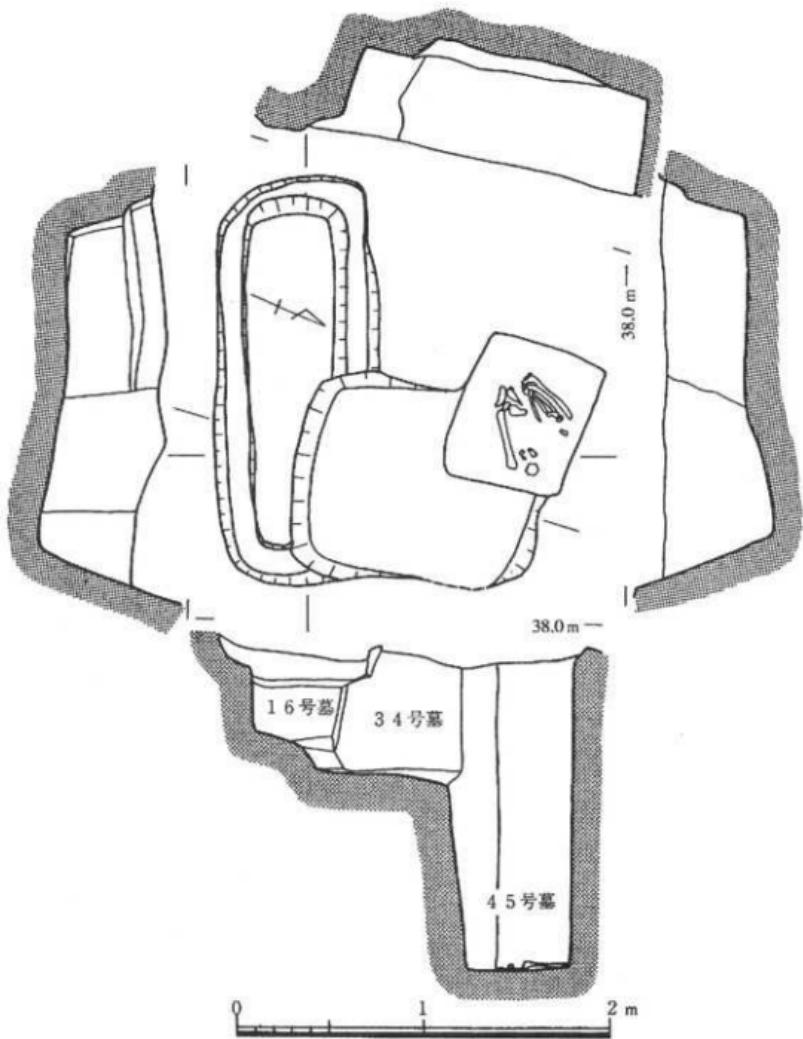
A I 区東17号墓（第26図）東16号墓の西に位置する平面長方形の二段掘り土壙で、主軸方位はN-80°-Wとなっている。全長185cm、東端上幅55cm、深さ57cmを測る。西端上幅は上部が削平されているため、計測是不可能である。北、南の各壁には上縁から下方15cm~30cmの位置に狭いテラスが削り出されている。つまり、土壙長手沿いにのみテラスの付くタイプのものである。壙底幅



第24図 A I 区東15号墓実測図

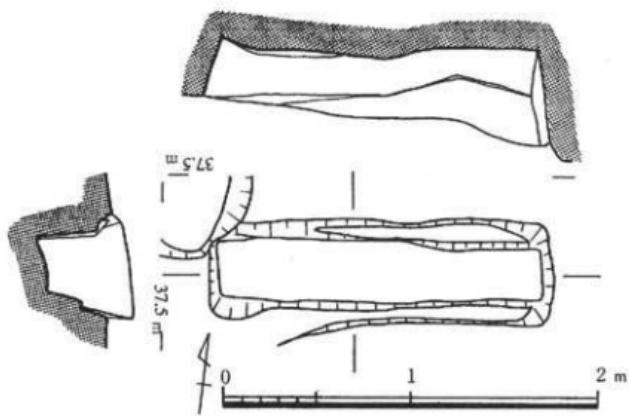
は西端が30cm、東端が25cmを測る。壙底面はかなり凹凸がみられる。この土壙の北西隅では、直径60cmを測る断面皿形の土坑があって、両者は重複している。土層の観察から東17号墓（古）～円形土坑（新）であることを確認した。東17号墓に伴う遺物は認められなかった。

A I 区東18号墓（第27図）東17号墓の北に位置する平面長方形の二段掘り土壙で、主軸方位はN-8°-Wとなっている。この土壙は南と北の一部で、後述する東50・53号墓との重複が認められた。東18号墓（古）～東53号墓（新）という関係が認められた。長軸残存長210cm、南端残存上幅90cmを測る。東、西の各壁面には上縁から20cm下方に幅10cmのテラスが削り出されている。東53号墓との重複状況は、東18号墓の南端幅に添う形で、この土壙を掘り抜き、東53号墓の北端は前者の中央

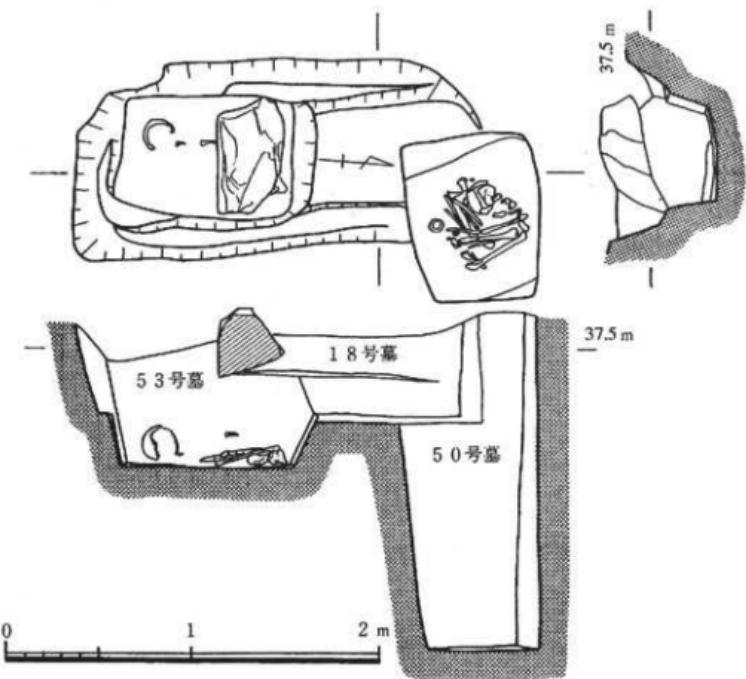


第25図 A1区東16・34・45号墓実測図

にまで達している。したがって、東18号墓の壇底は中央より北側にのみ確認された。しかし北側壇底もまた東50号墓によって掘り抜かれているため、残存面積は狭いものとなっている。壇底はほぼ水平となっている。被葬者の頭位は、南・北端の幅を比較すると南がやや広いことから、南方と判断された。東18号墓に伴う遺物は認められなかった。



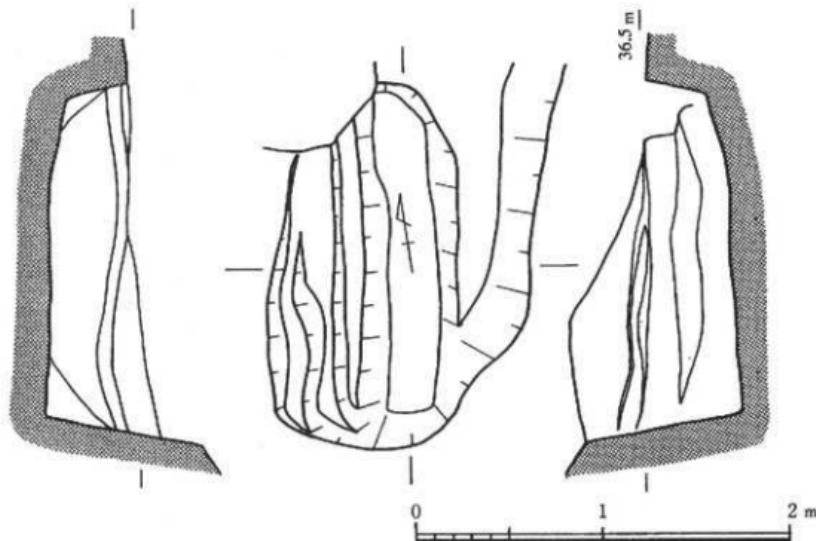
第26図 A I区東17号墓実測図



第27図 A I区東18・50・53号墓実測図

A I 区東19号墓(第28図) 丘陵の北西傾斜変換点付近に位置する平面長方形の土壙で、主軸方位はN-10°-Eとなっている。土壙が掘られている位置は、傾斜変換点であるとともに土質が脆弱で、西及び北端上縁が流失している。したがって壙底全長165cm、壙幅25cmを測る。西壁は数段のテラスが削り出されいるように見えたが、脆弱な土質のため本来の加工痕跡を把握しえなかつた。これに伴う遺物は認められなかつた。なお被葬者の頭位は即断し難い。

A I 区東20号墓(第29図) 東19号墓の西に位置する平面隅丸長方形の土壙で、主軸方位はN-105°-Wとなっている。丘陵端部の等高線に沿う形で掘りこまれている。南側の長手上縁は二段掘りとなっているが、北側は素掘りとなっていた。これは丘陵の傾斜角度からすると、南側長手部分ほどのたちあがりは本来なかつものと推測される。壙底主軸長210cm、西端幅は65cm、東端幅40

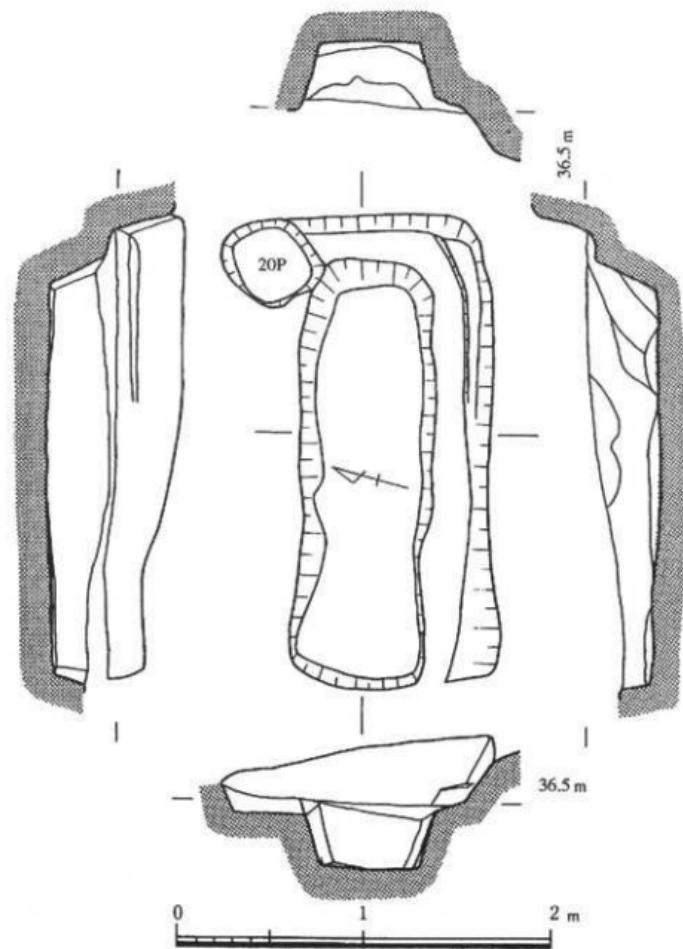


第28図 A I 区東19号墓実測図

cm、南側テラス以下の深さは30cmを測る。この土壙は北東隅において、直径50cm、深さ25cmを測る土坑と重複しており、東20号墓(古)～土坑(新)という関係が認められた。

土坑内からは若干の土師器壺片が出土した。なかには壺の胴部とみられる破片もあったが、図示可能なものは少なかつた(第30図)。(1)は口径17cmを測る壺形土器で、器壁は比較的厚い。複合

口縁のなごりを留め、たちあがり部は短い。内外面とも小豆色を示し焼成はややあまい。(2)は前述したものとほぼ同様の口径で、焼成は良好で、レンガ色を示す。肩部内面には横方向のヘラ削りが認められる。外面は粗い横ナデ痕がみられる。(3)口径23cmを測る変形土器で、略逆ハの字状を呈す。口縁部には微かに複合口縁のなごりがみられる。これらはいずれも古墳時代前期末ごろのものと推定される。



第29図 A I 区東20号墓実測図

S D 0 1 東2号墓

の東端から東32号墓の東端に向かって走る、幅約80~100cm、深さ10cmを測る溝状遺構で断面は皿形を示す。

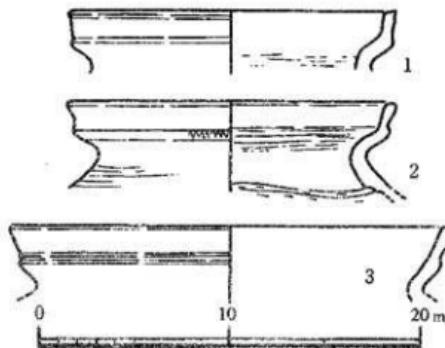
この溝状遺構から高さ26cmを測る土師器の直口壺1点が出土

した(第31図)。これ

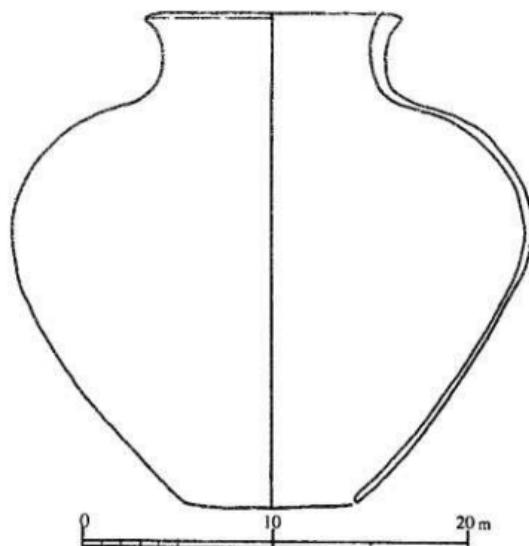
は口径13cmで腹部最大径27cm底部は平底となっており、径9cmを測る。ただ、底部は穿孔されているが、焼成以前か、あるいは以後かは判断し難い。口縁端部は肥厚するものの器壁は全体に薄く、0.4cmを測る。

A I 区 東2 1号墓(第32図) 東20号墓の南に位置する、壠方の平面は椭円形を呈す土壙で、壠底は長方形を呈し、主軸方位N=120°-Wを測る。上縁長径180cm、短径110cm、深さ73cmとなっており、壠底幅は西端で40cm東端は20cmを測る。南と北壁には壠底から30cm上方に、幅10cmのテラスが削り出されている。壠底はほぼ水平となっており、被葬者の頭位は壠底西端幅が東端幅より広いことから、西方と判断された。この土壙関係する遺物は認められなかった。

なお南北隅の平面



第30図 A I 区 東20号墓出土遺物実測図



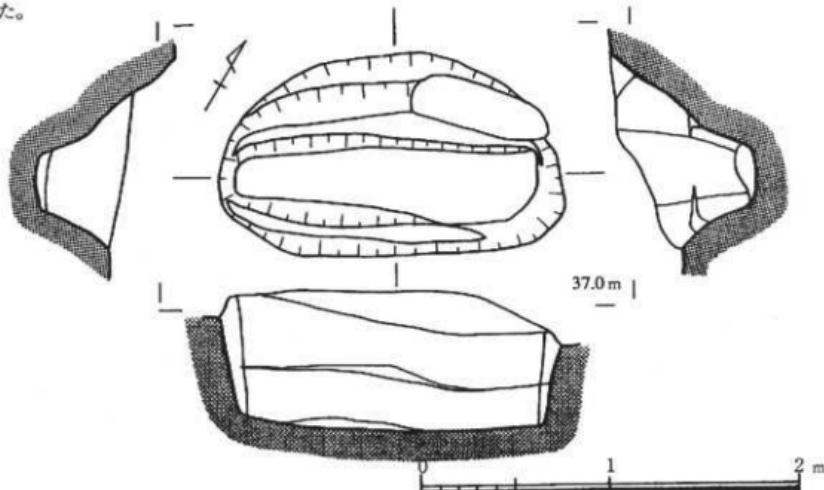
第31図 A I 区南北構内出土遺物実測図

梢円の土坑は樹根による擾乱である。

A I 区東2 2号墓(第33図) 東5号墓の西、東6号墓の南に位置する、平面長方形の二段掘りの土壙で、主軸方位はN-90°-Wとなっている。全長200cm、西端上幅75cm、東端上幅70cm、深さ51cmを測る。

この土壙の東西南北の各壁には、上縁から下方20cmの位置に、幅15cmのテラスがほぼ水平めぐつていている。したがって、壙底幅は西端で40cm、東端で35cmを測る。被葬者の頭位は、西端の壙底幅が南に比較して、やや広いことから西方と判断された。この土壙に關係する遺物は認められなかった。

A I 区東2 3号墓(第34図) 東22号墓の西に位置する平面梢円形素掘りの土壙で、主軸方位はN-45°-Wとなっている。長径50cm短径30cm深さ14cmを測る。壙底幅は北端で30cm、南端で15cmとなっており、壙底は北方のレベルが若干高くなっている。この土壙に關係する遺物は認められなかつた。

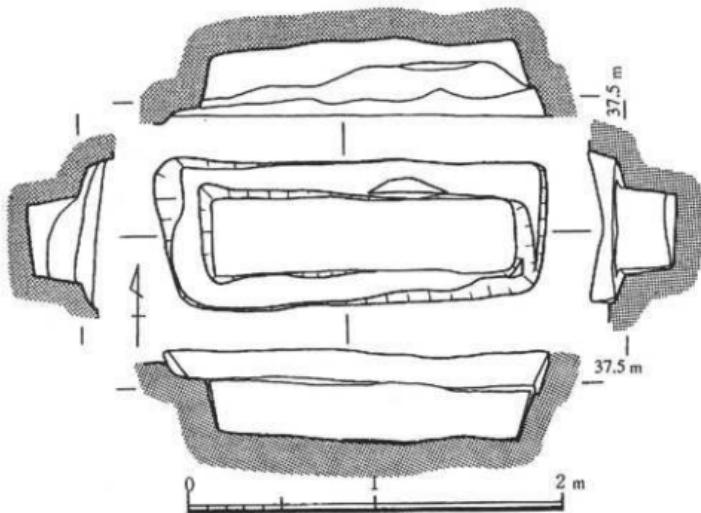


第32図 A I 区東21号墓実測図

A I 区東2 4号墓(第35図) 東23号墓の西に位置する平面長方形の素掘りの土壙で、主軸方位はN-10°-Wとなっている。全長235cm、北端上幅70cm、南端上幅45cm、深さ33cmを測る。壙底幅は北端が60cm、南端が40cmとなっており、北方が幅広であることから被葬者の頭位は北方と判断された。

この土壙に關係する遺物は認められなかった。なお、検出面から壙底までの計測値が小さいことから、二段掘り土壙の上段が流失した可能性も考慮されよう。

A I 区東2 5号墓(第36図) 東24号墓の北に位置する平面梢円形の土壙で、主軸方位はN-115



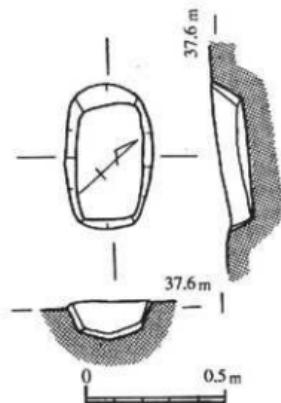
第33図 A I 区東22号墓実測図

Wなっている。全長125cm、東端幅45cm、西端幅30cm、深さ40cmを測る、小型に属するものである。

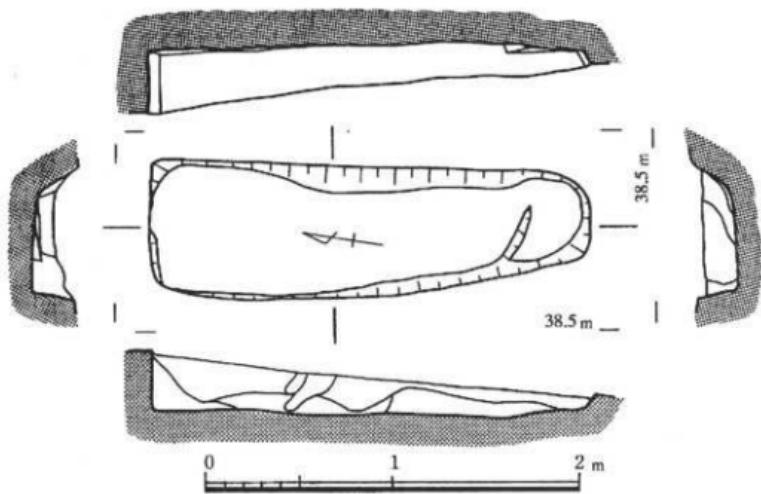
この土壙の北壁と南東コーナーの一部に、幅5cmのテラスが削り出されている。この土壙で注意すべきは、西壁に小さなポケットとでも称すべき横穴が伴うことである。

A I 区東26号墓(第37図)東24号墓の西に位置する平面長方形の土壙で、主軸方位はN-100°-Wとなっている。全長145cm、西端上幅35cm、東端上幅35cm、深さ22cmを測る。壙底は東方のレベルが若干高くなっていることから、被葬者の頭位は東方と判断された。これに関係する遺物は認められなかった。この土壙はきわめて浅いことから、二段掘り土壙の上段が流失した可能性も考慮されよう。

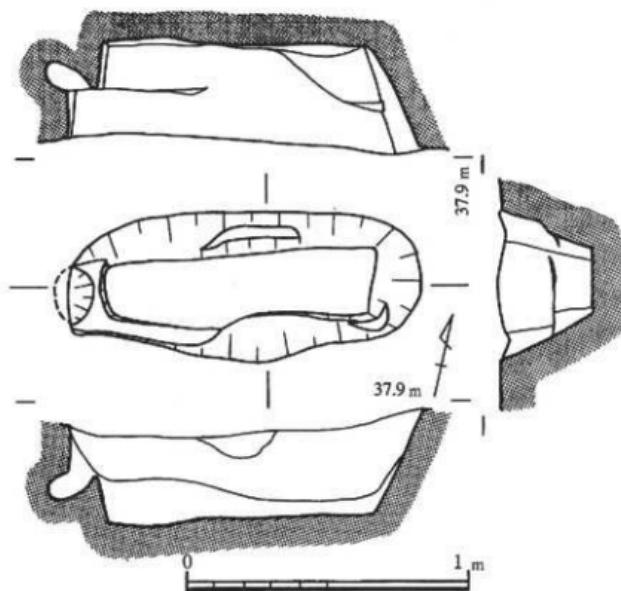
A I 区東27号墓(第38図)東26号墓の南に位置する平面長方形の土壙で、主軸方位はN-10°-Wとなっている。全長200cm、北端上幅80cm、南端上幅75cm、深さ27cmを測る。壙底はほぼ水平となっており、両端壙底幅も差がなく、被葬者の頭位は即断し難いが、現場では北方と判断された。



第34図 A I 区東23号墓実測図



第35図 A I区東24号墓実測図



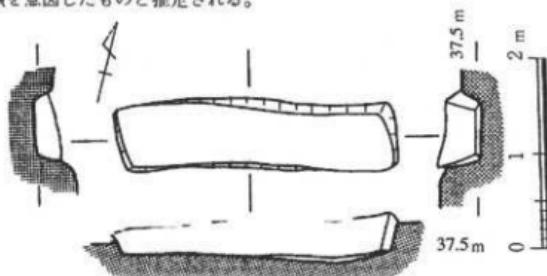
第36図 A I区東25号墓実測図

A I 区東 28 号墓 (第39図) 東6号墓の東に位置する平面長方形の土壙で、主軸方位は N-90° - W となっている。全長180cm西端上幅75cm東端上幅85cm深さ50cmを測る。この土壙の北壁には上縁から下方20cmに幅10cmのテラスが削り出されている。一方南壁にはテラスは認められないが、北壁テラスに対応する位置で壁の掘り込み角度が変化している。このことから、この土壙が長手壁沿いにテラスをもつ二段掘り土壙を意図したものと推定される。

#### A I 区東 29 号墓

(第43図) A I 区東の調査区、東方の丘陵中央平坦面に掘りこまれた平面隅丸方形の土壙で、比較的堅硬な地山に掘りこまれている。

この土壙の南には隣接

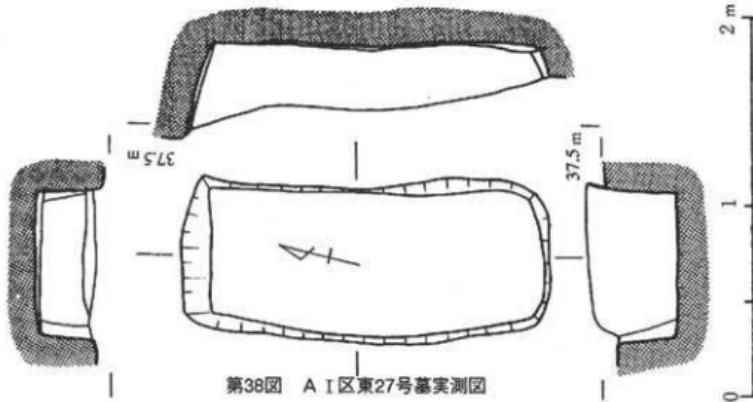


第37図 A I 区東26号墓実測図

して、後述する東30号墓が掘りこまれている。主軸方位は N-0° - W となっている。主軸残存長90cm、北端上幅90cm、同下端40cm、南端上幅70cm、同下幅40cm、深さ52cmを測る。墳底は上縁と同様隅丸方形となっている。

墳底の中央やや南よりに、東西35cm、南北25cm、深さ3cmを測るきわめて浅い落ち込みが認められた。前述したように、南に接する東30号墓とは重複しており、土壙の観察から東30号墓(古)～東29号墓(新)という関係が確認された。この土壙に關係する遺物は認められなかった。

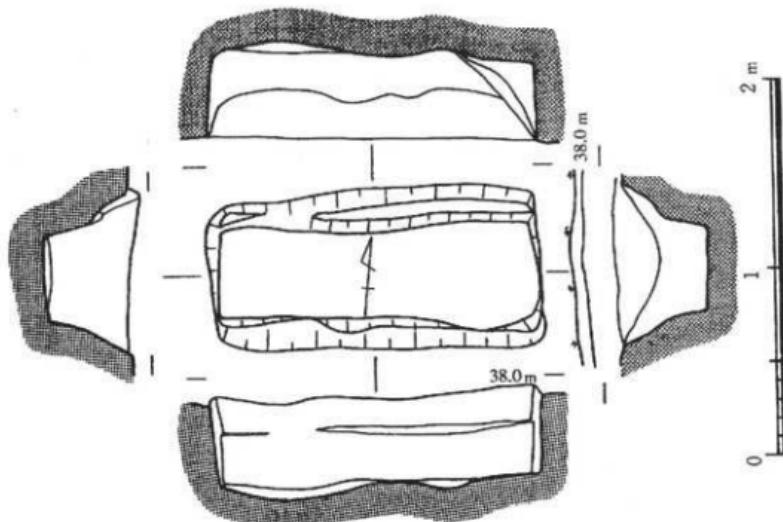
A I 区東 30 号墓 (第43図) 先の東29号墓の南にあって、重複關係にあることは前述したとおりである。平面隅丸方形の土壙で、主軸方位は N-25° - W となっている。主軸残存長(東30号墓南



第38図 A I 区東27号墓実測図

端から同29号墓の南端)105cm、南端上幅90cm、同下幅65cm、北端上幅90cm、同下幅60cm、深さ47cmを測る。墳底面は南方がやや高くなっている。北方との高低差は15cmを測る。墳底の平面形は上縁と同様な隅九方形となっている。これに關係する遺物は認められなかった。

A I 区東31号墓(第42図) 東28号墓の北に位置する方形土壙で、主軸方位はN-3°-Wとなっている。前述したが、この土壙の北端は東9号墓と重複しており、土層観察から東9号墓(古)~31

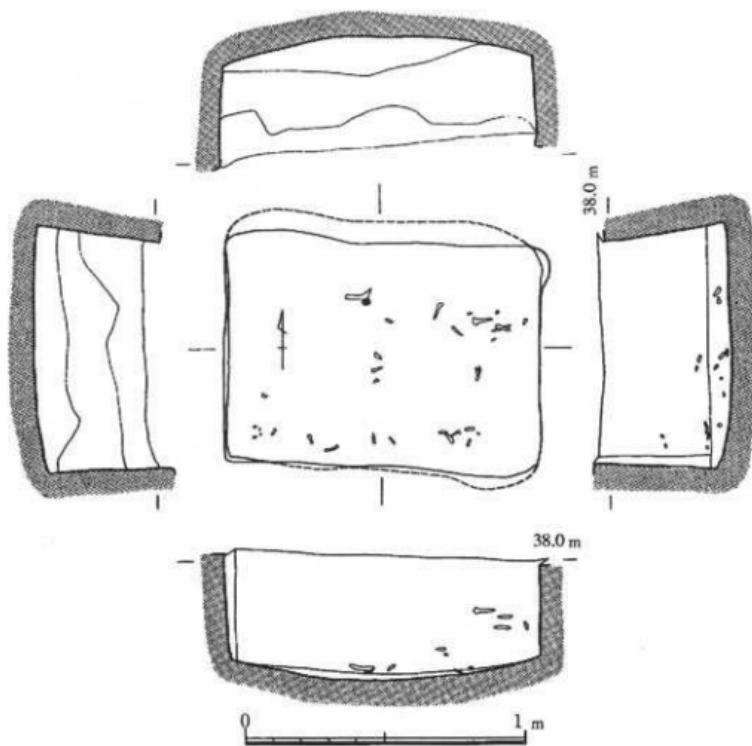


第39図 A I 区東28号墓実測図

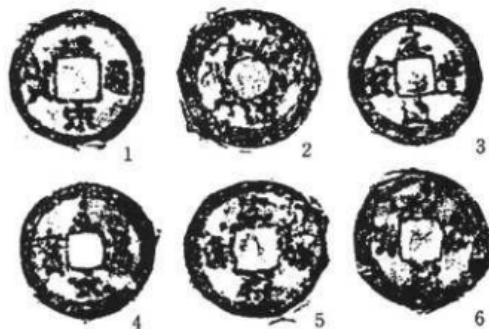
号墓(新)という關係が認められた。主軸方向残存上縁長115cm、北端上幅70cm、同北端下幅65cm、南端上幅65cm、同下幅55cm、深さ47cmを測る。墳底面はほぼ水平となっている。これに關係する遺物は認められなかった。

A I 区東32号墓(第40図) A I 区東の最も東方にあって、東30号墓の東に位置する平面方形の素掘り土壙で、主軸方位はN-90°-Wとなっている。つまり南北辺より東西辺が若干長くなっている。全長110cm、西端上幅、東端上幅ともほぼ同長の75cm、深さは45cmを測る。西、東、南壁ともほぼ垂直に掘りこまれているが、北壁は上辺よりもやや外に張り出した形となっている。土壙の中央より東方の墳底から数cm浮いて人骨片、鉄釘12点出土した。この他、人骨片は南西隅墳底面でも見られた。人骨片はいずれも脆くなっていた。この北壁中央やや北よりで銭貨6枚が重なって出土した。

銭貨(第41図) いわゆる六道錢と称されるもので、いずれも波来錢である。内訳は至道元寶1、皇宗通寶3、元豐通寶1、元祐通寶1があった。



第40図 A I区東32号墓実測図

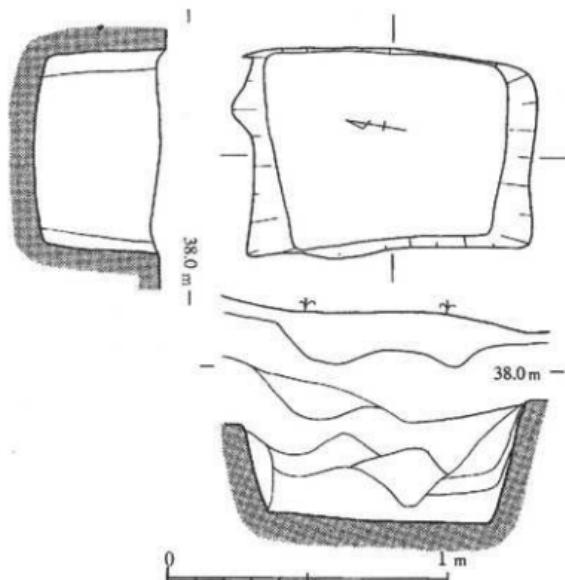


第41図 A I区東32号墓出土遺物拓影 1:1

A I 区東34号墓(第44図) A I 区東調査区のはば中央に位置しており、東16号墓、同45号墓と重複している。土層の観察から東16号墓(古)～東34号墓(中)～東45号墓(新)という関係が確認された。主軸方位はN-23°-Wとなっており、南北辺が東西辺よりやや長い。四方の墻はほぼ垂直に掘りこれ、南北長132cm、東西長95cm、深さ60cmを測る。この土壤は重複関係にある東16号墓の墳底を掘りこんで底面が形成されており、その差は10cmを測る。しかしこの東34号墓の墳底北西隅も東45号墓によって、その4分の1を失っている。墳底面は中央より南が若干窪んでいる。

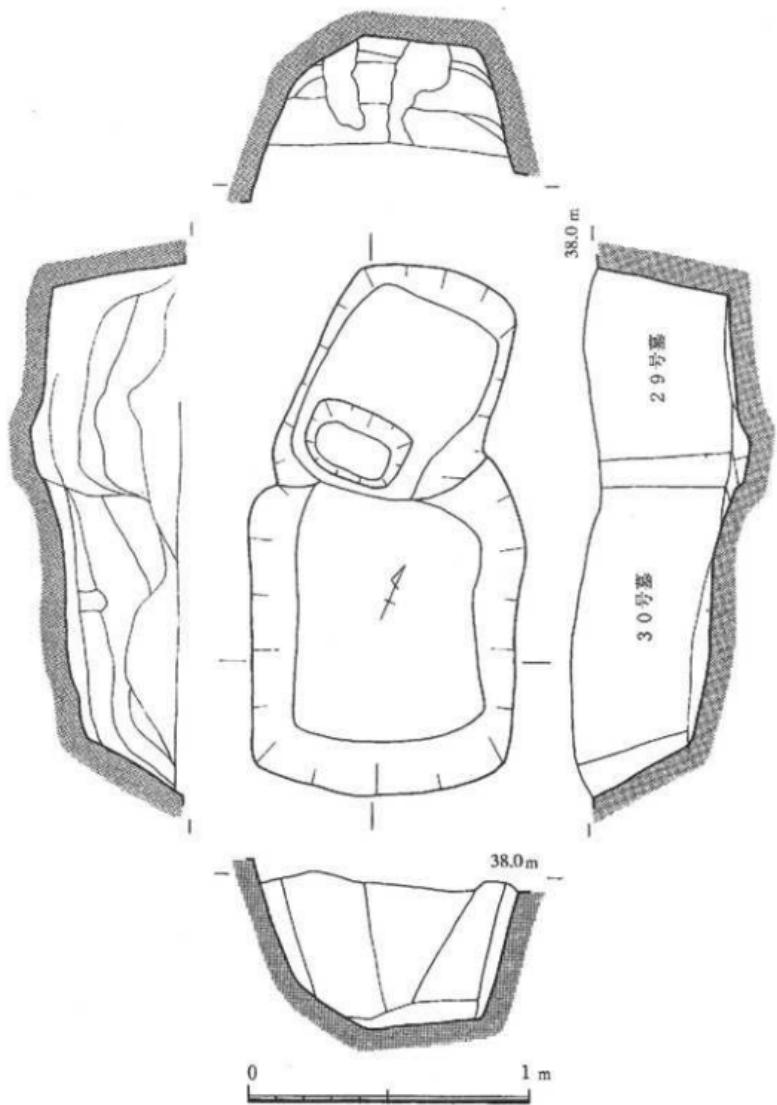
この土壤に關係する遺物は認められなかった。

A I 区東35号墓(第45図) この土壤はA I 区東の尾根上の平坦面が、やがて北側斜面にいたる



第42図 A I 区東31号墓実測図

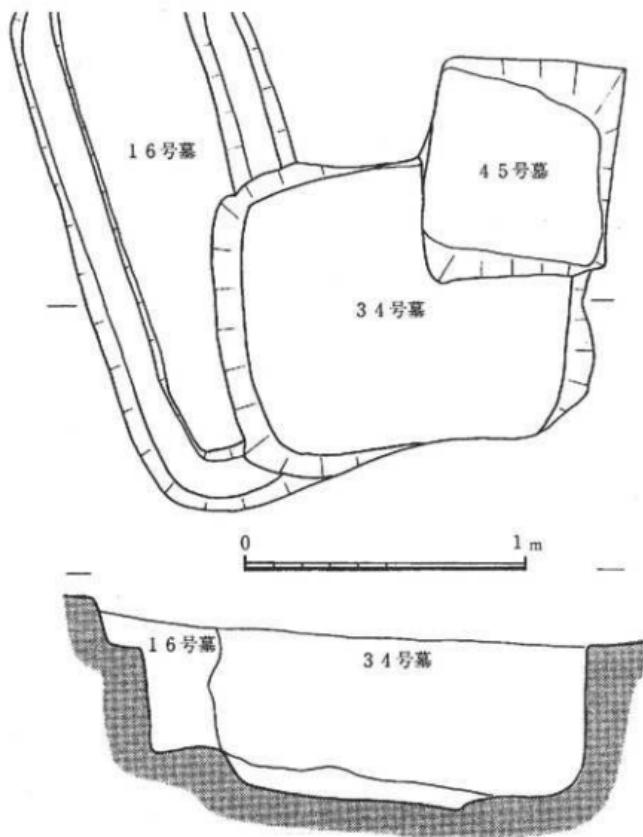
傾斜変換点付近に位置する平面小判形の素掘りのもので、主軸方位はN-50°-E、全長94cm、北端上幅45cm同下幅35cm、南端上幅50cm、同下幅37cm、深さ45cmを測る。墳底の平面形は隅丸長方形で、ほぼ水平となっていた。この土壤上面は総重量39・6kg測る拳大の角礫が覆っており、その厚さは約30cm、その最深部と墳底までは距離は15cmとなっていた。土壤内では、前述した角礫以外に遺物は認められなかった。ただし、この土壤の北側掘方付近で、鐵器1が出土した。しかし、これらが東35号墓に直接關係するか否かは断定しないものであった。



第43図 A I 区東29・30号墓実測図

鉄器(第46図)長さ6cm、幅2cm、厚み0・5cmを測り、上辺には木質が付着している。形態からすると、いわゆるカスガイ型櫛金であろうと判断した。しかし成分分析の結果は、炭素量が低く、燧石と接触しても火花を生じないものであることが判明した。<sup>(4)</sup>

A I 区東36号墓 (第47図) 東35号墓の西に位置する平面隅丸方形の素掘り土壙で、主軸方位はN-40°-Eとなっている。この土壙は西側隅において、後述する東46号墓との重複があって、東36号墓(古)～東46号墓(新)という関係が認められた。全長80cm、北端上幅50cm、同下幅40cm、残存南上幅50cm、深さ35cmを測り、壙底面はほぼ水平となっており、平面形は隅丸方形であったと推定された。なお、これに關係する遺物は認められなかった。



第44図 A I 区東16・34・45号墓実測図

### A I 区東37号墓

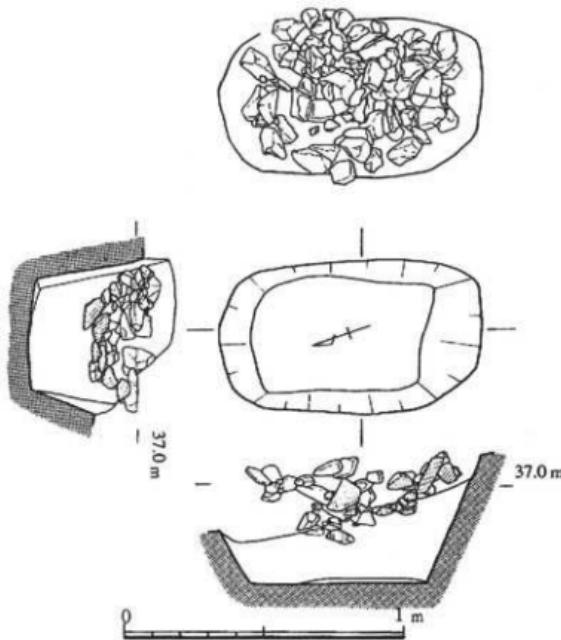
(第48図) 東36号墓の西に位置する平面小判形の素掘りの土壙で、主軸方位はN-20°-Wとなっている。

この土壙は南の一部で後述する東38号墓と重複が認められた。しかし両者の前後関係を明かにするには至らなかった。長径87cm、短径60cm、深さ50cmを測り、壙底の長径53cm、短径30cmとなっている。この土壙上面には総量49・5kgを測る拳大の角礫が覆っており、堆積層の厚さは40cm、最深部と壙底までは20cmとなっていた。この土壙

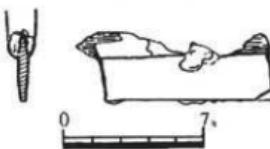
では角礫以外に遺物は認められなかった。

A I 区東38号墓 (第49図) 東37号墓の南端に接して掘りこまれる、平面形は小判形の素掘り土壙で主軸方位はN-20°-Wとなっている。上縁の長径80cm、短径50cm、深さ30cmを測り、壙底の長径70cm短径40cmで、壙底はほぼ水平となっている。この土壙に関係する遺物は認められなかった。

A I 区東39号墓 (第50図) 東19号墓の南東に位置する平面小判形の素掘り土壙で主軸方位はN-110°-Wとなっている。上縁の長径70cm、短径55cm、深さ55cmを測り、壙底の形状も上縁と同様に小判形をしており、長径55cm、短径40cmとなっている。これに關係する遺物は認められなかった。



第45図 A I 区東35号墓実測図



第46図 A I 区東35号墓付近出土遺物実測図

A I 区東 4 0 号墓 (第51図) 39号墓の西に位置する平面方形の土壙で、主軸方位はN-28°-Wとなっている。

全長100cm、中央上幅80cm、深さ75cmとなっており、西側壁には上縁より50cm下方に幅20cmのテラスが削り出されている。壙底は方形をしており、西側端長55cm、東側端長50cmを測り、ほぼ水平となっている。この土壙からの出土遺物は人頭大の石が1個あって、南壁付近の壙底から40cm浮いた形で出土した。この石は、丘陵の各所にみられる岩盤の露頭と同じものと判断された。特別人の手が加わった痕跡は認められなかった。

A I 区東 4 1 号墓 (第52図) 東40号墓の南に隣接する平面方形の素掘り土壙で、主軸方位はN-120°-Wとなっている。

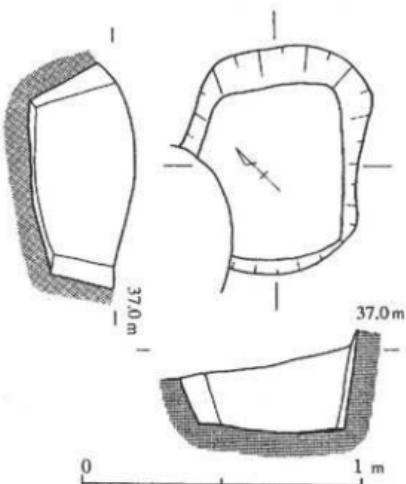
全長130cm、東端上幅105cm、同下幅65cm、西端上幅95cm、同下幅65cm、深さ100cmを測る。この土壙内には総重量42・5kgを測る拳大の角礫が堆積している。この角礫は土壙の北隅から東辺にかけて集中してみられ、堆積層の厚みは約40cm、最深部から壙底までの距離は50cmとなっていた。土壙内においては、これら角礫以外の遺物は認められなかった。

A I 区東 4 2 号墓 (第53図) 東10号墓と東13、14号墓との間に挟まる形で掘りこまれているもので、平面ほぼ正方形の素掘りの土壙である。主軸方位N-23°-Eとなっており、上縁は一辺70cm、深さ75cm壙底の各辺は55cmを測る。壙底には熟年後半と推定される男性人骨1体がみられた。埋葬形態は立膝座位で、頭位S-5°-Eとなっていた。人骨以外の遺物としては、錢貨6の他、土壙の北東隅から土師質土器皿1が、円礫1が南西隅の人骨の下から出土した。

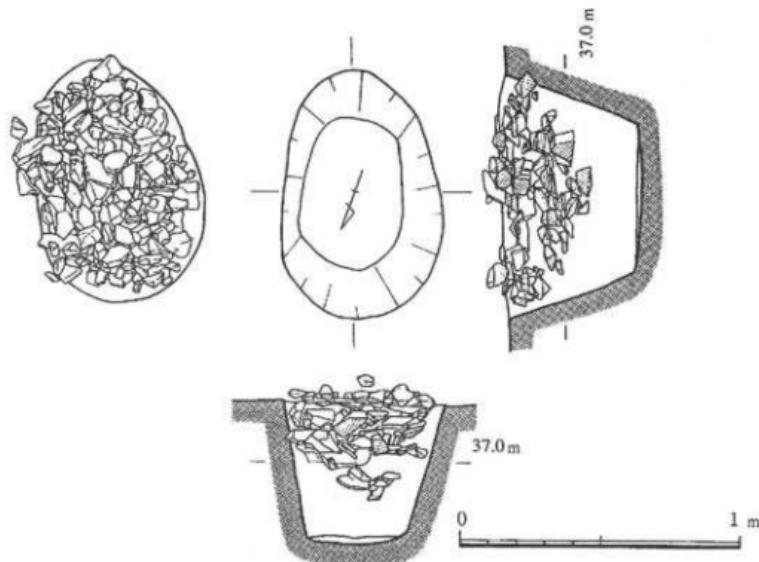
土師質土器皿(第54図・1)口径8・5cm、底径4・4cm、器高1・5cmを測るもので、逆ハの字状に大きく開く体部をもち、器肉は薄い。底部裏面には回転糸切り痕跡がみられる。焼成は良好で内外面とも赤褐色となっている。

円礫(2)長さ5・5cm、厚さ1cmを測る河原石で、淡緑灰色をしている。全体に滑らかな肌となっている。錢貨(3)いわゆる六道錢と称されるもので、いずれも渡来錢である。内訳は元重寶、開元寶、至道元寶、元豐通寶、景祐元寶、政呼通寶であった。いずれも磨滅が著しい。

A I 区東 4 3 号墓 (第55図) 東37号の東に位置する平面小判形の素掘りの土壙で、主軸方位はN



第47図 A I 区東36号墓実測図



第48図 A I区東37号墓実測図

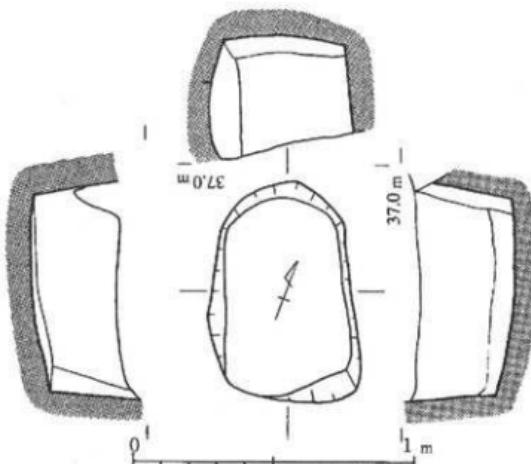
$50^{\circ} - E$ となっている。

この土壤については、南の一部で後述する東44号墓との重複が認められた。しかし両者の前後関係を明かにするに至らなかった。

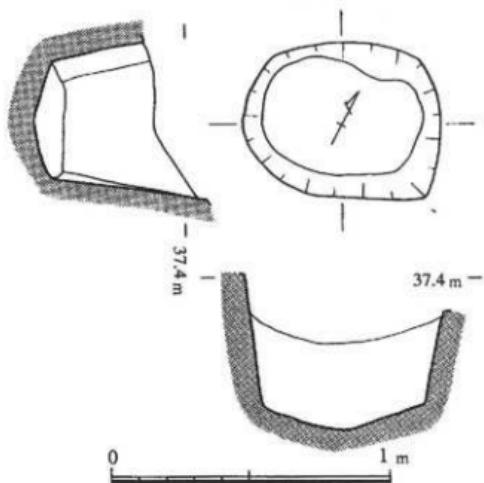
上縁長径120cm、同短径90cm、深さ85cmを測り、各壁面は逆ハの字状に開く形となっている。また壙底は平面方形で、ほぼ水平となっており、その規模は東西長80cm、南北長60cmを測る。

横底には壮年と推定される女性人骨1体が、頭を西壁にもたれかかるかたちで認められた。

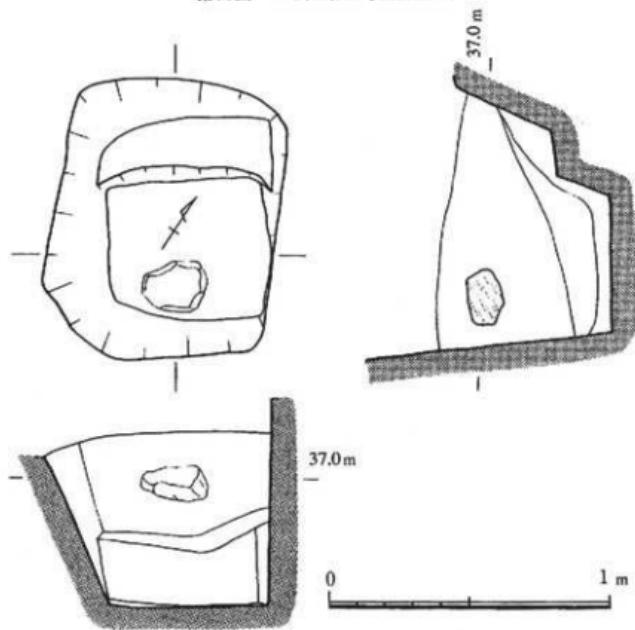
埋葬形態は仰臥膝屈位で、 $N-50^{\circ}-W$ となっていた。この人骨について特に注意される点は、壙底に接する腰から腹部



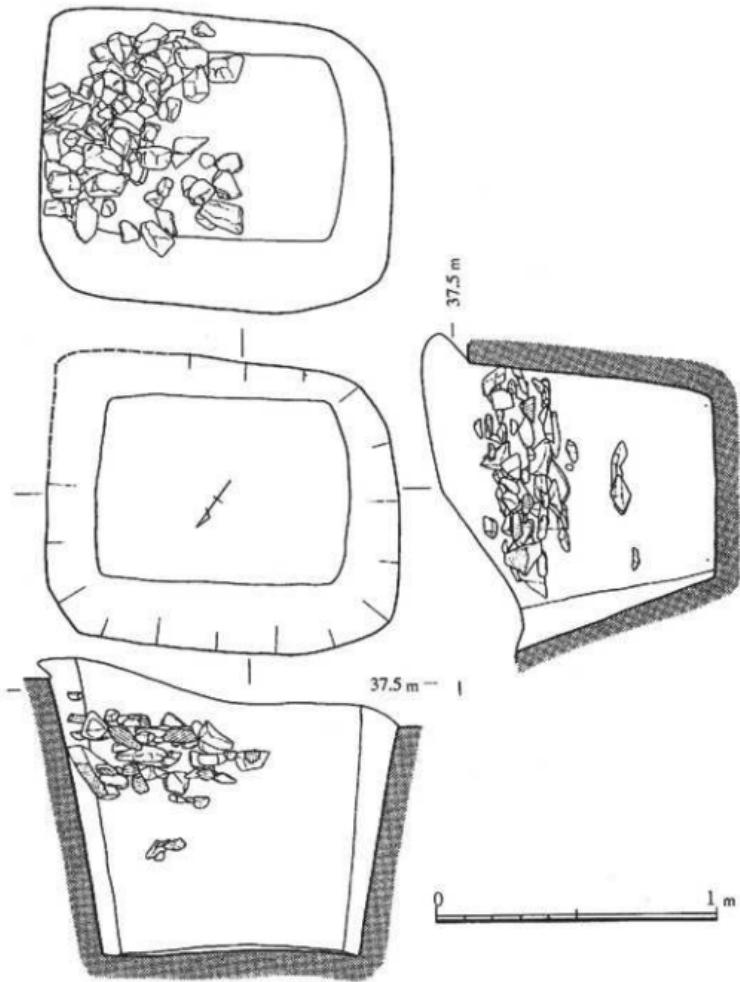
第49図 A I区東38号墓実測図



第50図 A 1区東39号墓実測図



第51図 A 1区東40号墓実測図



第52図 A I区東41号墓実測図

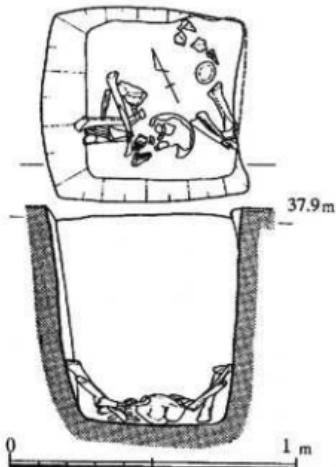
にかけての部分の残存状態がきわめて悪いのに対し、土壇西壁にもたれかかるかたちで認められた頭部及び東壁の膝付近の骨などは前者と比較すると保存状態が良好であることは同じ土壤内における現象として奇異な感じさえうけた。これについては壙底の人骨の状態が悪いのは、水が溜りやすく、壁沿いが水はけが良いといったことなどに起因するものであろうと考えられた。この土壤では人骨以外に、遺物は認められなかった。

A I 区 東44号墓(第56図) 東43号墓の南に隣接し、東15号墓の北に位置している平面方形の素掘り土壤で、主軸方位はN-13°-Wとなっている。この土壤は東43号墓と重複関係にあることは前述したとおりである。

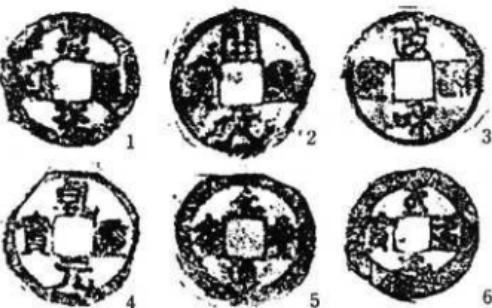
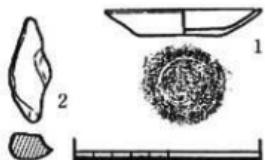
主軸南北長130cm、北端上幅110cm、同下幅90cm、南北幅130cm、同下幅100cm、深さ160cmを測る。壙底は上縁と同様な平面方形で、ほぼ水平となつてゐる。土壤の各壁はいずれも垂直に掘りこまれ、深さ160cmの数値は比較的深い部類に属するものといえよう。

壙底には熟年の男性と推定される人骨1体が認められた。人骨の遺存状態はやや脆弱な状態であった。埋葬形態は立膝座位で、頭位はS-30°-Eとなっていた。人骨以外にこの土壤内から出土した遺物には、膝の付近で土師質土器皿1と鉄器片1がある。土師土器皿は伏せた状態で出土した。ただしこの皿の過半を欠損していた。

土師質土器皿(第57図) 口径10cm、底径5cm、高2cmを測るもので、ハの字状に大きく開く体部をもち、器内



第53図 A I区東42号墓実測図



第54図 A I区東42号墓出土遺物実測図

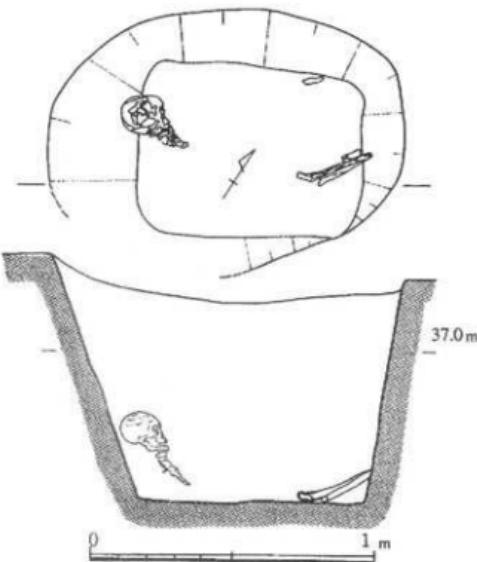
は薄い。底部裏面には回転糸切り痕跡がみられる。焼成は比較的良好である。鉄器(2)残存長4cm、幅4・9cm、厚み0・2cmを測り、全体に錆化が著しい。過半を失しており、用途は不明である。

A I 区 東 4 5 号 墓 (第59図) A I 区 東 調査区のほぼ中央に位置しており、平面方形の素掘り土壤で、主軸方位はN-90°-Wになっている。この土壤は前述したように東34号墓と重複しており、土層の観察から東34号墓(古)～東45号墓(新)という関係が確認された。上縁の形態は東西方向に長軸をとる長方形で、東西長90cm、南北長65cm、深さ210cmを測る。壙底の平面形は台形となつており、北端下幅50cm、南端下幅65cm

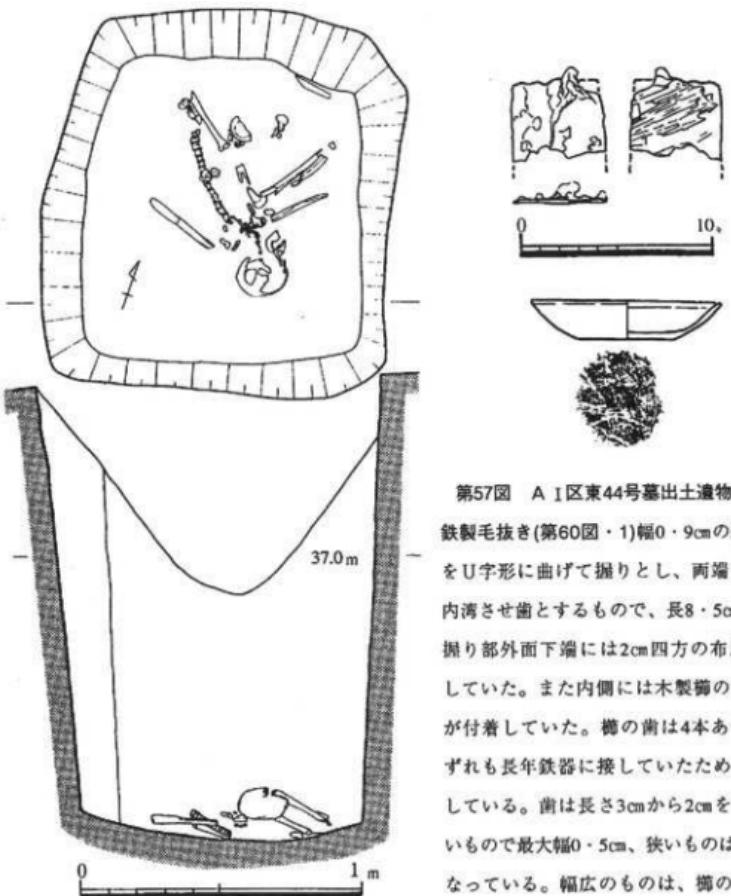
を測る。壙底はほぼ水平となっており、中央よりやや北方には成人と推定される女性人骨1体がみられた。埋葬形態は正座位で、頭位はS-25°-Wと判断された。

この人骨に伴って銭貨が3枚出土した。銭貨(第58図)いわゆる六道銭と称されるもので、いずれも寛永通寶である。内訳はス賓銭1枚、ハ賓銭1枚、他の1枚は錆化が著しく、文字の判読は不可能であった。

A I 区 東 4 6 号 墓 (第61図) 東36号墓の西に隣接して掘りこまれている平面隅丸方形の素掘り土壤で、主軸方位はN-28°-Wとなっている。上縁、壙底ともに相似形をもって掘りこまれ、主軸上縁南北長130cm、北端上幅90cm、同下幅65cm、南上幅100cm、同下幅60cm、深さ190cmを測る。この土壤は東36号墓と重複しており、東36号墓(古)～東46号墓(新)という関係であることは前述したとおりである。壙底はほぼ水平となつており、中央やや北東よりで熟年と推定される女性人骨が1体みられた。埋葬形態は仰臥座位と判断され、頭位はS 60° Wである可能性が大きい。人骨の上面には、人頭大から拳大の角礫群93・6kgが覆っていた。この角礫群は、土壤上縁から120cm下方で厚さ約50cmにわたって堆積しており、最深部から壙までの距離は10cmを測るものであった。人骨の残存状態は比較的良好であった。この人骨に伴う遺物は鉄製の毛抜き1、和はさみ1、さらに毛抜きに木製櫛の歯の一部が付着していた。



第55図 A I 区 東 43 号 墓 実測図



第56図 A1区東44号墓実測図

はさみ(2)いわゆる握り鉄で、細い鉄板をU字形に曲げて握りとし、両端に内向する刃を施したもので、14・2cmを測る。

A1区東47号墓（第62図）東46号墓の南に位置する平面小判形の素握りの土壙で、主軸方位はN-20°-Wとなっている。上縁の長径105cm、同短径90cm、深さ95cmなっており、壙底は上縁と同様小判形で、長径75cm、短径65cmを測り、壙底はほぼ水平なっている。壙底中央から磁器の湯飲み、小皿、飯碗などが出土した。飯碗としたものは横倒しの状態で、口を西方に向けるかたちとなっていた。

湯飲みは壙底のほぼ中央に伏せたかたちであって、これの東には小皿、皿が立てかけられたよな

状態で出土した。この口縁をほぼ垂直に立てた状態の皿の内から、頭蓋骨の一部が認められた。

つまり、皿の底の曲面に頭蓋骨の曲面が重なり、入れ子のかたちで出土した。また、この皿の南東方向に被葬者の歯牙が3点みられた。よって被葬者の顎の部分は、前述した皿よりも東側で歯牙出土地点付近と考えられる。この出土状態からすると、前述した皿は被葬者の頭頂部の上にあった可能性が推定される。これは陶磁器の容器などを頭にかぶせ埋葬する習俗を窺わせるものであった。<sup>11</sup>もとより小さな皿であるので、ただ頭頂部に乗せただけでは固定は困難であるから、紐のようなもので結ぶなどの行為が必要であったかとも考えられる。

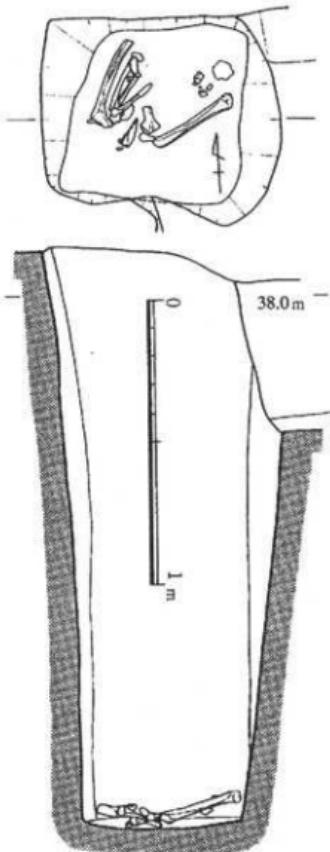


第59図 A 1区東45号墓出土遺物拓影

磁器湯飲み(第64図)口径7・5cm、高さ5cmを測る湯飲みで、身はラッパ状に開き、口縁端部はゆるやかに反り返る。身の外面には、鮮やかな藍色で蘭の切り花を横たえたような図柄が三方に描かれている。身と高台際には3条の細線が回らされている。

磁器皿(2)口径6・8cm、高さ2・7cmを測るもので、小皿、あるいは杯のような用途の器と推定される。大きさの割には器肉は厚い。外面には口縁部から身の中ほどに向かって暗い藍色で、鋸歯文状の塗分けが行われている。身と高台際には2条の細線が回らされている。

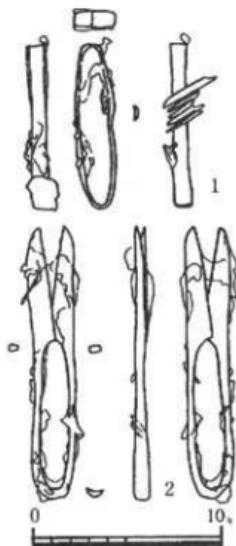
磁器飯碗(3)口径10cm、高さ5・5cmを測る小振りの飯碗で、身はゆるやかに曲線を描いて内湾しながら立ち上がる形となっている。内外面ともに淡い灰色を示す。身の外面には鼻須による文様が描かれているが、その意匠については不明である。身と高台際には3本の細線が回らされている。



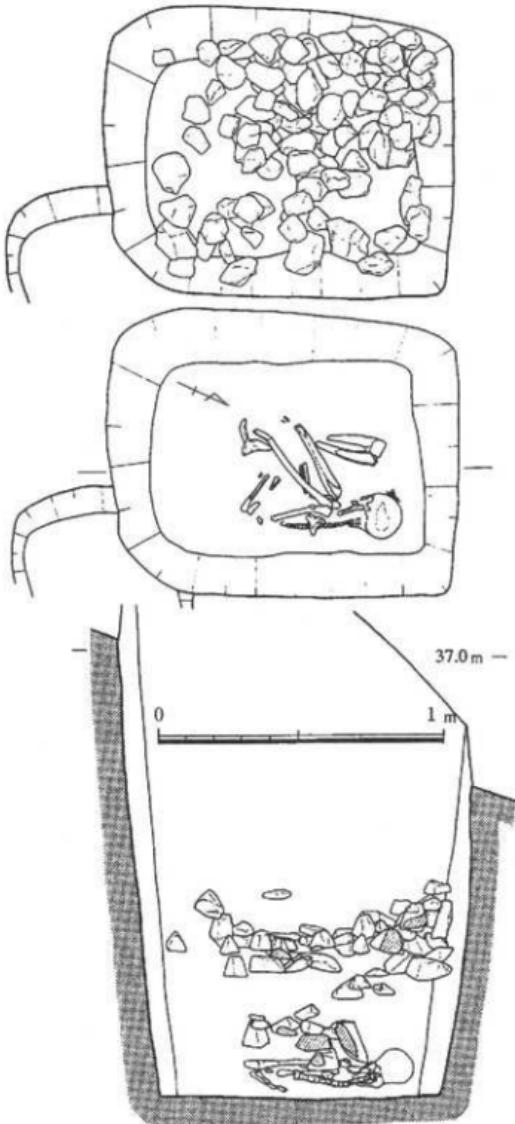
第58図 A 1区東45号墓実測図

磁器皿(4)口径9・4cm、高さ2・7cmを測る、大きく口を開く無地の皿である。高台部分、及び見込面の直径4・5cmの環状の部分が露胎となっており、他は淡い白灰色の施釉がみられる。露胎部分は淡い黄色となっていた。

A I 区東46号墓(第65図)東19号墓の東に位置している平面方形の素掘りの土壙で、主軸方位はN-20°-Wとなっている。全長120cm、北端上幅90cm、同下幅70cm、南端上幅100cm、同下幅70cm、



第60図 A I 区東46号墓実測図



第61図 A I 区東46号墓出土遺物実測図

深さ180cmを測る。

墳底の形態は上縁の相似形で、ほぼ水平となっている。

墳底中央には壮年後半と推定される女性人骨1体がみられた。埋葬形態は仰臥座位で、頭位はS- $20^{\circ}$ -Eと判断された。

人骨の残存状態はきわめて悪く、頭部以外は中央やや西において3本の長幹骨がみられた他は小さな骨片が若干あったにすぎない。また出土人骨も脆弱な状態であった。

この土壤には人骨以外遺物は認められなかった。

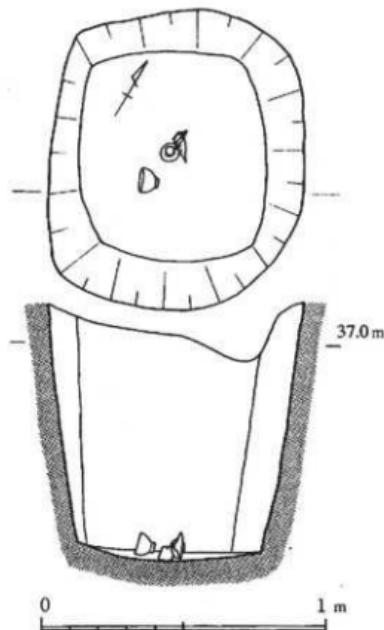
A I 区東4 9号墓（第66図）東47号墓の南に位置する平面隅丸方形の土壤で、主軸方位はN- $7^{\circ}$ -Wとなっている。主軸南北長130cm、北端上幅115cm、同下幅50cm、南上幅100cm、同下幅50cm、深さ170cmを測る。墳底はやや不整形な方形となってい、ほぼ水平となっている。

この墳底には壮年と推定される女性人骨1体がみられた。

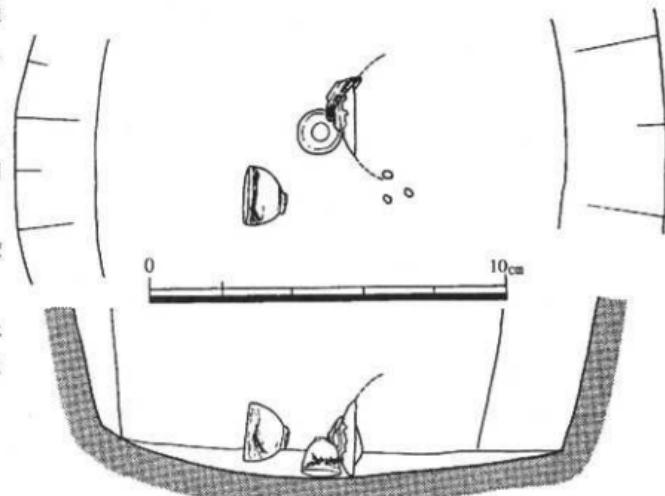
埋葬形態は立膝座位で、頭位はS- $75^{\circ}$ -Eと判断された。

人骨の残存状態は比較的良好であった。

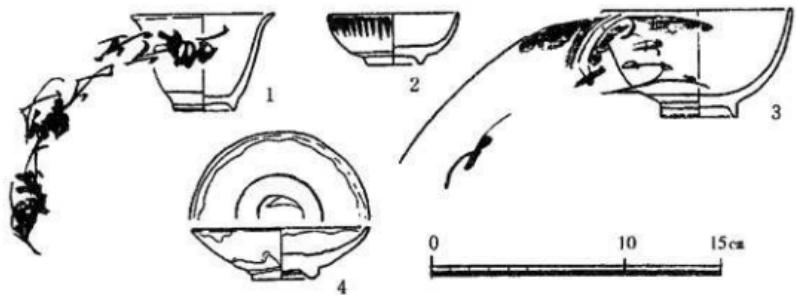
墳底中央では土師質土器皿1が正位置で人骨片に囲まれる状態で出土した。



第62図 A I 区東47号墓実測図



第63図 A I 区東47号墓遺物出土状態実測図



第64図 A I 区東47号墓出土遺物実測図

この土壤内、上方では総量120kgを測る大量の角鱗が二層にわたって堆積していた。

各角鱗の法量は大きいものは人頭大、小さいものは拳大から指頭大など様々であった。これら鱗群の分布状態は、上層のものは、中央よりやや南に偏る傾向を示していた。下層のものは土壤の平面の全体を覆いつくす形で分布していた。これらはいずれも土壤の中心部に向かって傾斜する点に大きな特徴がみられた。堆積鱗層の断面は皿状となっており、厚さは平均10cmを測る。下層の鱗群の堆積層最深部から壙底までの距離は100cmであった。一方、上層では堆積層最深部から壙底までの距離は135cmであった。上下の鱗層の間には明赤色の砂質土が認められ、その厚さ約30cmを測る。この土層の観察からすると、棺埋置後、埋め土が納入され、その上に二度にわたって角鱗群が敷き詰められたらしい。上下の二層の鱗層が中心部に向かって傾斜しているのは、棺の腐食によって埋め土が沈下した結果であって本来はほぼ水平に敷き詰められていたものと推定された。上下二層の鱗層断面が描く曲線が、ほぼ平行するのは、両者の敷き詰められた時間的な差がほとんどなかつたことを示しているといえよう。ただし、そのことがどのような意図によるものであるのかという点については、明らかにしえなかつた。

師質土器皿 (第67図) 口径11・3cm、底径6・4cm、高さ2・1cmを測るもので、ハの字状に大きく開く体部をもち、器肉は比較的薄い。底部裏面には糸切り痕跡がみられる。全体に淡い白色を示し、焼成は比較的良好となっている。

A I 区東50号墓 (第68図) 前述した東18号墓と重複しており、東18号墓(古)～東50号墓(新)という関係が確認されている。この土壤は平面方形の素掘りで、上縁の主軸方位はN-80°-Eとなっているが壙底の主軸はN-20°-Wとなっている。上縁主軸長、つまり東西長90cmを測り、西端上幅65cm、東端上幅50cmとなっている。一方、壙底の主軸長、つまり南北長は75cmを測り、北端幅70cm、南端幅60cmとなっている。壙底はほぼ水平となっており、その中央には青年後半～壮年前半と推

定される女性人骨がみられた。埋葬形態は立膝座位で、頭位は S-40°-E と判断された。

人骨の残存状態はきわめて良好であった。

この土壙に伴う遺物としては、人骨の南側で磁器湯飲み1、頭部の西下で、低脚杯1、土壙中央の人骨の間と東壁沿いで銭貨がそれぞれ1枚出土した。

磁器湯飲み（第69図・1）口径7・8cm 高さ4・1cmを測り、身はゆるやかに曲線を描いて内湾しながら立ち上がる形となっている。内外面ともに淡い灰白色を示す。器肉は比較的厚い。口縁部には埋葬時のものとみられる打ち欠きが4個所認められた。外面には藍色で筆の葉を思わせる図柄が描かれている。身と高台際には3筋の細線が回らされている。

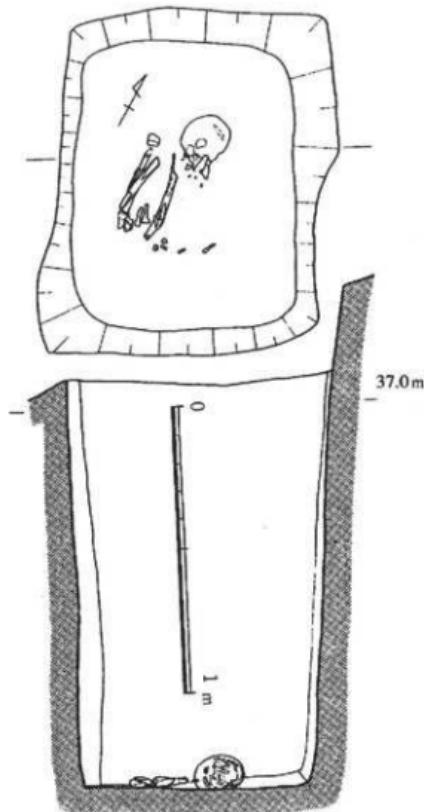
磁器低脚杯（2）碗形の身を持つ低脚付きの杯で、脚部は身との接合部から欠損している。口径7・5cm 残存高2・7cmを測り、器肉は前述した磁器湯飲みに比較すると薄い。内外面とも淡い灰色を示す。口縁部には6個所にわたって、打ち欠きが認められた。これもおそらく埋葬時に行わされたものと推測される。

外面は口縁部から下方の中ほどにに向かって淡い青灰色で、鋸歯文状の塗分けが行われている。の下方には淡い青灰色の細線が回らされている。

銭貨（第70図）2枚あって、いわゆる六道

錢として納入されたもので、いずれも寛永通寶である。2枚ともハ實錢である。

A 1 区 東 5 1 号 墓 (第71図) 東18号墓の西に位置する隅丸方形の素掘り土壙で、主軸方位は N 80° E となっていた。この東51号墓は、北に位置する不整形な性格不明の土坑と重複関係にあって、北から東方にかけての上縁部は損われている。上縁主軸長、つまり東西長は105cm、西端残存上幅



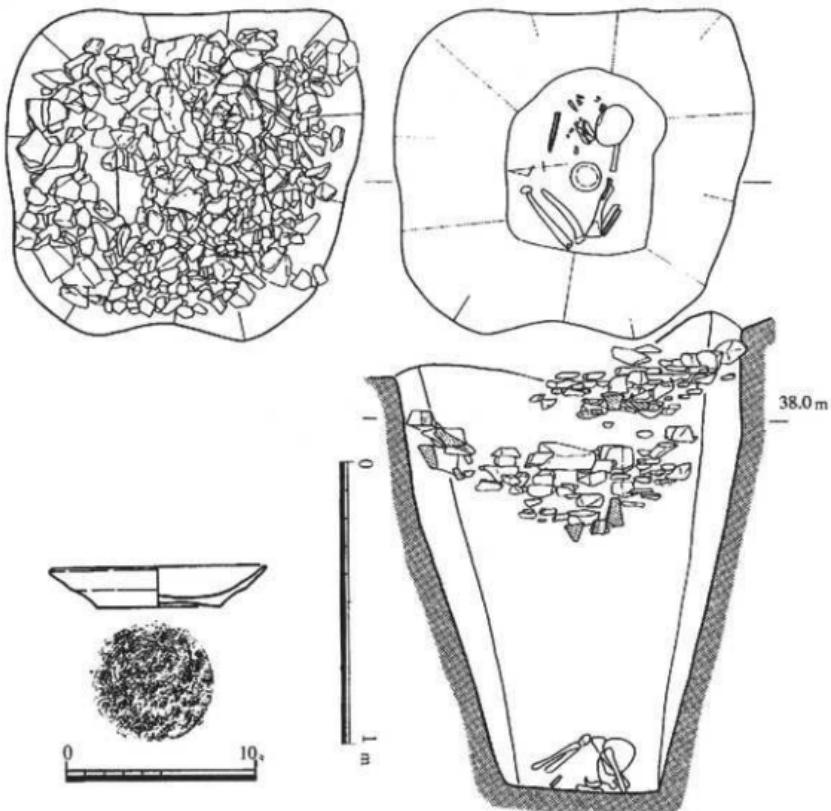
第65図 A 1 区 東48号墓実測図

60cm、同下幅55cm、東端残存上幅70cm、同下幅50cm、深さ150cmを測る。墳底は隅九正方形で、ほぼ水平となっている。この墳底には熟年後半と推定される女性人骨1体が埋葬された。埋葬形態は立膝坐位で、頭位はS-20°-Eと判断された。人骨の残存状態は比較的良好であった。墳底中央やや南西よりの人骨の上から土師質土器皿1が正位置で出土した。

**土師質土器皿(第72図)** 口径9・7cm、底径5cm、高さ2cmを測るもので、逆ハの字状に開く体部をもち器肉は比較的厚い。底部裏面には糸切り痕跡がみられる。淡い赤黄色を示し、焼成は良好である。

**東52号墓(第73図)** 東18号墓の東に位置する平面正方形に近い形の土壙で、主軸方位は東西南北の軸線上にほぼ乗るものであった。

西端上縁長70cm、北端上幅70cmを測るが、東端上縁の辺がやや外へふくらんだ形となっていた。



第67図 A I 区東49号墓出土遺物実測図

第66図 A I 区東49号墓実測図

これは東壁に、壙底から上方70cmの位置に、幅20cmのテラスが削り出されており、それが壁面の上方にまで影響し、さらに上縁の変形にまで及んだものと推定される。この土壙は深さ190cmを測り、深い部類に属する。前述した、東壁のテラスは土壤掘削時の足がかりとして使用されたものと推定された。壙底はほぼ水平となっており、その中央に老年と推定される男性1体がみられた。埋葬形態は仰臥坐位で、頭位はS-5°-Eと判断された。人骨の残存状態は極めて良好であった。

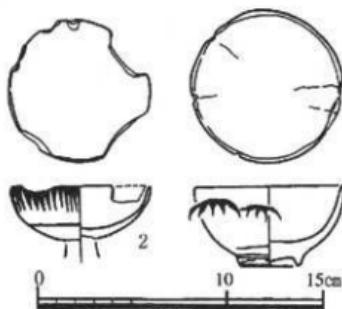
出土遺物としては、壙底中央やや南よりで、土師質土器皿1が正位置でみとめられた他に、人骨の胸付近から銭貨が2枚あった。

土師質土器皿(第74図・1) 口径7.5cm、底径3.8cm、高さ1.5cm測るもので、逆ハの字状に大きく聞く部をもち、器肉は比較的薄い。底部裏面には糸切り痕跡がみられる。全体に赤褐色を示し、焼成は良好である。

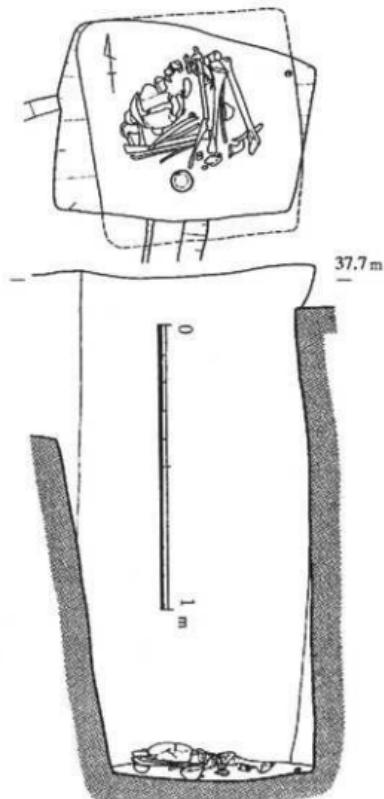
銭貨(2)いわゆる六道銭として納入されたもので、いずれも寛永通寶である。2枚ともハ寶銭である。

A I 区東53号墓(第75図) 東18号墓と重複していることは前述したとおりで、東18号墓(古)～東53号墓(新)という関係が確認されている。

東53号墓は、平面方形の素掘り土壙で、東18号墓南半部の平面形の中にそのまま納まるかたちとなっている。主軸方位はN-0°-Wで、東18号墓の西、南、東の各壁を共有するかのようである。この土壙は南西隅に樹根に



第69図 A I区東50号墓出土遺物実測図



第68図 A I区東50号墓実測図

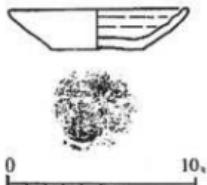
よる擾乱があつて、その形が損われている。

よつて、当初の上縁平面規模を示す部分は中央幅のみであつて、105cmを測る。長軸方向の上縁残存長128cm、墳底南端幅55cm、北端幅60cm、深さ75cmを測る。墳底の形態は平面長方形をしており、北側がやや低くなっている。墳底には北と南に熟年と推定される女性1体がみられた。埋葬形態は仰臥坐位で、埋葬方位はN-5°-Wと判断された。人骨の残存状態は悪く、南西隅で頭部の一部が、北側では下半身部分の人骨片認められた。

人骨以外の遺物としては、頭部をコの字状に囲む形で鉄製釘が15点出土した。これは埋葬形態が仰臥坐位であることから、枕あるいは頭部を囲む箱のような物があった可能性が考えられる。墳底において、この他に鉄釘の分布は認められなかった。

この土壌の上面、中央やや北方よりでは、長さ60cm、幅30cm、厚さ40cmを測る石が出土した。この石の下端は土壤の検出面から約20cm下方にあった。これは埋葬時に地表面にあったものが被葬者の腐蝕とともに沈下したものと判断された。

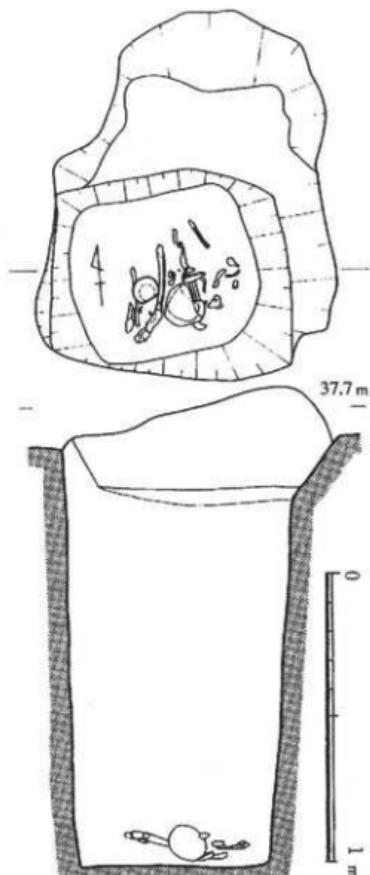
この他の遺物としては、腹部に想定される部分に土師質土器の小片がみられた。



第72図 A1区東51号墓出土遺物実測図



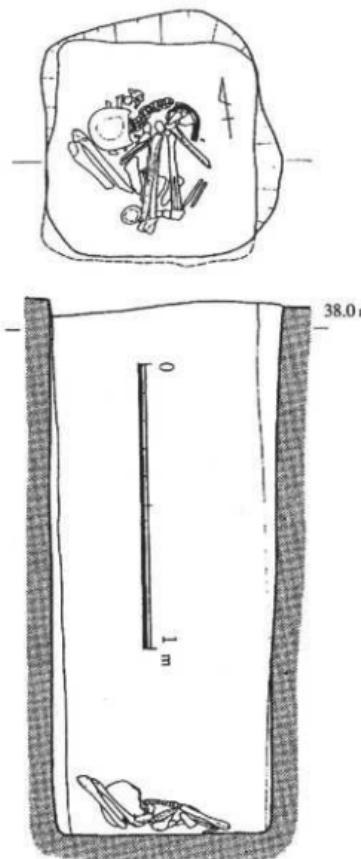
第70図 A1区東50号墓出土遺物拓影



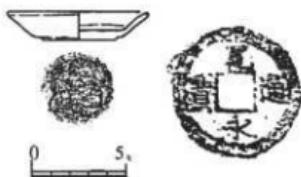
第71図 A1区東51号墓実測図

A I 区東 54 号墓 (第76図) 東51号墓の南、東53号墓の西に位置する平面方形の素掘り土壙で、上縁は樹根の搅乱により不整形となっている。主軸方位はN-80°-Wとなっている。

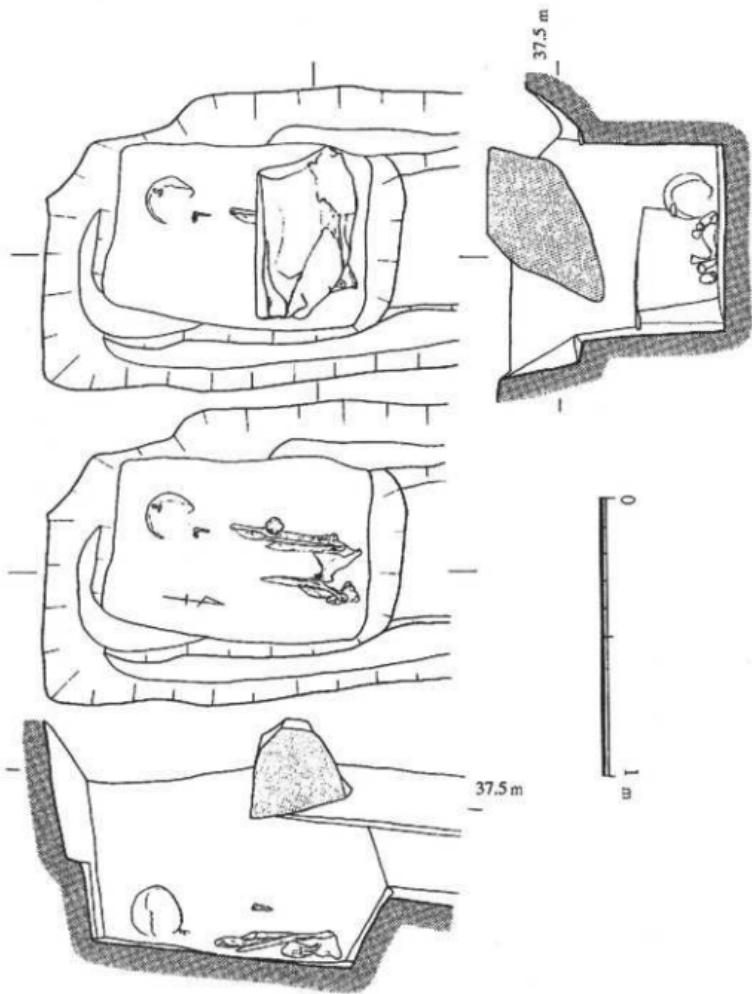
主軸上縁長つまり、東西長80cm、西端上幅50cm、同下幅70cm、東端上幅60cm、同下幅80cmを測る。この土壙は上縁より底部が一回り広くなっている。壙底面はほぼ水平である。壙底中央北よりの位置で、熟年と推定される女性人骨1体がみられた。埋葬形態は立藤坐位で、埋葬方位はN-75°-Wと判断された。壙底中央やや西よりでは平面方形の小さな掘りこみが認められた。この掘り込みの主軸方位は土壙主軸方位とほぼ一致しており、平面形は一辺20cmの正方形を示し、断面形はV字形で、深さは20cmを測る。この小さな掘り込みは遺物精査時には見られず、人骨取上げ後に検出したものである。また、内部には人骨片や他の遺物は入りこんでいなかった。したがって、壙底に掘り込みがなされたのは土壙掘削後、埋葬以前ということができるよう。出土遺物としては、人骨以外に土師質土器3点が人骨片に混じってみとめられた。この他煙管1点、河原小石3点があった。



第73図 A I 区東52号墓実測図



第74図 A I 区東52号墓出土遺物実測図

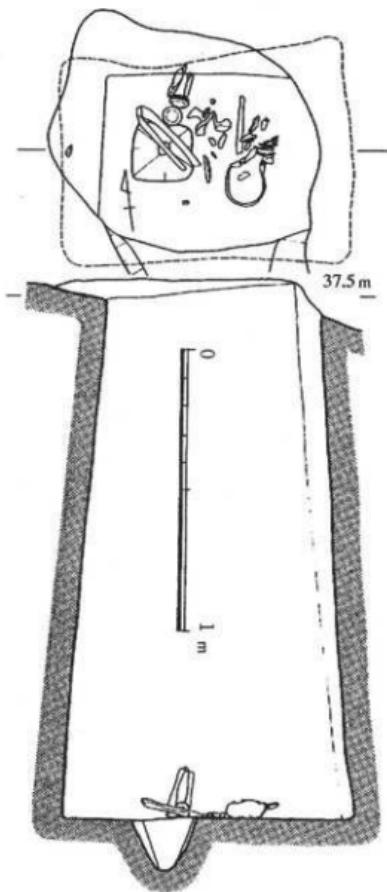


第75図 A I 区東53号墓実測図

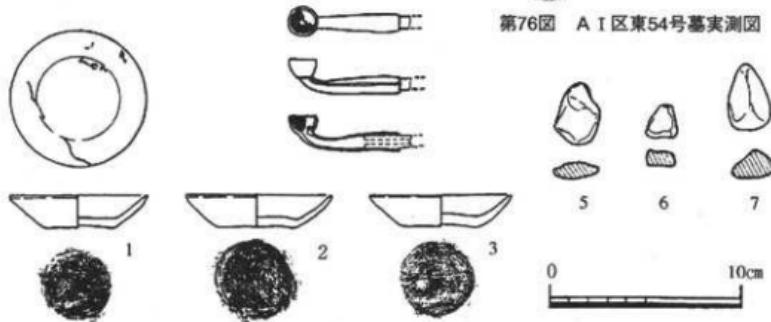
土師質土器皿(第77図)3点あって、いずれも逆ハの字状に大きく開く体部をもち、器肉は比較的薄い作りとなっている。

底部裏面には回転糸きり痕跡みられる。  
(1)は口径7・6cm、底径4cm、高さ1・6cm、底径4cmを測り、焼成は良好である。(2)は口径7・5cm、底径4cm、高さ1・6cm、底径4cmを測り、焼成は良好である。(3)は口径7・1cm、高さ1・6cm、底径3・7cmを測り、焼成は良好である。

煙管(4)出土したは銅製の火皿側の金具で、吸い口側の金具は認められなかった。金具長5・7cm、火皿の口径1・4cm、羅字挿入口の口径0・9cmを測る。  
竹製の羅字の一部が挿入口内に残存っており、径0.6cmを測り、中央には径0・2cmの小孔がみられた。この羅字は挿入口ら0・7cm出た位置で欠損している。  
火皿の内面にはタール状の付着物が認められた。



第76図 A I区東54号墓実測図



第77図 A I区東54号墓出土遺物実測図

河原小石(5~7)はいずれも小さな円礫で、全体に滑らかな肌となっている。(5)は長さ3・2cm、幅2・3cm、厚さ0・9cmを測る扁平なものである。(6)は長さ1・7cm、幅1・6cm、厚さ0・8cmを測る扁平なものである。(7)は長さ2・8cm、幅2・2cm、高さ1・5cmを測る、断面略三角形となっている。

A I 区東3 8号墓付近出土墓石(第78図)A I 区東の丘陵は東西に長い平坦面をもっているが、その平坦面のうち北西隅には近世墓が集中して掘りこまれている。ここは尾根上の平坦面やがて北側斜面に至る、傾斜変換点直上にあたる。ここに紹介する墓石は、調査前に東38号墓付近で表採したものである。したがって、どの土壤に伴うものであるかは即断しない。ただ紀年銘があることから、周辺の墓の年代を推

定するのに重要な手がか

りとなるもの考えられ

た。この墓石は部分的に

欠損部分もあるが、高さ

36cm、幅18cm、奥行き

残存長11・5cmを測り、

断面は方形となってい

る。頂部は正面から見

ると弓なりに加工され

ている。背面はかなり

欠損しており、当初の

面は存在しない。正面

には上下左右を回る幅

3cmの縁が削り出されて

いる。

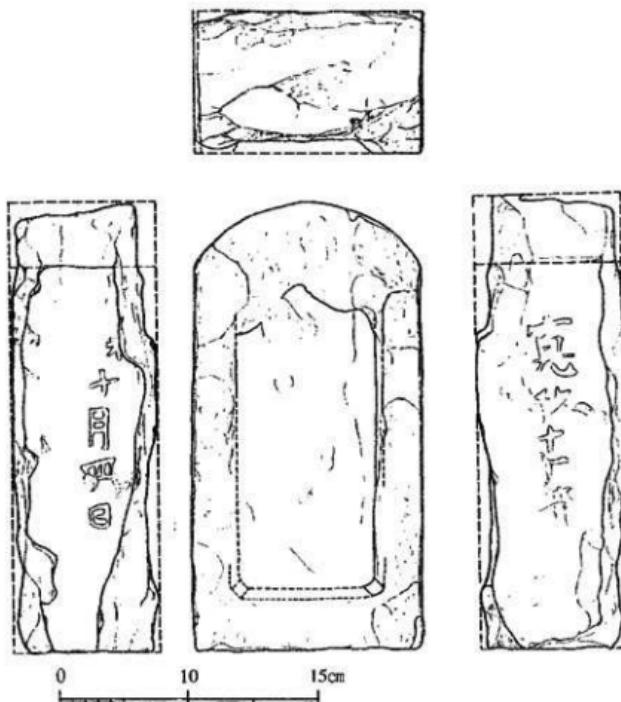
その縁も上方及び周辺

はかなり欠損しており、

縁に閉まれた面に刻まれ

ていた文字の判読は不

可能な状態であった。正面



第78図 A I区東38号墓付近墓石実測図

の向かって、右側面には「寛政十一年」、左側面には「未十月四日」の文字が刻まれている。したがって、この墓石がどの土壤に伴うかという問題は別にして、近世墓が集中して分布する一隅で出土したことは、さほど大きく移動していないことを窺わせた。

### (3) A I 区中央部で検出した遺構と遺物

A I 区中央と呼称する調査区は、丘陵の舌状端部西の傾斜変換点の直前に位置している。ここは約2mの落差をもってA I 区西テラスが形成され、A I 区西の土壤群が掘りこまれている。このA I 区中央を一つの調査区として取り扱うことにしたのは、東41号墓との間に遺構の分布の希薄な地帯が存在することを一応の目安としたが、これはあくまでも便宜的に行ったに過ぎない。ここで検出した遺構は中世と推定される、石製五輪塔を伴う火葬墓8、古代に属す土壙15、近世の土壙8の他に、納骨堂と推定される礎石建物跡S B O I 、溝状遺構1、この他南側斜面の階段状遺構1であった。

以下この調査区の中心的位置をしめる、S B O I から順次その概要を記すこととする。

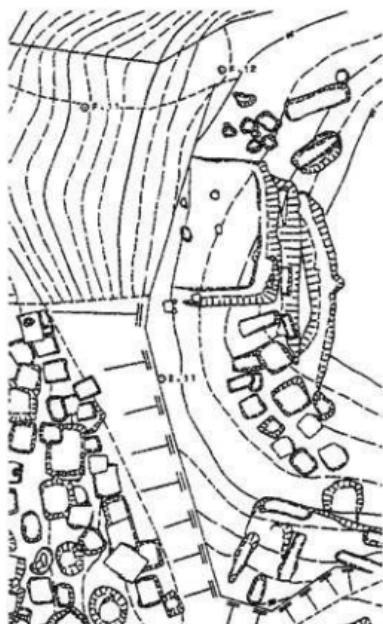
S B O I (第80・81図) 丘陵の西端傾斜変換点付近にあって、尾根の東西中軸線の北に位置する溝を伴う礎石建物跡である。溝は南北に走る長さ5mの南北端がいずれも西方に向かってほぼ直角に屈曲し、平面コの字状となっている。屈曲した両端の規模は北端で東西長2・5m、南端で東西長3・4mを測る。つまり、尾根西端部の一隅に溝によって区画された方形の平坦面を削り出し、南北4m、東西3mの面積を確保している。溝の底はほぼ水平で、断面はやや上方が開くコの字状となっており、溝幅25cmを測る。

溝の深さは、尾根と直交する南北辺中央で80cmを測り、南北両端の東西辺は、西方に向かって徐々に下降する傾斜角度と一致するかたちで溝は終わっている。

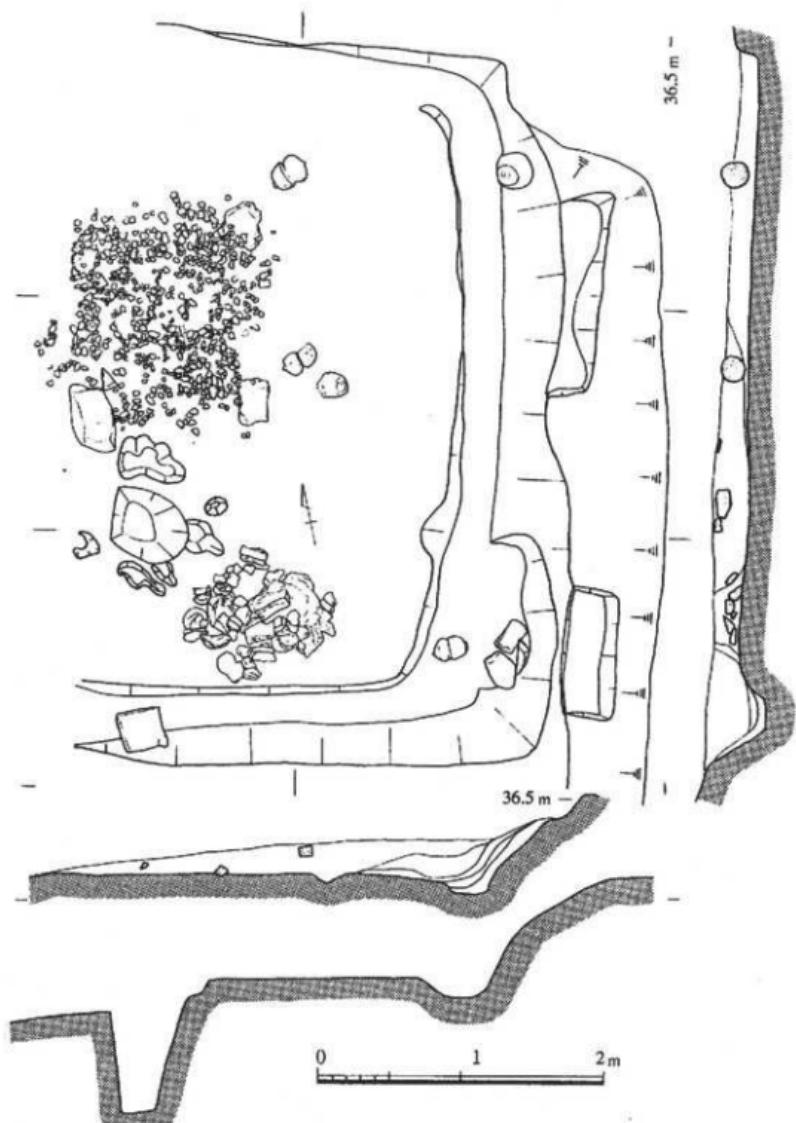
S B O I は溝で囲まれた平坦面の中央やや北よりで検出した、4個の礎石及び多量の河原砾で構成されるものである。河原砾は、指頭大あるいは一回り大きいもので、表土を除去した時点から東西150cm、南北160cmのほぼ方形の範囲で認められ、その総重量は51・4kgを測る。このなかには火葬骨片が若干認められた。

この方形に分布する河原砾の四隅に、扁平な自然石が置かれていた。

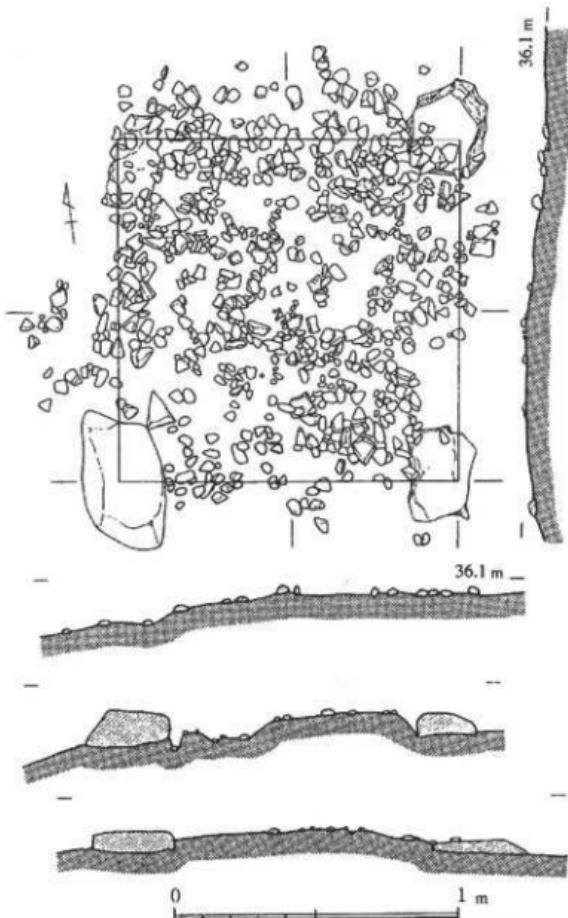
この自然石は、北東隅のものは長さ33cm、幅26cm厚さ12cm、北西隅のものは他と比較するとやや小さ



第79図 A I 区中央遺構分布図



第80図 A I区中SB01周辺遺構実測図



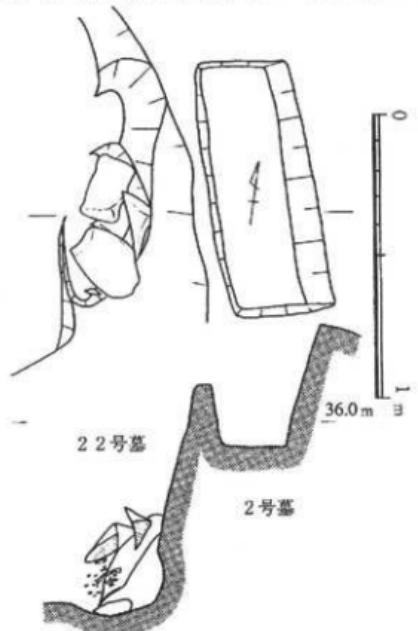
第81図 A-I区中S-B01実測図

く、長さ32cm、幅17cm、厚さ7cm、南東隅のものは長さ33cm、幅20cm、厚さ6cm、南西隅に位置するものは長さ54cm、幅30cm、厚さ14cmを測る。4個の自然石のうち、南西隅のものは角もなく表面は滑らかで、河原の石を思わせた。他の3個については、板状剥離する石質で各所に角張った部分がみられた。これらの石は上面を可能な限り水平に据えようとする意図が読みとれ、各石の芯々距離は東西1間(120cm)・南北1間(120cm)を測り、小規模ながらも礎石建物跡であろうと判断された。敷き詰められた河原石に火葬骨が混在することからこの建物は、納骨堂のような性格の建物であろうと推定された。

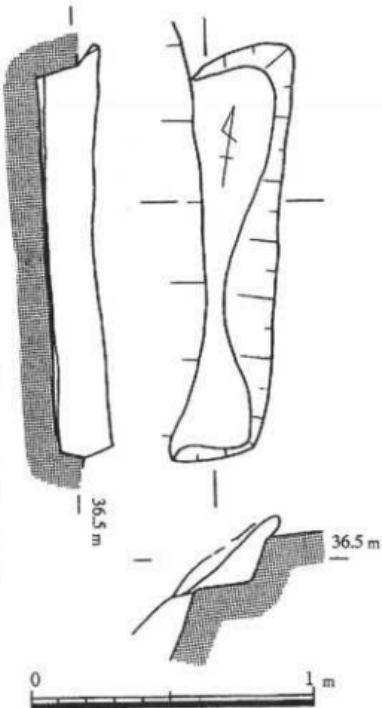
A I 区中 1号墓（第82図）SB01の東を区画する溝の壁に掘りこまれている棚状の土壌で、主軸方位はN-10°-Eとなっている。全長138cm、残存上幅25cm、検出面からの深度23cmを測り、壙底はほぼ水平となっている。

現状では棚状に見えることから、納骨堂に伴う供獻用の施設とも考えられたが周辺の状況からすると小型の素掘り土壌の西壁が、SB01に伴う溝の掘削によって損われたものと判断された。北端上幅が南端と比較して広いことから被葬者の頭位は北方と判断された。この土壌に関係する遺物は認められなかった。

A I 区中 2号墓（第83図）中1号墓の南にあって、SB01に伴う溝の上端に、それと平行して掘り込まれている平面長方形の素掘り土壌である。主軸方位はN-10°-Wとなっており、全長93cm、北端上幅33cm、同下幅23cm、南端



第83図 A I 区中 2号・22号墓実測図



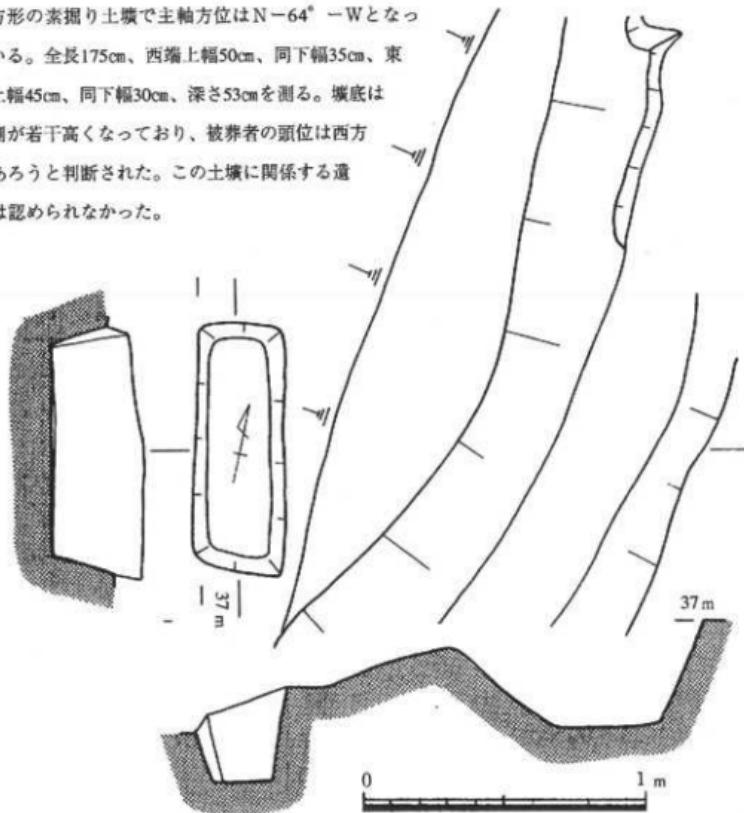
第82図 A I 区中 1号墓実測図

上幅37cm、同下幅25cmを測り、深さの数値は残存状態が良好な東壁で示すと45cmとなっている。被葬者の頭位は、壙底はほぼ水平となっていることや、南北両邊の格差がさほどないことから即断の限りではないが、南端が若干北端の数値を上回ることから南方と判断された。SB01と、この土壌の時期については、極的な根拠がある分けではないが前者が新しく、後者が古いと推測される。したがって西壁が東壁と比較してやや低いのはSB01に伴う溝状造構の掘削によって削平されたものと判断された。この土壌に関係する遺物は認められなかった。

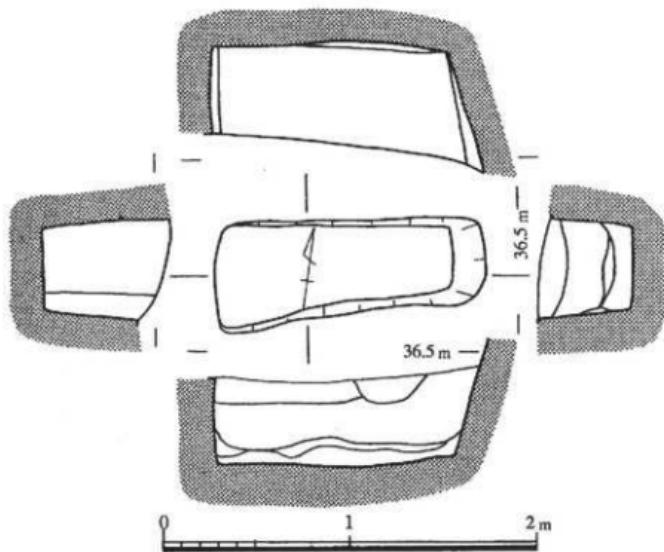
A I 区中 3 号墓(第84図) 中2号墓の南に位置する平面長方形の素掘りの土壙で、主軸方位は N-11°-W となっている。全長90cm、北端上幅30cm、同下幅18cm、南端上幅33cm、同下幅22cmを測り、深さの数値は残存状態が良好な東壁で示すと32cmを測る。壙底面はほぼ水平となっているが、南端幅がやや広いことから、被葬者の頭位は南方と判断された。この土壙に関する遺物は認められなかった。

A I 区中 4 号墓(第85図) 中3号墓の西に位置する平面長方形の素掘り土壙で、主軸方位は N-103°-W となっている。全長147cm、西端上幅60cm、同下幅52cm、東端上幅35cm、深さ40cmを測る。壙底はほぼ水平となっており、西端が広いことから被葬者の頭位は西方と判断された。この土壙に関する遺物は認められなかった。

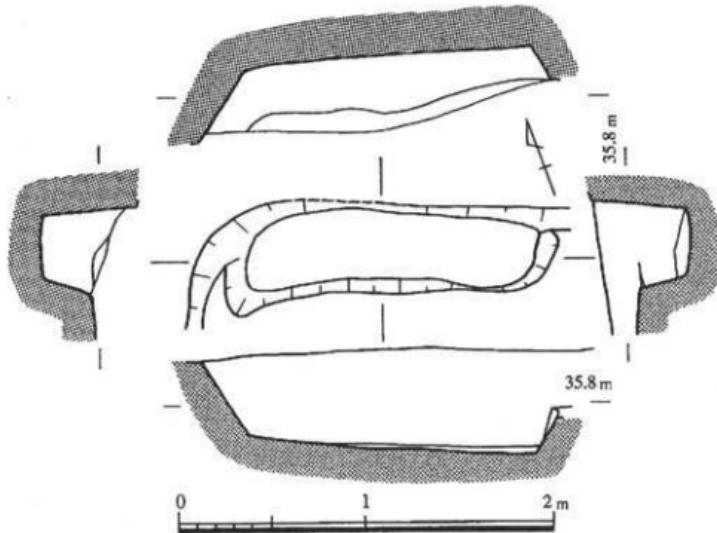
A I 区中 5 号墓(第86図) A I 区中央の南側傾斜変換点付近に位置する土壙群の一つである。平面長方形の素掘り土壙で主軸方位は N-64°-W となっている。全長175cm、西端上幅50cm、同下幅35cm、東端上幅45cm、同下幅30cm、深さ53cmを測る。壙底は西側が若干高くなっている。被葬者の頭位は西方であろうと判断された。この土壙に関する遺物は認められなかった。



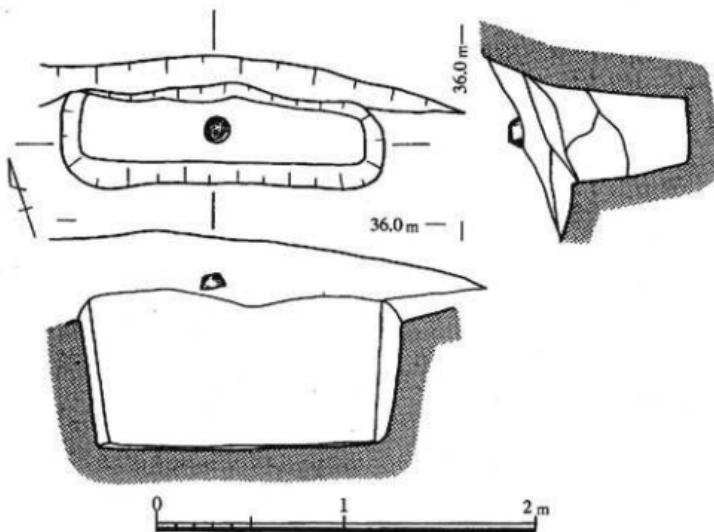
第84図 A I 区中 3 号墓実測図



第85図 A I区中4号墓実測図



第86図 A I区中5号墓実測図

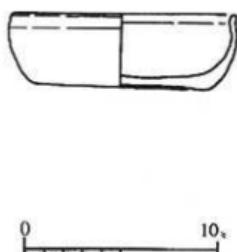


第87図 A I 区中 6号墓実測図

A I 区中 6号墓(第87図)中6号墓の東に位置する平面長方形の素掘り土壙で、主軸方位はN-67°-Wとなっている。全長150cm、西端上幅50cm、同下幅30cm、東端上幅40cm、同下幅20cmを測る。この土壙がある位置が丘陵の傾斜変換点にあたることから、北壁と南壁とではかなりの落差がみられた。北壁は壙底から上端まで110cm、南壁は62cmとなっている。この土壙上面中央には、須恵器杯が伏せた状態で出土した。この出土した須恵器杯が、中6号墓に伴うものか否か問題となるところであろう。この点については、割れてはいるものの接合により完形に復すことが可能であること、周辺にこのような須恵器が伴う遺構は認められないことなどの諸点から中6号墓に供獻されたものであろうと判断された。

須恵器杯(第88図)口径12cm、底径9cm、器高4cm測るもので、底裏面には回転糸切り痕跡が認められる。内湾する体部を

第88図 A I 区中 6号墓出土遺物実測図

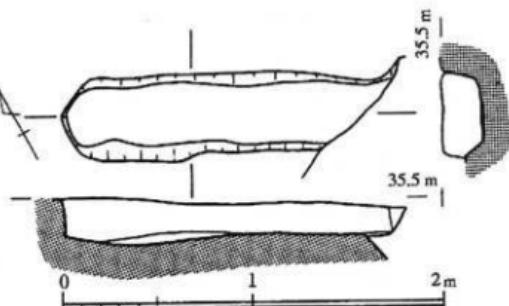


もち口縁端部の断面はやや丸みをもっておさまる。焼成はややあく色調は淡い灰色を示す。楠浦編年の4形式の杯II類にあたるもの考えられる。

#### A I 区中 7 号墓 (第89図) 中6号墓

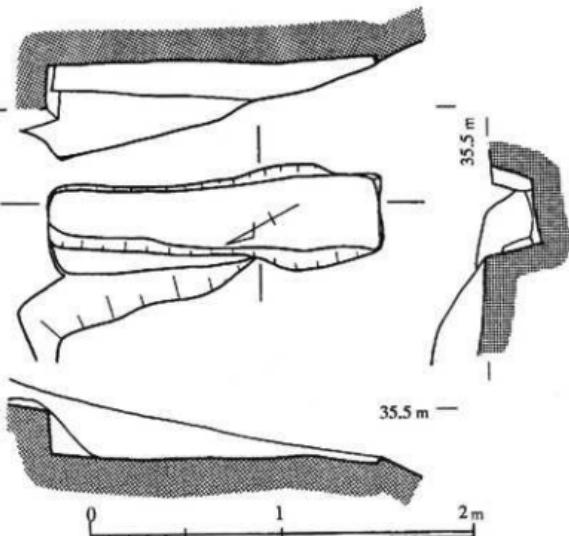
の南に位置する平面小判形を長くした形の素掘り土壙である。主軸方位はN-67°-Wを測り、中6号墓とほぼ平行するかたちとなっている。

ただ東方部は後世の掘削によって欠損している。残存長170cm、西端上幅42cm、同下幅32cmを測り、東方の掘削部脇上幅は40cm、同下幅30cmとなっている。墳底は西方がやや高くなっていることから、被葬者の頭位は西方と判断された。この土壙に関係する遺物は認められなかった。



第89図 A I 区中 7 号墓実測図

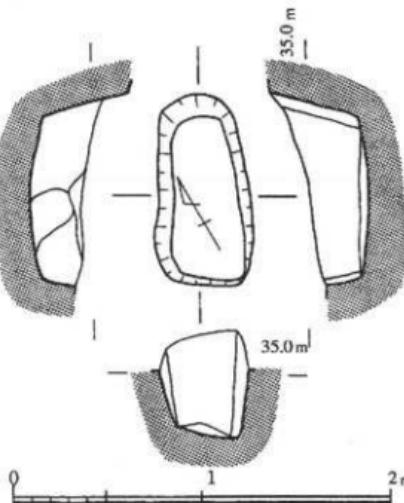
A I 区中 8 号墓 (第90図) 中5号墓の南にそれとほぼ直行するかたちで掘り込まれている平面長方形の素掘り土壙で、主軸方位はN-31°-Eとなっている。土壙の中央より北側の東西及び北壁は若干の立上りを残していいるが、南端は墳底の平面形がやっと確認できる程度まで壁面が削平されている。全長174cm、北端上幅34cm、同下幅25cm、南端下幅40cmとなっており、深さは残存状態の比較的良好な北端で23cmを測る。墳底面はほぼ水平となっているが、南端が幅広となっていることから被葬者の頭位は南方と判断された。この土



第90図 A I 区中 8 号墓実測図

壙に關係する遺物は認められなかった。

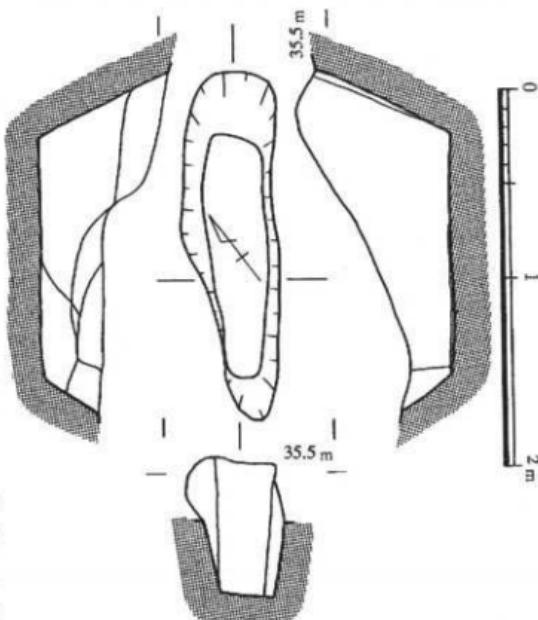
A I 区中 9号墓 (第91図) 中8号墓の南西に位置する平面小判形の素掘り土壙で、主軸方位はN-27°-Eとなっている。全長103cm、北端上幅40cm、同下幅25cm、南端幅45cmで、残存状態の良好な北端では深さ60cmを測る。壙底面は中央部が若干窪むかたちとなっているが、南端がやや広いことから被葬者の頭位は南方と判断された。この土壙に關係する遺物は認められなかった。



第91図 A I 区中 9号墓実測図

A I 区中 10号墓 (第92図) 中5号墓～10号

墓によって構成される墓群の、最も西端に位置する平面が長楕円形となる素掘り土壙である。主軸方位はN-40°-Wとなっている。全長185cm、北端上幅35cm、同下幅30cm、南端上幅30cm、同下幅15cmを測り、深さは残存状態の良好な北端で、70cmとなっている。壙底はほぼ水平となっているが、北端がやや幅広となっていることから被葬者の頭位は北方と判断された。



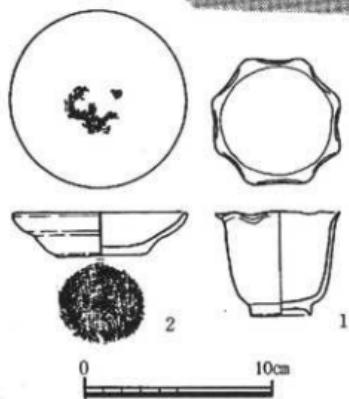
第92図 A I 区中 10号墓実測図

て東方が広いこと  
から被葬者の頭位  
は東方と判断され  
た。

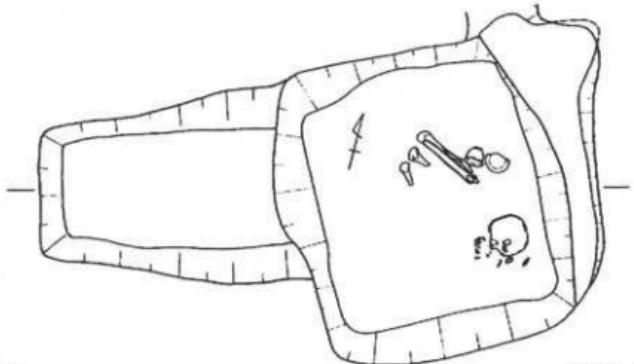
この土壤に関係  
する遺物は認めら  
れなかった。

A I 区中12号  
土墓(第95図)

中11号墓の南に位  
置する平面長方形  
の素掘りの土壤で、主軸方位はN



第94図 A I 区中14号墓出土遺物実測図



第93図 A I 区中11・14号墓実測図

-100-Wとなっている。この土壤は東に隣接する小さな土壤と重複しており、小土壤(古)～中12号墓(新)という関係が認められた。中12号墓は全長90cm、西端上幅40cm、同下幅30cm、東端上幅40cm、同下幅30cm、深さ25cmを測る。墳底面はほぼ水平となっている。これに関係する遺物は認められなかつた。

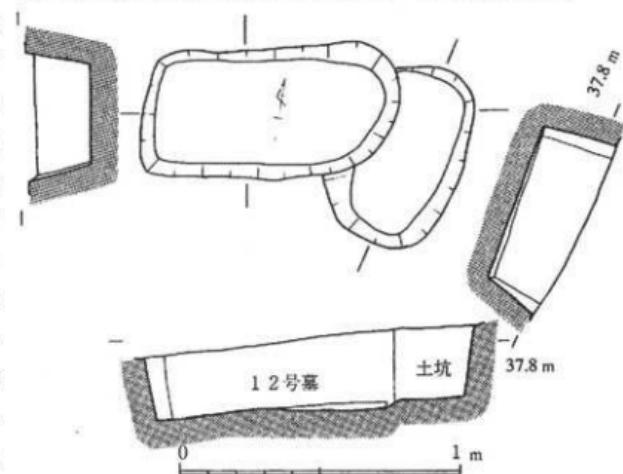
A I 区中13号墓(第96図) 中16号墓の南に位置する平面方形の土壤で、主軸方位はN-41°-Wとなつてゐる。北端上幅68cm、同下幅45cm、南端上幅55cm、同下幅40cm、深さ75cmを測る。墳底

面はほぼ水平で、平面は台形となっている。これに関係する遺物は認められなかった。

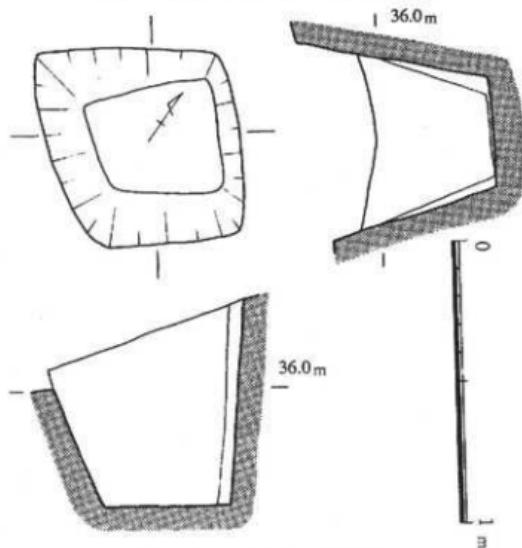
A I 区中 14 号墓（第93図）中 11 号墓の東半部と重複する平面隅丸方形の素掘り土壙で、主軸方位は N-25°-W となっている。土壙の東端上縁は別の掘り込みと重複しているが、新旧関係は不明である。主軸南北長 120 cm、北端上幅 120 cm、同下幅 75 cm、南上幅 100 cm、同下幅 70 cm、深さ 155 cm を測る。壙底の形態は上縁の相似形で、ほぼ水平となっている。壙底中央やや東よりには青年後半から壮年後半と推定される男性人骨 1 体がみられた。埋葬時の姿勢は正坐位で埋葬方位は N-70°-W と判断された。人骨の残存状態は悪く、頭及び脚の一部を残すのみであった。遺物としては人骨以外に磁器湯飲み 1 点、土師質土器 1 点が出土した。

磁器湯飲み（第94図・1）口径 6.5 cm、高さ 5.5 cm を測る白磁である。口縁を上方から等間隔で 8 個所にわって押圧を加えることにより華弁状の縁をつくり出している。全体に薄い造りで、モダンな感じがする。19世紀前半の肥前系の磁器であろう。

土師質土器（2）口径 9.3 cm、高さ 2.2 cm、底径 4.6 cm を測る



第95図 A I 区中 12 号墓・1 号土坑実測図



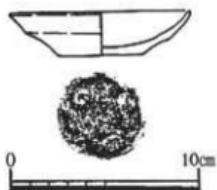
第96図 A I 区中 13 号墓実測図

もので、逆ハの字状に大きく聞く体部をもち、器肉は比較的薄い。底裏面には糸切り痕跡がみられる。

全体に淡い黄色を示し、焼成はややあまい。

A I 区中 15 号墓(第97図)中14号墓の南に位置する平面方形の素掘りの土壤で、主軸方位は N-22°-W となっている。北端上幅110cm、同下幅75cm、南端上幅100cm、同下幅85cm、深さ175cmを測る。墳底はほぼ水平となっており、その中央やや南西よりには熟年から老年と推定される男性人骨1体がみられた。埋葬姿勢は正座位で、埋葬方位は N30° W と判断された。人骨の残存状態は悪く、頭部の一部及び脚部の主要部分がみられたにすぎない。人骨片に混じて土師質土器が2点出土した。1点は完形で、正位置であったが他のものは体部の破片であった。

墳底の西壁沿いに全長45cm、北端幅20cm、同下



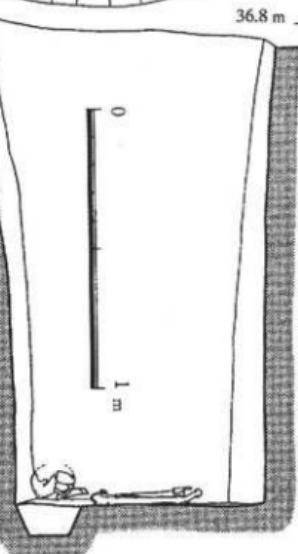
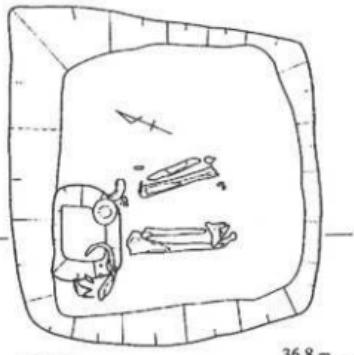
第98図 A I 区中15号墓出土物実測図

幅15cm、南端上幅25cm、同下幅14cm、深さ10cmの

掘り込みが認められた。この掘り込みには人骨片などの遺物はみられなかった。

土師質土器(第98図)口径9・5cm、高さ2・3cm、底径4・4cmを測るもので、逆ハの字状に聞く体部をもち、器肉は比較的薄い。全体に淡い黄赤色を示し、焼成はややあまく底裏面の回転糸切り痕跡も判然としない。

A I 中 16 号墓(第99図)中12号墓の南に位置する平面方形の素掘り土壤で、主軸方位は N-22°-W となっている。



第97図 A I 区中15号墓実測図

北端上幅65cm、同下幅60cm、南端上幅67cm、同下幅63cm、深さ117cmを測る。壙底はほぼ水平となっており、中央やや北に壯年と推定される男性人骨1体がみられた。埋葬姿勢は立膝坐位で、埋葬方位はN-20°-Wと判断された。人骨の残存状態は極めて良好であった。この他遺物としては、人骨の間から土師質土器2点、鉄器1点が出土した。

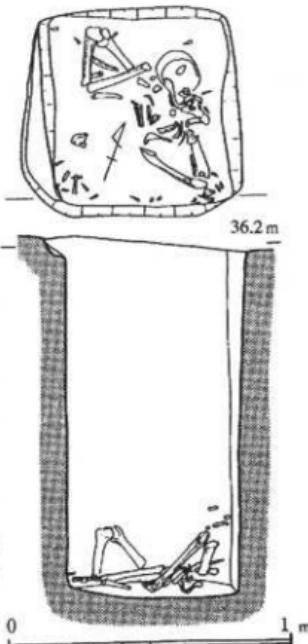
土師質土器(第100図)全体が窺える1点は口径9cm、高さ2cmを測るもので、若干湾曲しながら立ち上がる体部をもち、器肉は比較的厚い。底裏面には回転糸切り痕跡がみられる。全体に淡い肌色を示し、焼成は比較的良好である。

他の土師質土器(2)は底部付近の破片で、底径4cmを測り、全体に淡い赤黄色を示し、焼成は比較的良好である。底部裏面には回転糸切り痕跡が認められる。

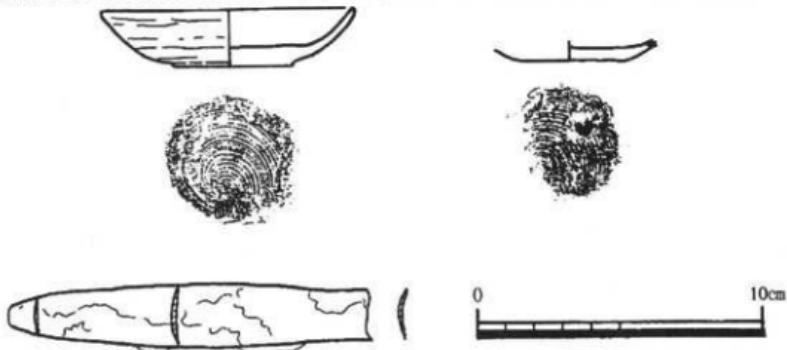
鉄器(3)上下端部を欠損する剣形の鉄製品で、残存長12.5cm、最大幅2.4cmを測る。横断面は凸レンズ状を示す。側辺は上端に向かって徐々に細くなっている。元部は最大幅付近から下方に向けて若干くびれている。剣形と記したが鋒化のためか刃物のような鋭さはみられない。このため用途は不明である。

中17号墓(第101図)中13号墓の南に位置する平面方形の素掘り土壤で、主軸方位はN-17°-Wとなっている。

主軸長70cm北端上幅63cm、同下幅60cm、南端上幅60cm、同下幅65cm、深さ170cmを測る。壙底はほ



第99図 A I区中16号墓実測図



第100図 A I区中16号墓出土遺物実測図

は水平となっている。

この横底には壮年後半から熟年前半と推定される男性人骨1体が見られた。埋葬姿勢は仰臥坐位で、埋葬方位はN-30°-Wと判断された。人骨の残存状態は比較的良好であった。

西壁際の壙底で土師質土器、銭貨が出土した。

土師質土器(第102図)土器は2点あって、口径8・8cm高さ1・3cmを測るもので、ハの字状に大きく開く体部をもち、器肉は全体に極めて薄い造りとなっている。底部裏面には、回転糸切り痕跡がみられた。焼成は比較的良好で、淡い肌色を示す。もう1点の土器は口径8・8cm高さ1・5cmを測るもので、ハの字状に大きく開く体部をもち、器肉は前者と比べると若干厚く感じられる。

底裏面には回転糸切り痕跡がみられる。焼成は比較的良好で、淡い黄色を示す。体部外面には成形時の水挽き痕跡が顕著にみられた。

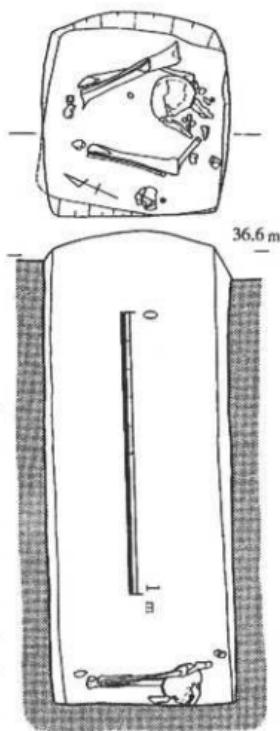
銭貨(第102図)前述した土師質土器の南脇から出土したもので、5枚が重なって銹化している。これらの内訳は上方から銅銭1枚、鉄銭1枚、銅銭2枚、鉄銭1枚となっており、一番上のものは裏面を上面としているため、その種類を明らかにしかなかった。ただし、鉄銭が含まれていることからこれが寛永鉄銭であるとすれば、埋葬時期については元文4年(1739年)以降ということになろう。

A I 区中18号墓(第103図)中15号墓の南に位置する平面方形の素掘り土壤で、主軸方位はN-36°-Wとなっている。

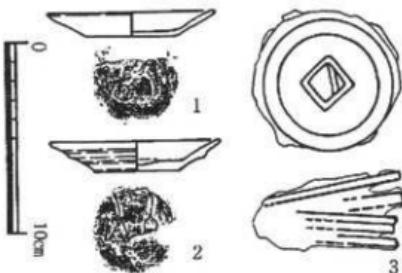
この土壤は後述する中2号土坑と重複しており、中18号墓(古)～中2号土坑(新)という関係が認められた。

主軸長70cm、北端上幅60cm、同下幅65cm、南端上幅58cm、同下幅70cm、深さ185cmを測る。

土壤の掘り込みは下方に向かうにしたがって



第101図 A I区中17号墓実測図



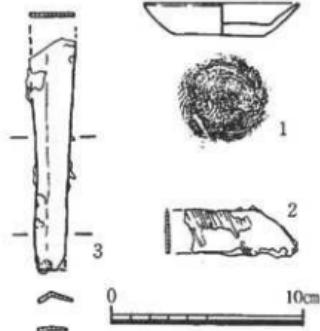
第102図 A I区中17号墓出土遺物実測図

外に若干ひろがる傾向を示している。つまり土壤上面の大きさよりも、壙底面積が一回り大きいものとなっている。壙底は中央がやや高くなっている。この中央やや東よりで、熟年と推定される男性人骨1体がみられた。人骨の残存状態は悪く、頭部の一部と長骨が若干認められたにすぎず、埋葬姿勢、方位の詳細については不明であった。人骨以外の出土遺物は鉄器2点、土師質土器3点があった。

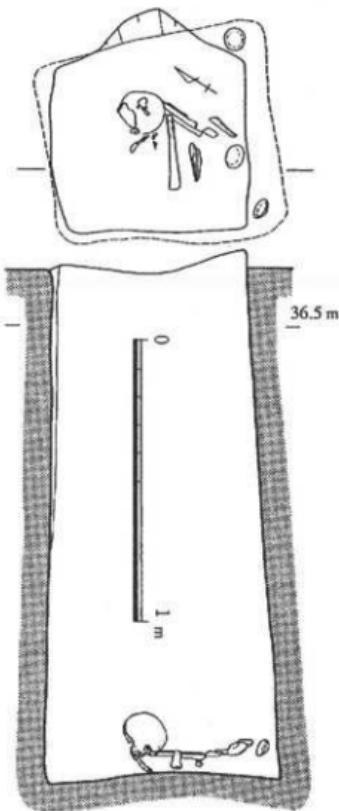
**土師質土器**（第104図・1）いずれも皿形の土器で、逆ハの字状に大きく開く体部をもち底部が厚い造りとなっており、底部裏面には回転糸切り痕跡がみられた。

口径8cm、高さ1.6cmを測る。焼成はいずれも良好で、淡い黄赤色を示す。鉄器は2点あって、(2)は上部を欠損する狭い板状の形態となっている。上方の横断面は直線状であるが、中央より下方は浅いV字形となっている。刺刀の可能性も考慮されよう。中16号墓出土鉄器と同じ形態のものと推定される。(4)は鎌の先端を思わせる鉄片で、一方の辺は直線的であるが、他方は湾曲して前述の辺に達している。一方の面には斜め方向に木質が付着している。

A I 区中19号墓（第105図）中17号墓の南に位置する平面



第104図 A I 区中18号墓出土遺物実測図



第103図 A I 区中18号墓実測図

方形の素掘りの土壙で、主軸方位はN-28°-Wとなっている。主軸長85cm、北端上幅70cm、同下幅55cm、南端上幅60cm、同下幅50cm、深さ80cmを測り、他のものと比較すると浅いことが注意される。壙底はほぼ水平となっており、人骨はみられなかった。遺物は南西隅の底面よりやや浮いて木片1点と簪1点が、南東壁沿いでも壙底面より若干浮いて磁器飯茶碗1点が出土した。

簪は木片の直下から木理方向に沿う形で出土した。

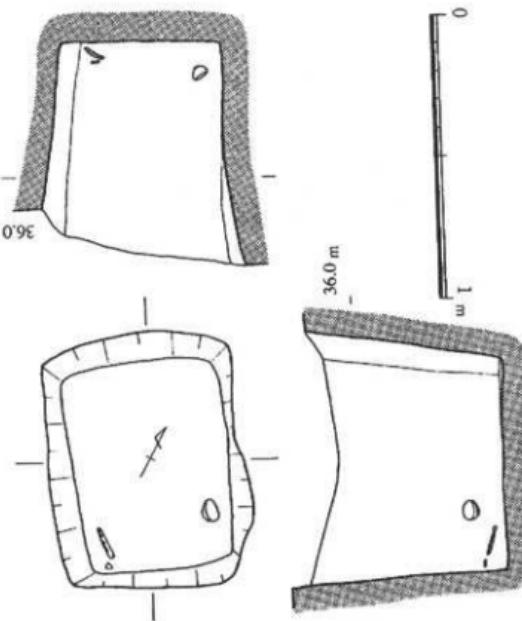
木片(第106図・1)は長さ15cm、幅3cm、厚さ0・3cmを測る針葉樹の柾目板である。両端はさざくれており、加工痕跡は認められない。

簪(2)銅製で、上端付近から二又に分かれる形となってい。二又に分かれた脚の先端は腐食のため欠失しており、残存長は9・5cmを測る。脚部の一部に頭髪がみられたことから、簪は被葬者の頭部に直接接着けた品であったと判断された。

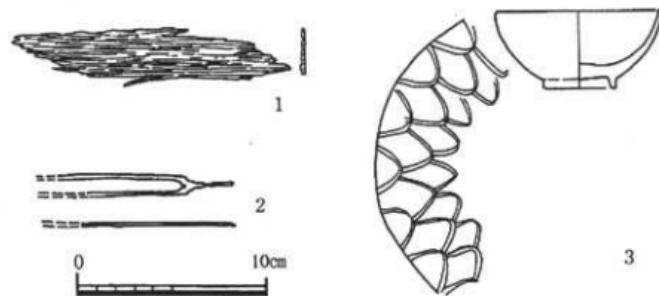
#### 飯茶碗 (3) 磁器製の飯茶

碗で、口径8・8cm、高さ4・1cmを測る。器肉は比較的厚く、全体に淡い灰色を示す。外面には一面に網目文様が描かれている。

A I 区中20号墓(第107図)中19号墓の東に位置する平面方形の素掘りの土壙で、主軸方位はN-24°-Wとなっている。主軸長92cm、北端上幅65cm、同下幅80cm、端上幅70cm、同下幅70cm、深



第105図 A I 区中19号墓実測図



第106図 A I 区中19号墓出土遺物実測図

さ183cmを測る。墳底面はほぼ水平となっており、中央には壮年と推定される女性人骨が1体がみられた。

埋葬姿勢は仰臥坐位で、埋葬方位はN40°Wと判断された。人骨の残存状態は極めて良好であった。墳底に広がる人骨片のはば中央部から、銭貨3枚が5cmほどの距離をおいて出土した。人骨の頭部兩脇では、土師質土器が1点、口縁を南に向けて口縁を立てた状態で出土した。

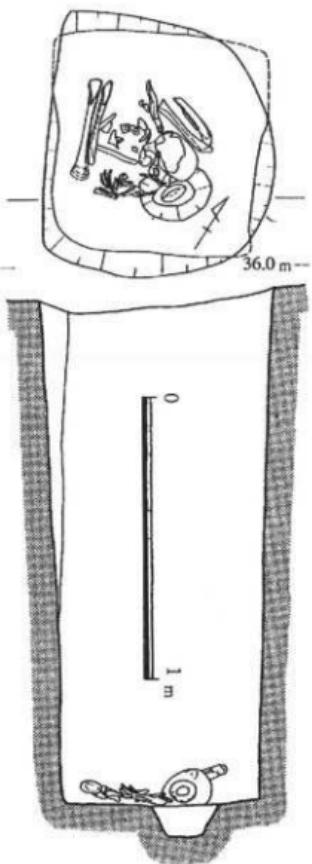
これら出土遺物を取上げた後、底面を精査したところ、中央やや南よりで、平面小判形の落ちこみが認められた。

この落ちこみは上縁長径25cm、同短径20cm、底部長径15cm、同短径10cm、深さ15cmを測るものであった。

この落ち込み内に、人骨片や他の遺物は認められなかつたことは、東54号墓、中15号墓の例と同様であった。

銭貨(第108図・1・2)いわゆる六道銭として納入されたもので、1枚は鋳化が著しく文字の判読は不可能であるが、他の2枚は寛永通寶である。いずれもス賞銭である。

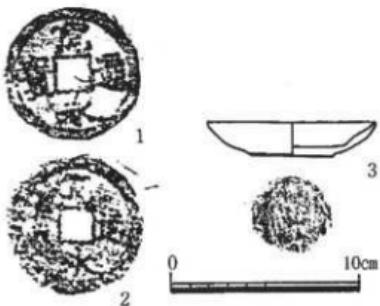
土師質土器(3)口径8・9cm高さ1・7cmを測るもので、ゆるやかに湾曲しながら立ち上がる体部をもち、器壁は比



第107図 A I 区中20号墓実測図

較的厚い。底部裏には回転糸切り痕跡がみられる。焼成は良好で、全体に肌色を示す。

A I 区中2号土坑(第109図)中18号墓の東にあって、それと重複しており、両者の新旧関係は中2号土坑が新しいことは前述したとおりである。平面は楕円形、断面は皿形となっている。主軸方位はN—



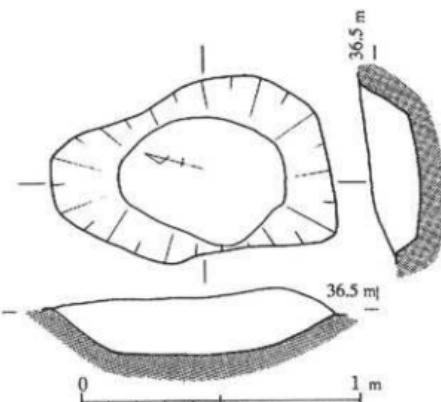
第108図 A I 区中20号墓出土遺物実測図

20° - Wで、主軸長径100cm、短径60cm、深さ20cmを測る。

遺物は認められず、性格は不明である。

#### A I 区中 2 号墓(第83図)

S B 0 I を囲む、コの字状溝の南東壁沿いに作られた火葬墓である。これは溝の壁と底を若干掘り込み火葬骨を納入した後、埋め戻しその上に長さ25cm幅15cm厚さ10cmほどの扁平な自然石を3個置いたものである。石の

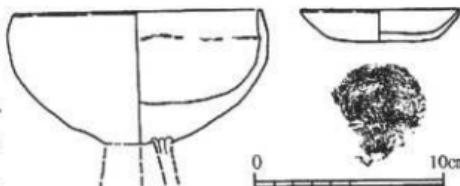


第109図 A I 区中 2 号土坑実測図

下方からは火葬骨片及び木炭片が若干出土した。これら骨片は掘り込み底より約5cm浮いた状態でみられたことから、火葬骨のみを拾い上げたのでなく、焼き場の土ごと納められたものと判断された。被葬者が成人と仮定した場合、ここで検出した火葬骨の量は極めて少量であった。

S D 0 II(第79・84図) S B 0 I の東にあって、中1号墓付近から中2号土坑に向かって伸びる溝状遺構である。この遺構はその中ほどで若干東へ

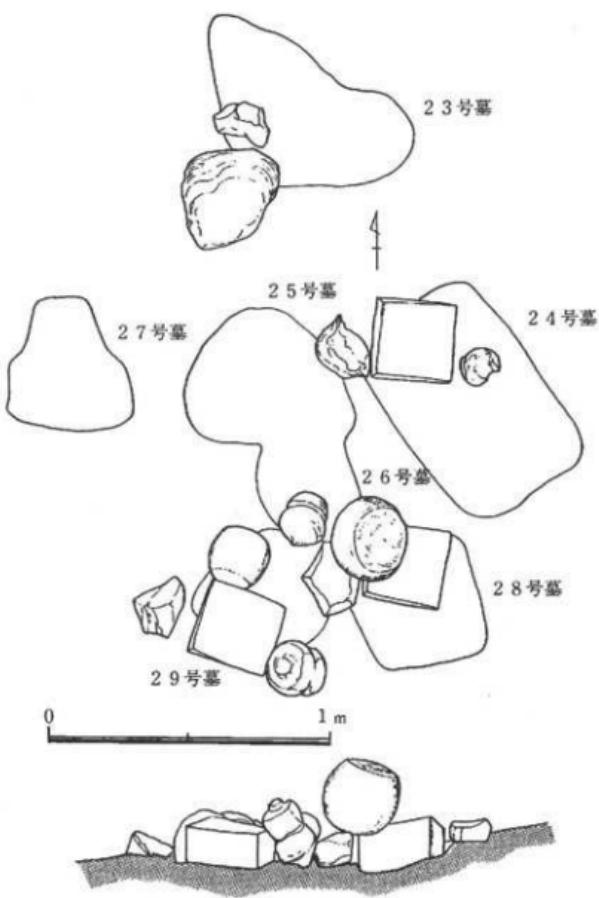
張り出しかたちで弧を描き、南端は西に向かうかたちで消えている。横断面形は、東西両壁が逆ハの字状に大きく開くかたちとなっており、底面はほぼ水平を保つ。溝の上幅90cm、底幅40cm、深さの平均は40cmを測る。東西の壁の掘り込み角度に若干の相違が認められる。(第84図)に示すように西壁は底からの傾斜角度は30°、東壁は75°となっている。こ



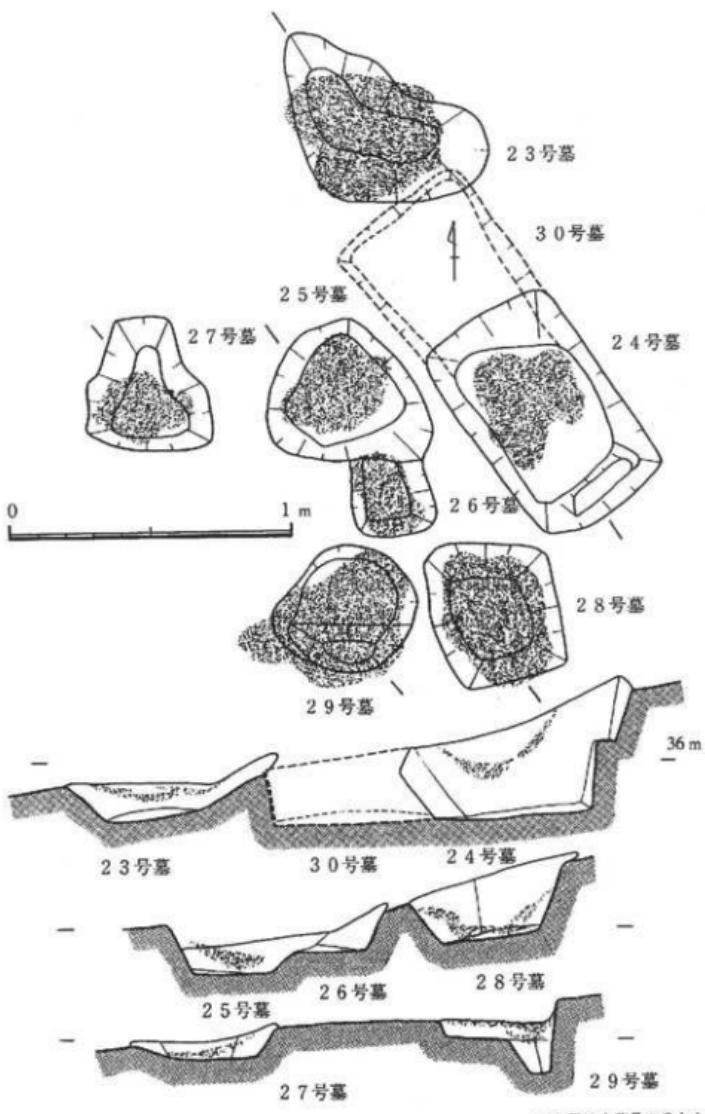
第110図 A I 区中 S D 0 II 出土遺物実測図

の角度からすると、この溝はその西側に壇状の高まりを削り出した際の東の境界を意図したものであろうと推定された。つまり溝の西壁は、壇状の高まりの東側斜面の一隅であった可能性が高い。もとより S B 0 I の造成に伴い、その大部分は削平を受けており、壇状遺構の規模や性格については不明とせざるを得ない。溝の北端の埋土中から、脚部を欠失した土師器高杯1点が出土した。

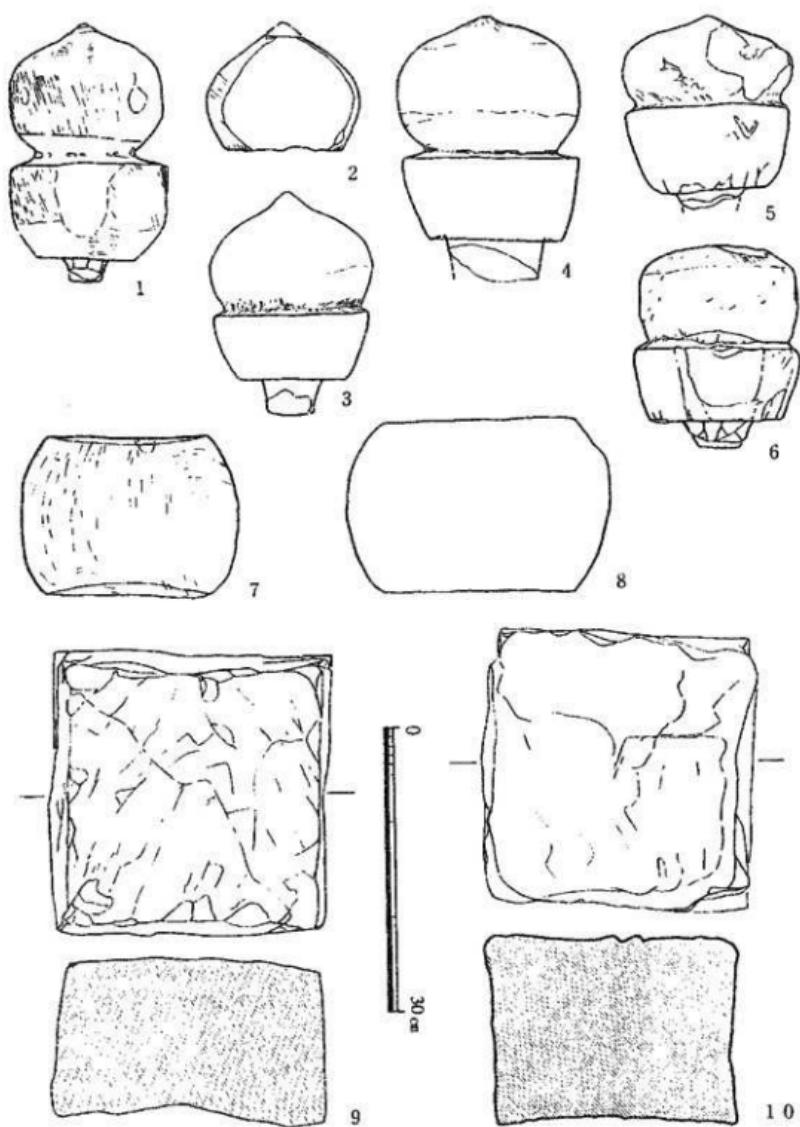
土師器高杯(第110図)口径9cm、深さ3cmを測る半球形の杯部で、特に底部の器壁は比較的厚くなっている。焼成はあまく、内外面とも赤褐色を示す。古墳時代後期初頭のものと推定される。



第111図 A1区中火葬墓群検出状況実測図(1)



第112図 A1区中火葬墓群検出状況実測図（2）



第113図 A I区中出土石製五輪塔実測図（1）

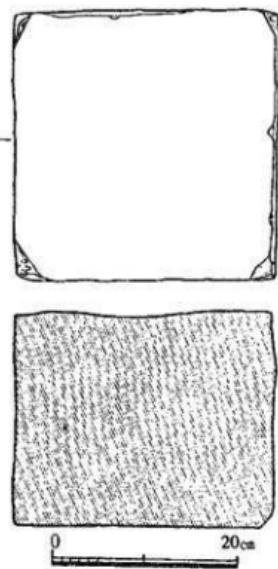
五輪塔を伴う火葬墓（第111・112図）SB01の北側の平坦面に営まれていたもので、表土を除去すると若干の五輪塔が認められた。

火葬墓は計7個所あって、いずれも浅い、不整形な墓壙となっている。

土壙内に納められた火葬骨は、その埋め戻しが不徹底であったらしく、地輪下邊の旧表土面で既に認めらる状態であった。北側から中23号墓～中30号墓まで順次その概要を記すことにす。

中23号墓 長径82cm、短径50cm、深さ15cmを測り、壙底付近に火葬骨が若干認められた。

中24号墓 平面長方形の土壙で、主軸長85cm、幅50cm、深さ45cmを測る。後述するがこの土壙は中30号墓と重複しており、中30号墓（古）～中24号墓（新）という関係が認められた。壙底付近で若干の火葬骨が認められた。

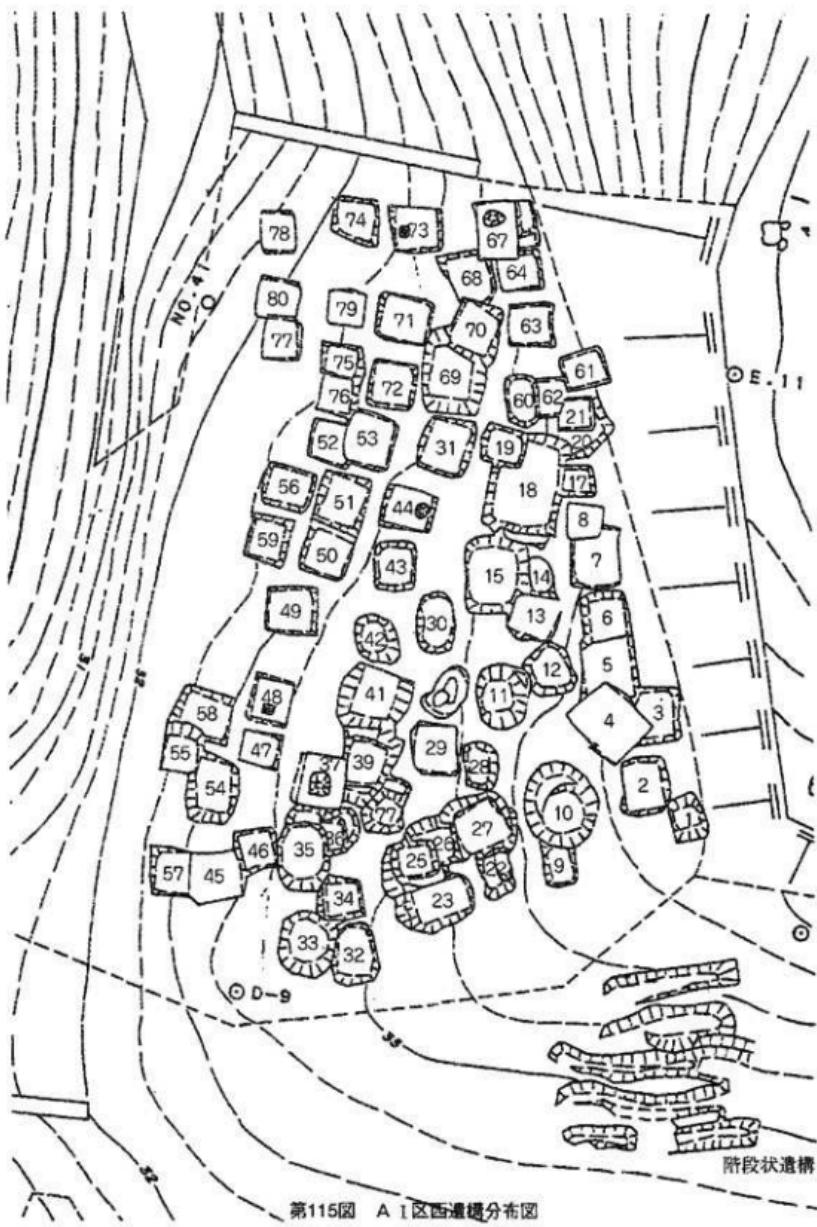


第114図 A1区出土石製五輪塔実測図(2)

中25号墓 中24号墓の西にあって、中26号墓とは重複している。長径60cm、短径45cm、深さ20cmを測る。壙底付近で火葬骨が若干認められた。

中26号墓 中25号墓の南に接して掘り込まれているもので、両者の新旧関係は明らかにしえなかった。平面形はほぼ方形をしており、一辺30cm、深さ12cmを測る。壙底付近で若干の火葬骨が認められた。

中27号墓 中25号墓の西にあって、長径47cm、短径35cm深さ10cmを測る。壙底付近で若干の火葬骨が認められた。



第115図 A-1区西遺構分布図

#### (4) A I 区西方で検出した遺構と遺物

A I 区中の辺りから、南西方向と北西方向に尾根が 2 つに分かれる。この 2 つの尾根上とそれに挟まれて形成された谷部の範囲を便宜的に“A I 西方”と呼ぶ。A I 西方では谷部南側、谷部北側、北西尾根上に 2 か所の平坦面が検出された。

谷部南寄りの平坦面は A I 区中の近世墓群との比高差 2.5 m の、標高 31.5 m ~ 34.0 m に位置する。東西 11 m × 南北 14 m の非常に広い平坦面である。山側は明らかに削り込まれていること、谷側には厚く盛土が施されていることから、ある時期に山側を削った上を谷側に盛りこの広い平坦面を造成したものと考えられる。土壌検出時にはやや西に傾斜しているが、盛土の流出がなければ 33.5 m 前後のほぼ平坦であったものと思われる。この平坦面には 80 基からなる土壙が密集している。墓域の端は東・北・南の三方が直線的で明瞭であり、墓域をかなり意識していたことがうかがえる。各土壙は切り合いながら複雑に列を成して並んでいる。土壙の平面形はほとんどが方形であるが、円形のものも若干含まれる。土壙は一辺 50 cm ~ 206 cm 、深さは 40 cm ~ 220 cm である。土壙内からは、人骨のほか、銭貨・陶磁器・鉄器・釘などの遺物が出土した。出土した遺物から近世に属すものと推定できる。

近世墓の墓域の中央では土器窯遺構を検出した。平面形は不整形であり、近世墓が掘り込まれなかったために偶然残ったようである。遺構内からは土師器高杯や須恵器罐などが溝に崩落した状況で出土しており、古墳の周溝のようなものの存在を想起させる。

谷部北寄りの標高 32.5 m には斜面に沿って細い平坦面がある。ここからは火葬骨を伴った小土壙を 4 か所検出した。遺物は伴っていないため時期は不明である。

北西方向の尾根上からは、平坦面を 2 か所検出した。81 号墓は A 区北横穴の直上に位置する。120 cm の大きさの長方形の土壙であり、深さは 50 cm である。土壙内から波来銭が出土していることと五輪塔を伴っていることから 中世の遺構と推定できる。82 号墓は 81 号墓からやや下った場所に位置する。人頭大の石を方形に配列し、中央に径 77 cm 、深さ 130 cm の円形の土壙を掘り込んでいる。遺物は伴っていないため時期は不明である。

以下西方の近世墓群、土器窯遺構、尾根上遺構、火葬墓と、順次その概要を記していくこととする。

西 1 号墓（第 117 図） 墓域の東南隅に位置する。堅い地山を掘り込んだ浅い土壙である。

平面はほぼ正方形の素掘り土壙である。大きさはやや小さく長辺 78 cm ・ 短辺 57 cm を測る。深さは浅く、検出面から 37 cm を測る。主軸方位は N - 7° - W である。底面はほぼ正方形を呈しているため、東西に対して南北の壁の方が掘り込み角度が緩やかである。人骨は検出されなかつたが土師質土器皿 1 が出土している。

土師質土器皿（第116図）土壤

の中央やや北西よりで、土壤の検出面の高さから出土している。

法量は口径8.0 cm、底径4.0 cm、器高1.5 cmを測り、色調は淡黄赤色を呈す。水挽きにより成形され、回転糸切り技法により切り離されている。土壤を埋めたあと供獻されたものと考えられる。

西2号墓（第118図） 墓域の最東列の南から2番目にあたる。堅い地山を掘り込んで上下2つの土壤が掘り込まれている。

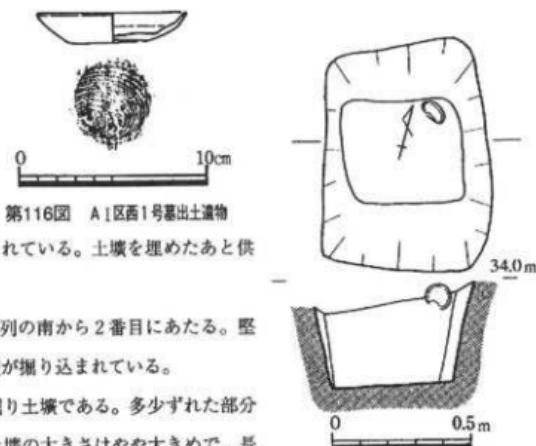
上下とも平面はほぼ正方形の素掘り土壤である。多少ずれた部分が平坦面として認められる。下の土壤の大きさはやや大きめで、長辺100 cm、短辺70 cmを測る。上の土壤は切り合っているため短辺は不明だが、長辺が同じ大きさであることから下と同じ大きさであったと考えられる。上の土壤の深さはやや浅く、検出面から70 cmを測る。下の土壤は深さは非常に深く、検出面から195 cmを測る。主軸方向は上下ともN-7°-Wとなっている。各壁面はほぼ垂直に掘り込まれている。上下それぞれ1体ずつ人骨を検出した。遺物は検出面から墓石1個体分を検出した。また上の土壤に伴って草瓶1・銚子1・碗1・土師質土器皿1を、下の土壤に伴って土師質土器皿1をそれぞれ検出した。上の土壤に伴う人骨・遺物が攪乱されていないことから、下の土壤の埋葬後、上の埋葬が行われたものと考えられる。

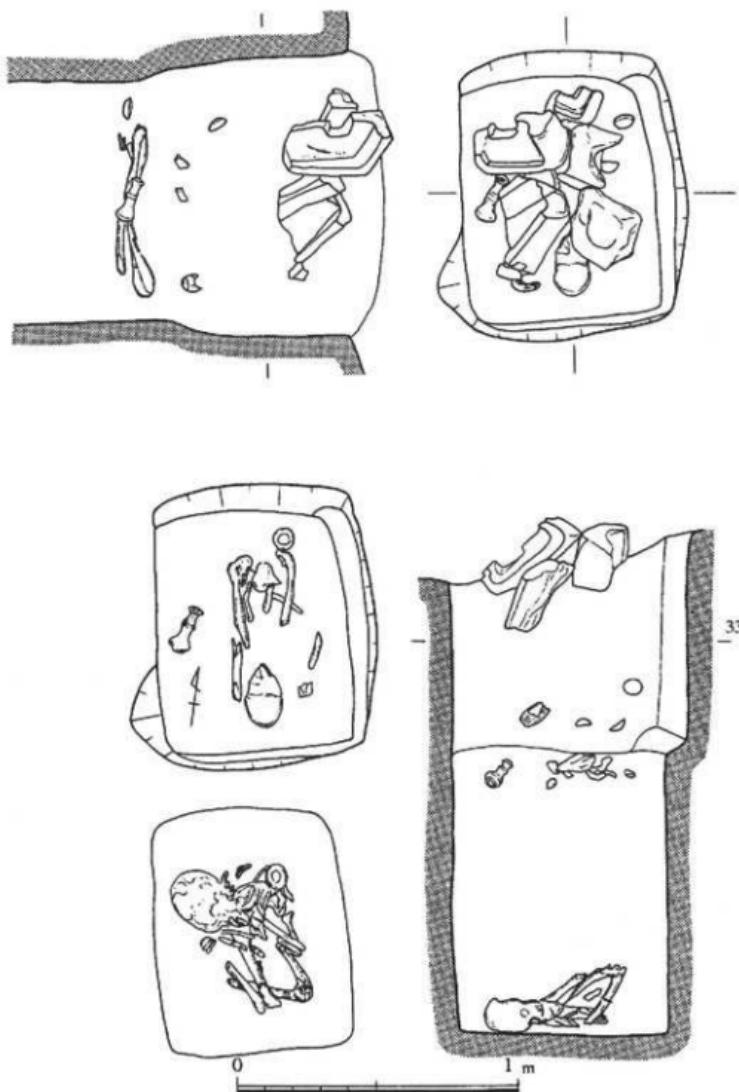
上の土壤に伴う人骨は熟年の男性と考えられる。仰臥坐位でN-15°-Wの方向を向いて埋葬されていた。下の土壤に伴う人骨は熟年の女性と考えられる。立膝坐位でS-55°-Eの方向を向いて埋葬されていた。

墓石（第119図） 土壤のはば中央に破片で集積していた。高さは遺構の検出レベルである。大きさは20 cm × 20 cm × 48 cmを測り、下にはぞが付く。左面下方には「椎九良 母」と銘が彫られている。

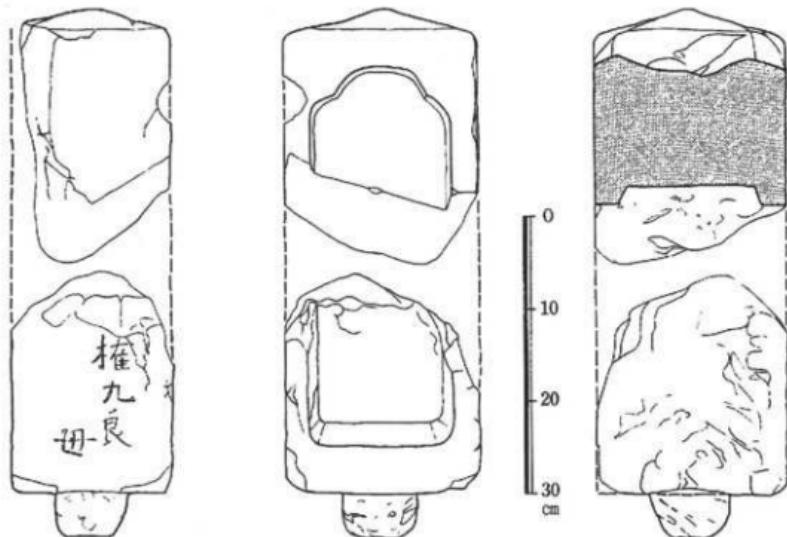
草瓶（第120図-1） 陶器。人骨の左側、底面レベルから出土した。大きさは口径6.0 cm、胴部径8.2 cm、高台径6.0 cm、器高16.9 cmを測る。色調は淡黄色であるが、口縁部から頭部にかけて暗褐色の錆軸がかかっている。胴部には笹の文様が施されている。18世紀に九州で焼かれたと考えられる。

銚子（第120図-2） 磁器。底面から20 cm上の高さから出土している。大きさは胴部径8.0 cm、高台径5.0 cm、残存高10.0 cmを測る。色調は淡い白色であり、胴部下半には継方向の貫入がはしる。胴部には淡い藍色の網の中に草をあしらった文様が入る。





第118図 A I区西2号墓実測図

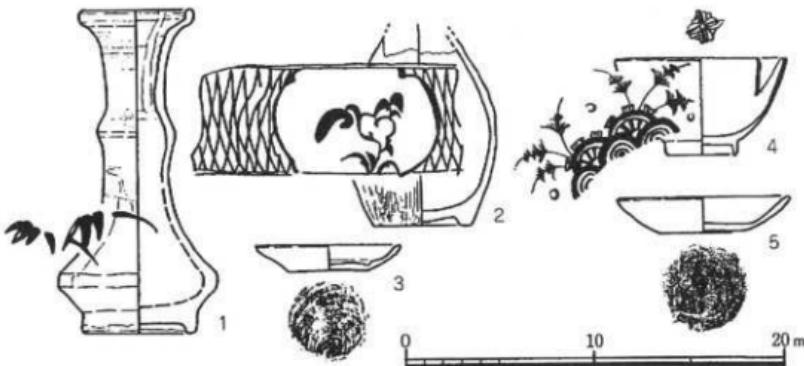


第119図 A I 区西 2号墓出土遺物実測図（1）

土師質土器皿（第120図-3） 人骨の右足元、底面レベルから出土した。大きさは口径9.5 cm、底径4.5 cm、器高2.0 cmを測り、色調は薄い赤色を呈す。水挽き成形後、回転糸切りにより切り離されている。

碗（第120図-4） 磁器。底面から20cm上の高さから出土している。大きさは口径9.0 cm、高台径3.7 cm、器高5.0 cmを測る。口縁部が打ち欠かれている。胴部には淡い藍色の車文と草をあしらった文様が入る。

土師質土器皿（第120図-5） 人骨の腰付近、底面レベルから出土した。大きさは口径7.7 cm、底径4.2 cm、器高1.3 cmを測り、色調は明灰黄色を呈す。水挽きにより成形され、回転糸切り技法により切り離されている。



第120図 A I区西2号墓出土遺物実測図（2）

西3号墓（第121図） 墓域の最東列の南から

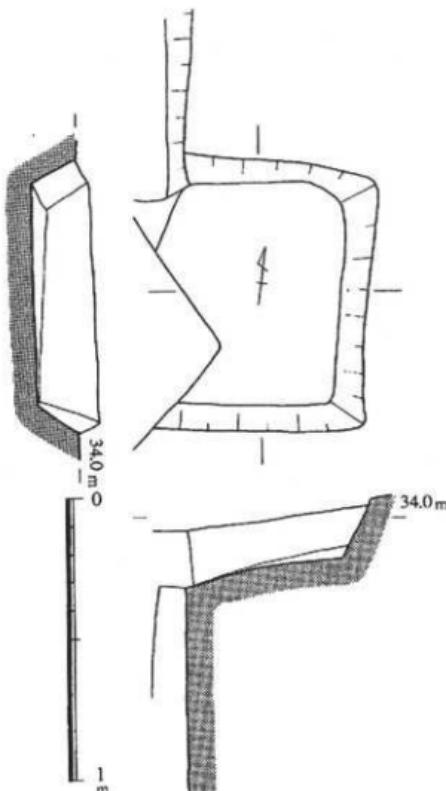
3番目に位置する。堅い地山を掘り込んだ浅い土壙である。

平面は方形の素掘り土壙である。西壁が西4号墓、西5号墓と切り合っている。大きさは東壁で96cmを測る。深さは検出面から26cmを測る。主軸方位はN 7° Wである。人骨・遺物は検出されなかった。

西4号墓（第122図） 墓域の最東列で、西4号墓、西5号墓の間に位置する。

平面はほぼ正方形の素掘りの土壙である。大きさは長辺124cm、短辺105cmを測る。土壙は深さは非常に深く、検出面から192cmを測る。主軸方向は最東列で唯一N-45°-Wとなっている。各壁面はほぼ垂直に掘り込まれている。底面で人骨と包丁、土師質土器皿を検出した。人骨は熟年の男性と推察される。仰臥坐位でSの方向を向いていた。歯の間に鰐の歯が検出された。

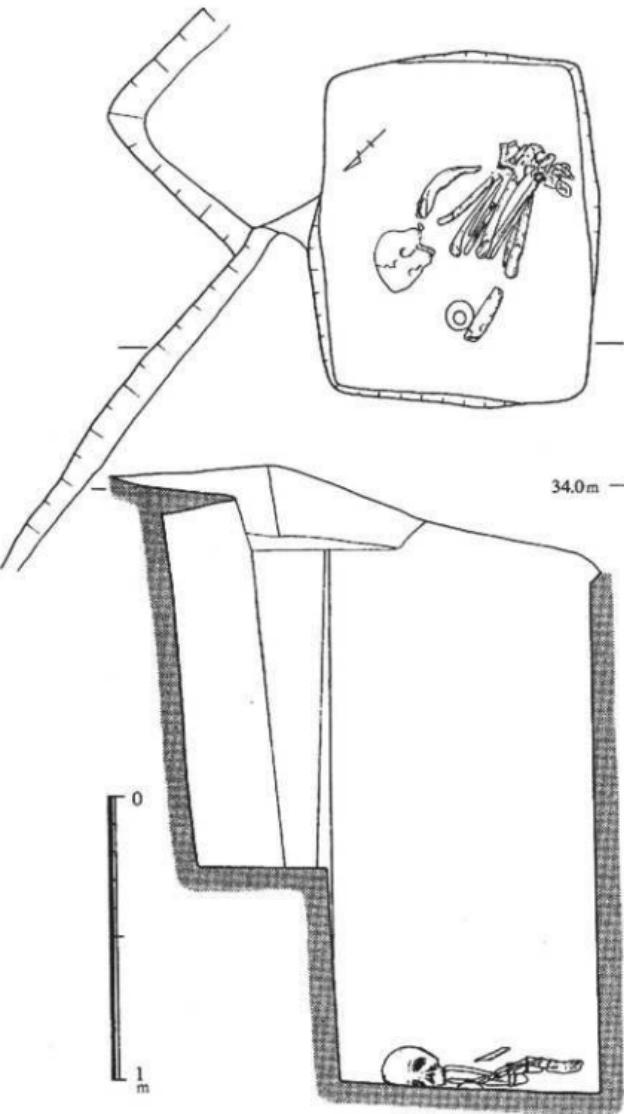
土師質土器皿（第123図-1） 包丁に隣接して出土した。大きさは口径9.0cm、底径4.4cm、



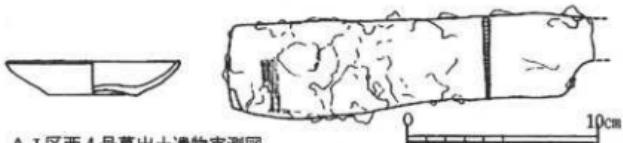
第121図 A I区西3号墓実測図

器高1.8 cmを測り、色調は淡黄赤色を呈す。水挽きにより成形され、回転糸切り技法により切り離されてい る。

包丁（第123図-2）人骨頭蓋骨の右側、底面レベルで出土した。柄の部分は欠損している。刃幅5.0 cm、残存長19.0cm、刃部長17.5 cmを測る。刃は研ぎ減りをしており、所々木質が付着している。



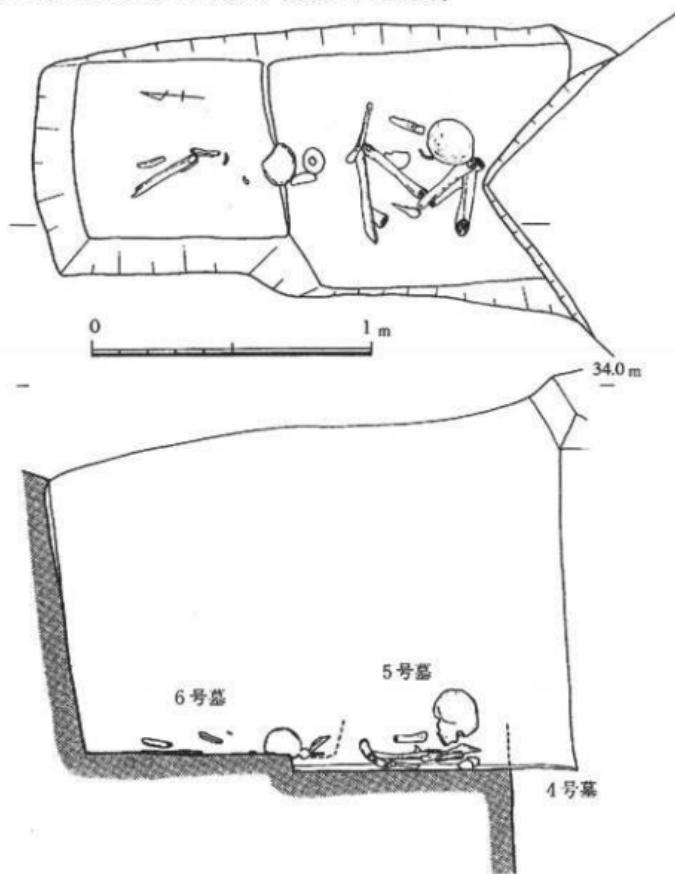
第122図 A I 区西4号墓実測図



第123図 A I区西4号墓出土遺物実測図

西5号墓（第124図） 墓域の最東列で、西4号墓、西6号墓と切り合ってる。

平面はほぼ正方形の素掘り土壌である。大きさは大きく、長辺125 cm、短辺109 cmを測る。深さはやや深く、検出面から130 cmを測る。主軸方向はN 7 Wである。東西の壁はほぼ垂直に掘り込まれている。底面の高さで人骨1体、鉄1、毛抜き1が出土した。



第124図 A I区西5・6号墓実測図

人骨は熟年の男性と考えられる。立膝坐位でN-70°-Wの方向を向いて埋葬されていた。

鉄（第124図-5） 人骨の足元付近で検出された。鉄製のにぎり鉄である。部分的に欠損しているが、全長は14cm程度、刃部長6cmを測る。視点の折り曲げ部の断面は幅7mm、厚さ4mmの長方形である。目の粗い布が付着していることから。毛抜きと一緒に目の粗い布袋に入れて遺体のそばに副葬されたものと推定される。

毛抜き（第124図-4） 長さ9.5cmを測る。厚さ2mm、幅8mmの鉄板を曲げて造られている。目の非常に目の粗い布が付着していることから、鉄と一緒に布袋にいれられていたと推定される。

西6号墓（第124図） 墓域の最東列で、西5号墓、西7号墓の間に位置する。

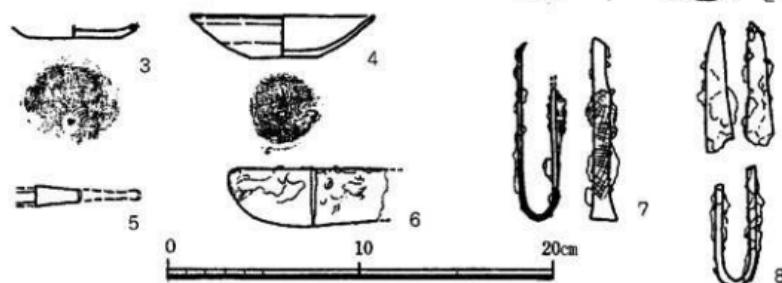
平面形は南壁が西5号墓と切り合っているため明瞭ではないが、人骨の出土状況から長径115cm以上、短辺80cmを測り大きい長方形であったことがうかがえる。深さはやや浅く、検出面から95cmを測る。主軸方向はN-7-Wである。底面の高さで人骨1体、包丁1、煙管1、土師質土器2、銅鏡2、そして頭蓋骨の下から鉄釘1が出土した。

人骨は女性骨をうかがわせる。仰臥坐位でN-5°-Wの方向を向いて埋葬されていた。頭蓋骨が西5号墓のプランにはみ出していることから、西6号墓が後に掘り込まれたことがわかる。

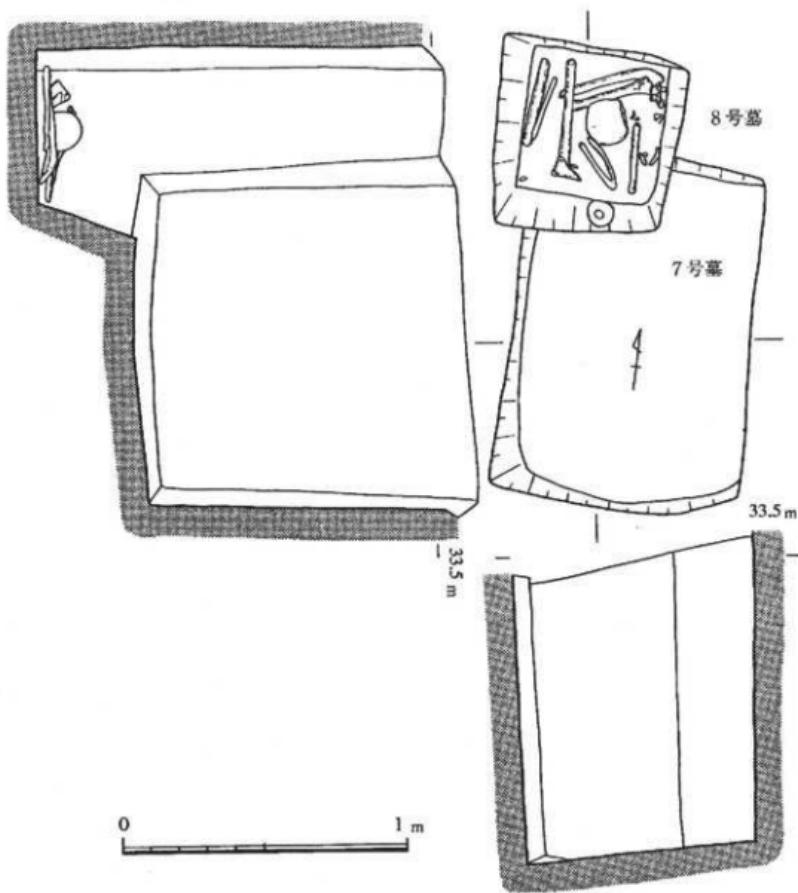
銭貫（第126図-1・2） 銅製。いわゆる六道錢として納入されたものであり、寛永通宝である。2枚とも残存状況は良好で文字が明瞭に読み取れる。内訳はハ寶錢2枚である。

土師質土器皿（第126図-3） 頭蓋骨に隣接して出土した。大きさは口径9.6cm、底径3.3cm、器高2.2cmを測り、色調は淡黄赤色を呈す。もう1枚は壙底の東端から出土した。煙管（第126図-4） 銅製。吸口側の金具は先端を欠損している。残存長2.2cm、羅字挿入口の口径1.0cmを測る。羅字は竹材を用いている。包丁（第125図-5） 人骨の頭骸骨付

近で検出された。先端部分以外は欠損している。刃幅3.0cm、残存長8.0cmの小型のものである。先端部分は丸い造りをしている。



第125図 A I 区西5・6号墓出土遺物実測図



第126図 A I区西7・8号墓実測図

西7号墓（第126図） 墓域の最東列で、西6号墓、西8号墓の間に位置する。

平面は長方形の素掘り土壙である。大きさは非常に大きく、長辺126 cm、短辺87cmを測る。深さはやや深く、検出面から115 cmを測る。主軸方向はN-7°-Wである。壙底の大きさは長辺104 cm、短辺80cmを測る。各壁はほぼ垂直に掘り込まれている。人骨、遺物は検出されなかった。

西8号墓（第126図） 墓域の最東列で、西7号墓、西17号墓の間に位置する。

平面は正方形の素掘り土壙である。大きさはやや小さく、長辺65cm、短辺62cmを測る。深さはやや深く、検出面から143cmを測る。壙底の大きさは長辺50cm、短辺50cmを測る。主軸方向はN7Wである。各壁はほぼ垂直に掘り込まれている。人骨と土師質土器皿1が出土している。

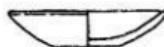
人骨は壮年後半～熟年前半の男性と推察される。仰臥坐位でN-85°Wの方向を向いて埋葬されていた。

土師質土器皿（第127図）頭骸骨に隣接して出土した。大きさは口径8.3cm、底径3.4cm、器高0.9cmを測る。水挽きにより成形され、回転糸切り技法により切り離されている。

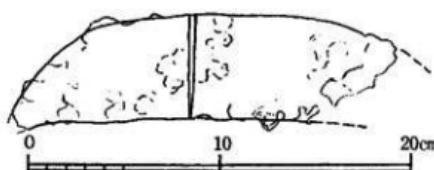
西9号墓（第129図） 東から2列目の最も南に位置する。

北壁が西10号墓と切り合っているが、新旧関係は不明である。平面は長方形の素掘りの土壙である。大きさはやや小さく、長辺75cm、短辺60cmを測る。深さはやや浅い、検出面から88cmを測る。壙底の大きさは長辺60cm、短辺40cmを測る。主軸方向はN-5-Wである。人骨は出土しなかったが鎌1が出土している。

鎌（第128図） 土壙中のやや北寄り、検出面から25cmの高さから出土した。柄の部分は欠損している。大形のもので、残存長18.0cm、幅5.5cm、厚さ0.5cmを測る。全体的に錆化が著しい。



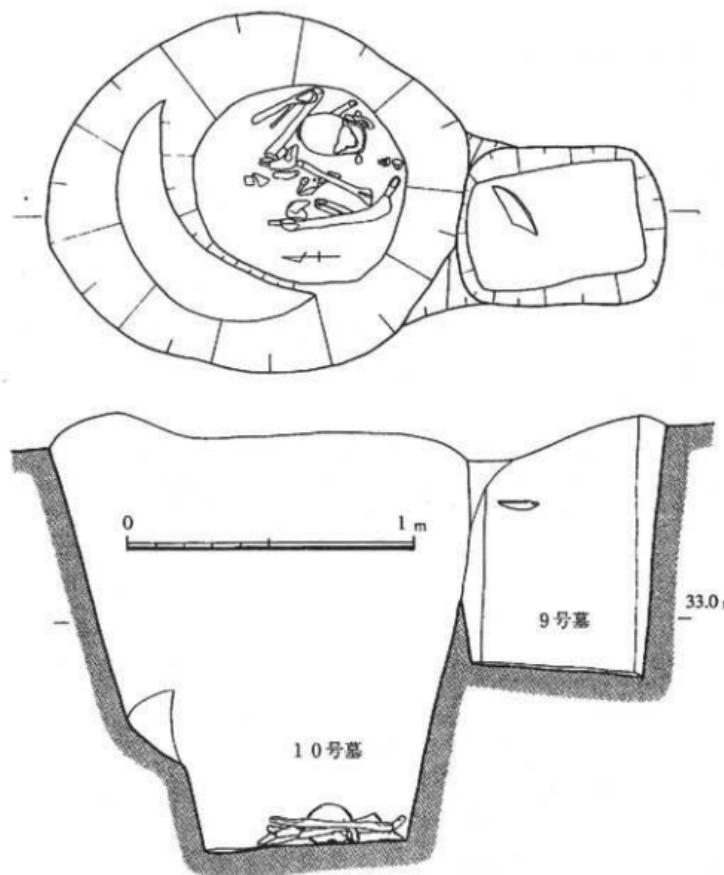
第127図 A I区西8号墓出土遺物実測図



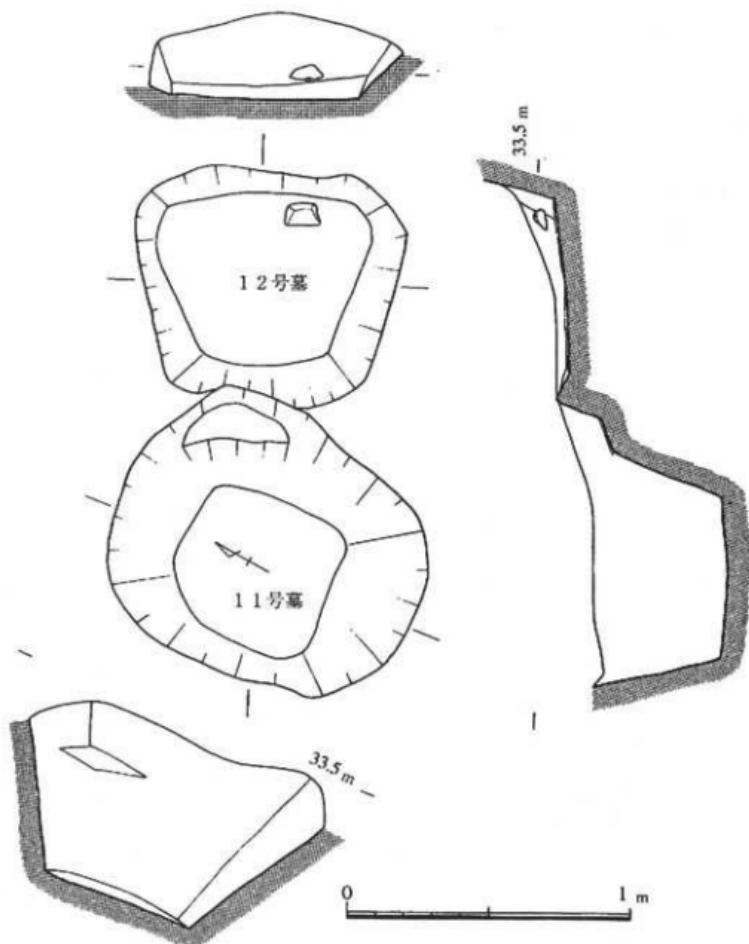
第128図 A I区西9号墓出土遺物実測図

西10号墓（第129図） 東から2列目の南から2番目に位置する。

平面は円形の素掘り土壙である。円形の土壙は少なく西33号墓とこの土壙だけである。大きさは大きく、直径140 cmを測る。深さはやや深く、検出面から88cmを測る。北壁には底面から40cmの高さに三日月上の平坦面ができている。人骨1体が出土している。人骨は壮年後半の男性をうかがわせる。壙底の大きさは直径75cmを測る。仰臥坐位でN-25°-Wの方向を向いて埋葬されていた。遺物は検出されなかった。



第129図 A I 区西9・10号墓実測図



第130図 A 1区西11・12号墓実測図

西11号墓（第130図）墓域のやや東に位置する。

平面正方形の素掘りの土壙である。大きさはやや大きく、長辺100cm、短辺90cmを測る。深さは浅く、検出面から66cmを測る。壁の掘り込み角度は緩やかである。壙底の大きさは長辺55cm、短辺54cmを測る。主軸の方向はN-7°-Wである。銭貨が5枚検出された。

錢貨（第131図） 銅製・鉄製。いわゆる六道銭として納入されたものであり、寛永通宝である。内訳は銅銭2枚、鉄銭3枚である。銅銭は一枚がス寶錢の文銭であり、もう一枚がハ寶錢である。鉄銭3枚は鋳化が進み付着しており、文字は判読できない。鉄銭がでていることから1739年以降に埋葬されていることがわかる。

西12号墓（第130図） 墓域のやや東に位置する。東から2列目、西13号墓の隣に位置する。

平面は不整方形の素掘り土壙である。大きさはやや大きく、長辺90cm、短辺81cmを測る。深さは非常に浅く、検出面から30cmを測る。壁の掘り込み角度は緩やかである。壙底の大きさは長辺70cm、短辺60cmを測る。主軸の方向はN-28°-Wである。土壙上面で拳

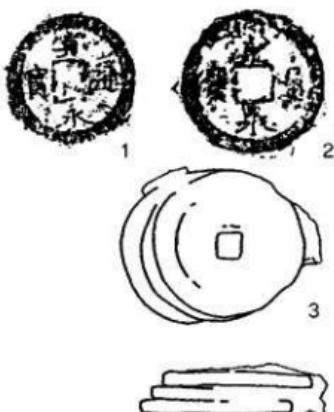
大の角砾10.8kgを検出した。人骨、遺物は検出されなかった。

西13号墓（第132図） 墓域のやや東に位置する。東から2列目、西12号墓の西14号墓の間に位置する。平面は正方形の素掘り土壙である。大きさはやや大きく、長辺82cm、短辺80cmを測る。深さはやや深く、検出面から145cmを測る。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。主軸の方向はN-7°-Wである。土壙上面、土壙中南東よりで大きめの角砾が3個検出した。底面からは人骨1体が出土し

ている。遺物は検出されていない。人骨は熟年～老年の女性をうかがわせる。埋葬方向は不明である。体勢は坐位であることがわかる。

西14号墓（第133図） 墓域のやや東に位置する。南に西13号墓、西に西15号墓と隣接する。

平面は梢円形の素掘り土壙である。大きさは非常に小さく、長辺68cm、短辺48cmを測る。



第131図 A I区西11号墓出土遺物実測図

深さも浅く、検出面から48cmを測る。主軸の方向はN-7°-Wである。土壌上面、土壙中北西よりで墓石の台座部分の破片を検出した。

人骨・遺物は検出されていない。

西15号墓（第134図） 墓域のやや東よりに位置する。

平面はほぼ正方形の素掘り土壙である。大きさは大きく長径120cm、短径100cmを測る。深さはやや深く、検出面から140cmを測る。主軸の方向はNである。底面直上で人骨1体と銅製品1、櫛1、錢貨2が出土した。

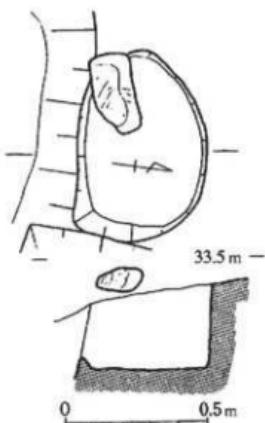
人骨は成人の骨である。埋葬方向は不明である。体勢は坐位であることがわかるが、詳細は不明である。

金具（第136図-2） 土壙の北側頭骨の下から出土した、襖の把手状の金具である。緑色をしていることから、青銅でできているものと推測される。縁の部分は板状木片と接していた。楕円形をしており、大きさは10cm×6.4cm×1.5cmを測る。

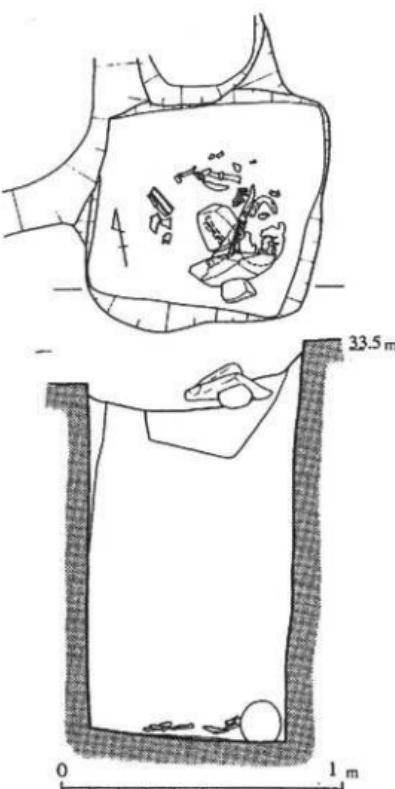
内側から1か所穿孔されている。外面には部分的に細かい布が付着している。用途は不明である。

櫛（第136図-1）金具の上にから出土した。横櫛であるが、半分を欠損している。

材質は木製である。細かい布および髪が付着していた。



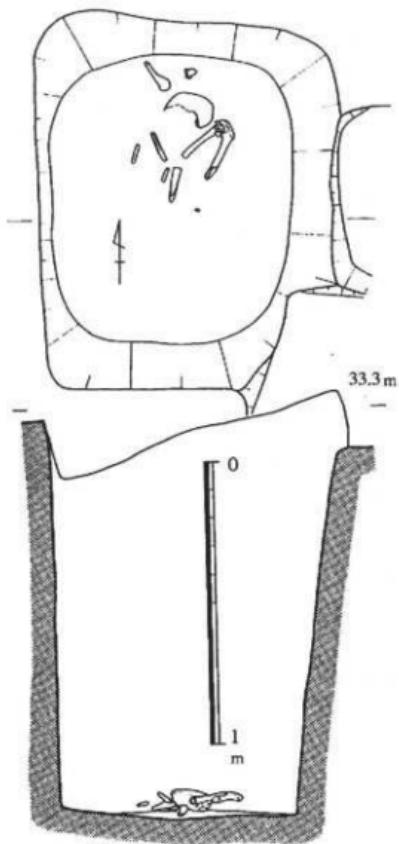
第134図 A I 区西15号墓実測図



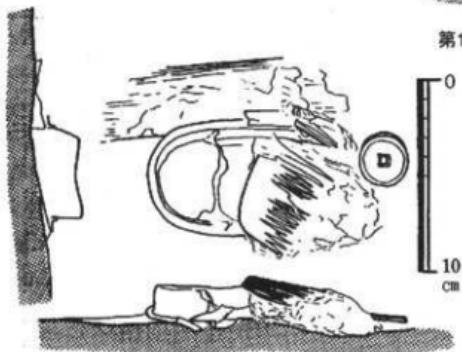
第132図 A I 区西13号墓実測図

銭貨（第136図-3）銅製。銅  
製寛永通宝2枚が頭蓋骨の下から出土  
している。

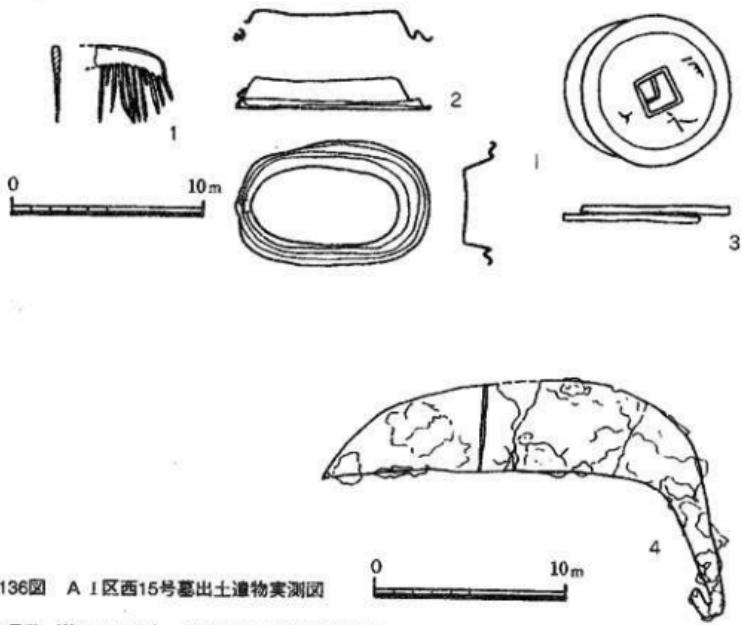
いわゆる六道錢として納入されたもの  
であり、寛永通宝である。内訳はハ寶  
銭2枚である。



第134図 A I 区西15号墓実測図



第135図 A I 区西15号墓遺物出土状態実測図



第136図 A 1区西15号墓出土遺物実測図

西16号墓（第137図） 墓域のやや東に位置する。

東から2列目の中程に位置する。

西18号墓と切り合っているため平面形は不明であるが、1辺が98cmの方形の素堀土壙である。深さはやや浅く、検出面から86cmを測る。主軸の方向はN-15°-Eである。検出面から30cm~50cmの深さでレンズ状に拳大の角礫が出土した。底面直上で人骨1体、鎌1が出土した。

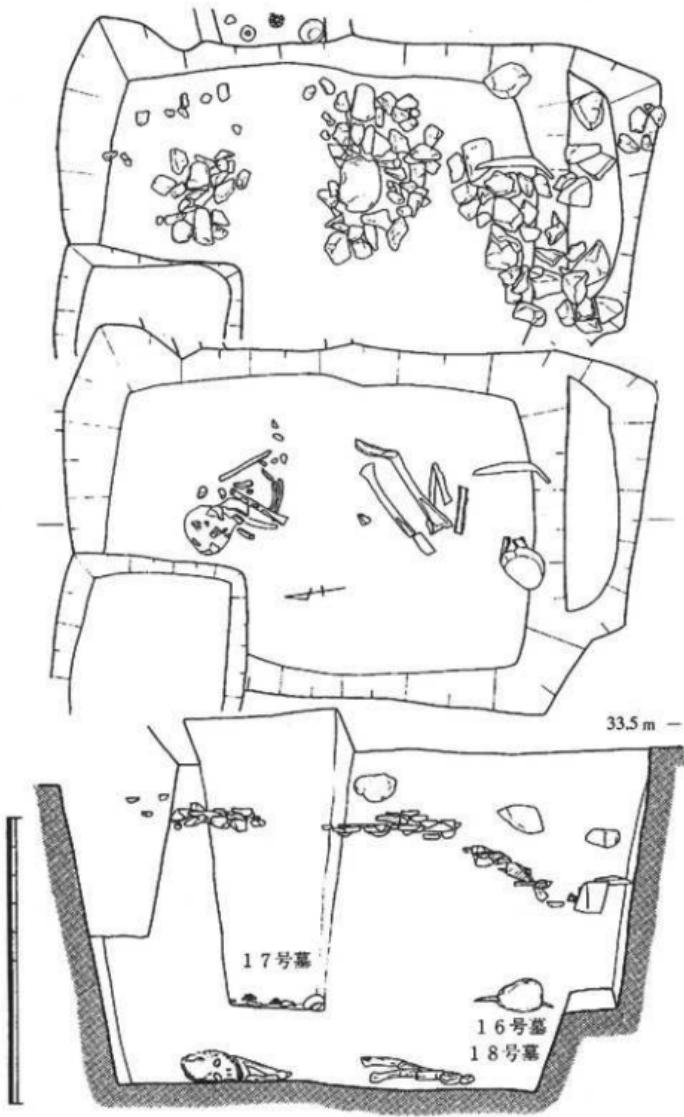
人骨は15才程度のものである。埋葬方向は不明である。

鎌（130図-3） 鉄製。頭骸骨より30cm東で出土した。大型のもので長さ21cm、幅5cmを測る。ほぼ完形である。柄側の端は折り曲げてある。

西17号墓（第138図） 墓域の東端に位置する。東から1列目の中程に位置する。西18号墓と切り合っている。平面正方形の素堀土壙である。大きさは非常に小さく、長辺が56cmの短辺55cmを測る。深さはやや深く、検出面から108cmを測る。主軸の方向はN-7-Wである。各壁はほぼ垂直に掘り込まれている。底面から骨片と銭貨3、碗1、紅皿2が出土している。

骨片は乳児のものであり、性別・埋葬状態は不明である。

銭貨（第139図-4~6） 銅製。壙底中央、頭蓋骨付近で出土した。いわゆる六道線として納入されたものであり、寛永通宝である。内訳はス賣錢2枚とハ賣錢1枚である。ハ賣錢の裏面には“元”的文字がみられる。ス賣錢の文字はやや太く感じられる。



第137図 A1区西16号墓実測図

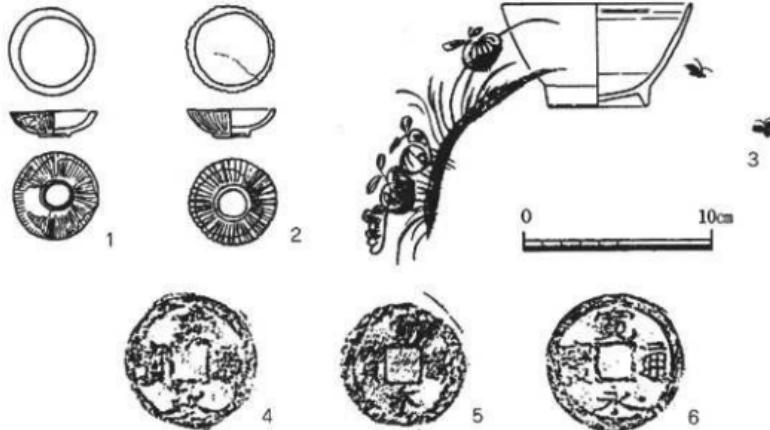
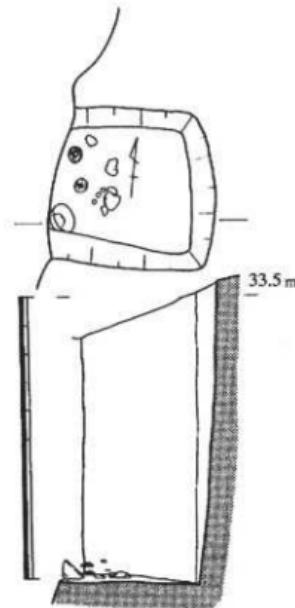
紅皿（第139図-1・2） 磁器。壇底の西側で出土している。脇部には放射状に浅い溝が入っている。大きさは口径4.7 cm、高台径1.8 cm、器高1.5 cmを測る。色調は内外面とも白色を呈す。口縁部は鋭く水平に切られている。

碗（第139図-3） 磁器。南西より、底面の高さから出土している。大きさは口径10.0 cm、高台径5.0 cm、器高5.3 cmを測る。色調は内外面とも白色を呈す。釉薬が完全に溶けきっていないため光沢がない。刷部外面には淡い藍色の植物と蝶の文様が、内面には線が3条まわる。

西18号墓（第137図） 墓域のやや東に位置する。東から2列目の中程に位置する。西16号墓、西17号墓、西19号墓と切り合っている。平面は長方形の素掘り土壙である。大きさは最も大きく、長辺が206 cmの短辺120 cmを測る。深さはやや深く、検出面から120 cmを測る。主軸の方向はN 7 Eである。

各壁はほぼ垂直に掘り込まれている。検出面から30 cmの深さではほぼ水平に拳大的な角砾が出土した。土壙のほぼ中央、底面直上で人骨1体が出土した。

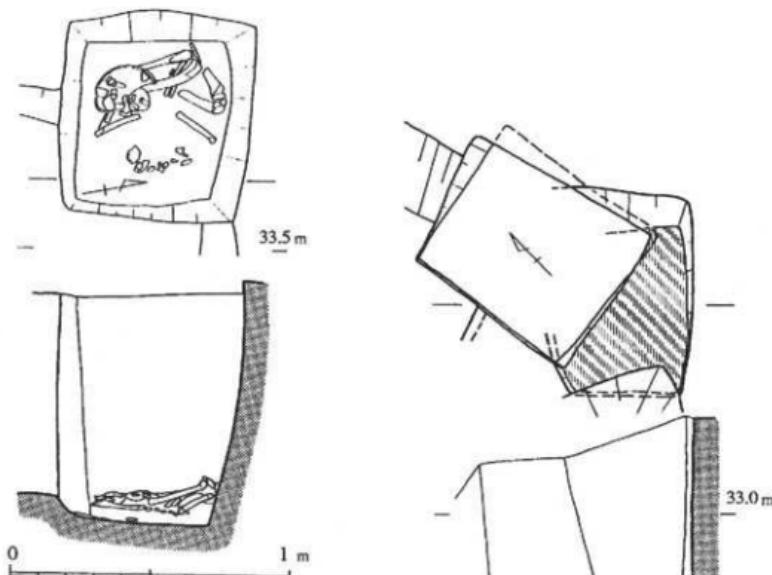
人骨は壮年後半～熟年前半の男性と思われる。立膝仰坐位でSを向いている。



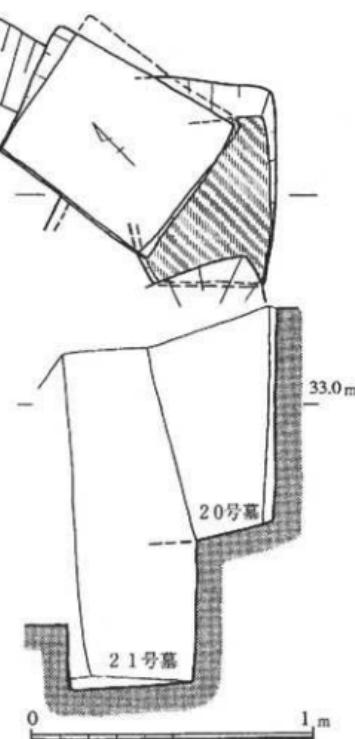
第139図 A I区西17号墓出土遺物実測図

西19号墓（第140図） 墓域のやや東に位置する。西18号墓と東南方向で切り合っている。平面は正方形の素掘り土壌である。大きさはやや小さく、長辺が78cmの短辺70cmを測る。深さはやや浅く、検出面から86cmを測る。主軸の方向はN-7-Eである。各壁はほぼ垂直に掘り込まれている。土壌のほぼ中央、底面直上で人骨1体が出土した。

人骨は熟年の男性と考えられる。仰臥坐位でN-80-Wを向いている。



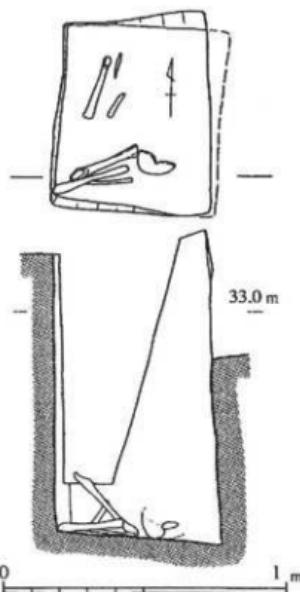
第140図 A I区西19号墓実測図



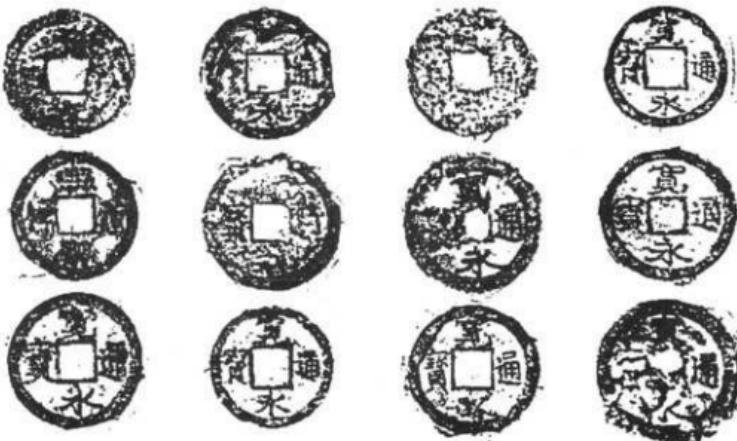
第141図 A I区西20・21号墓実測図

西20号墓（第141図） 墓域の東端に位置する。北側で西21号墓と南西方向で西18号墓と切り合っておりほとんど原形をとどめていない。平面形は1辺がおよそ70cmの方形の素掘り土壙である。深さはやや浅く、検出面から76cmを測る。主軸の方向はN-35-Wである。この土壙にともなう人骨、遺物は出土しなかった。

西21号墓（第142図） 墓域の東端やや北に位置する。南側で西20号墓と北西方向で西62号墓と切り合っている。平面はほぼ正方形の素掘り土壙である。大きさは非常に小さく、長径が63cm、短径53cmを測る。深さはやや深く、検出面から114cmを測る。主軸の方向はN-7-Wである。



第142図 A I 区西21号墓実測図



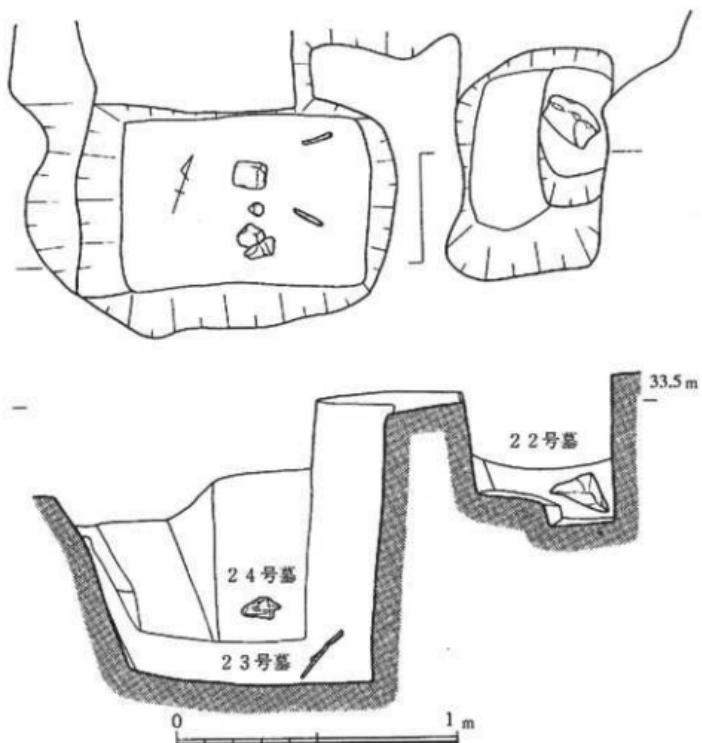
第143図 A I 区西21号墓出土銭拓影

各壁はほぼ垂直に掘り込まれている。土壤のほぼ中央、壙底で人骨1体が出土した。遺物は銭貨13枚が出土している。

人骨は壮年～老年の女性をうかがわせる。坐位であることはわかるが方向は不明である。

銭貨（第143図） 銅製・鉄製。いわゆる六道銭として納入されたものであり、寛永通宝である。内訳は銅銭12枚と鉄銭1枚である。銅銭はス寶銭4枚とハ寶銭6枚とであり、残り2枚は判読できない。ス寶銭の文字はやや太く感じられる。

西22号墓（第144図） 墓域の南端ほぼ中央に位置する。平面長方形の素掘りの土壤である。小さく、長辺が80cm、短辺60cmを測る。深さは浅く、検出面から42cmを測る。主軸の方向はN-15-Wである。底面東半が10cm程度低くなっている。大ぶりの躰はこのうえから出土した。土壤内からは人骨及び遺物は出土しなかった。



第144図 A I区西22・23・24号墓実測図

### 西23号墓（第144図）

墓域の南端ほぼ中央に位置する。北側で西24号墓と切り合っている。平面長方形の素掘りの土壙である。大きさはやや大きく、長辺が113cm、短辺57cmを測る。深さはやや深く、検出面から101cmを測る。主軸の方向はN-70-Eである。各壁はほぼ垂直に掘り込まれている。

人骨1体と蝶、土師質土器2が出土した。

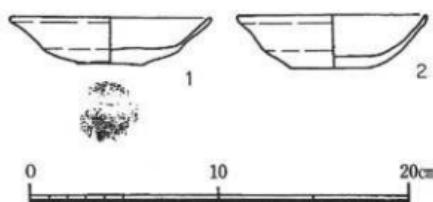
### 土師質土器皿（第145図）

1は大きさは口径10.6cm、底径3.5cm、器高2.5cmを測り、色調は淡黄赤色を呈す。水挽きにより成形され、回転糸切り技法により切り離されている。

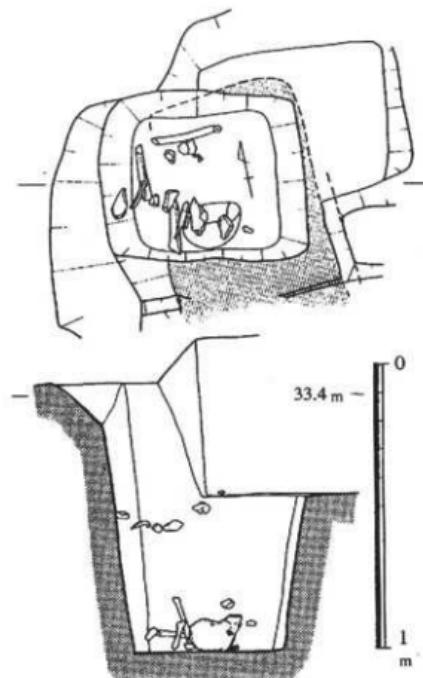
焼成は良好で、内面はきわめてなめらかである。2は大きさは口径10.0cm、底径4.2cm、器高2.8cmを測り、色調は淡黄赤色を呈す。水挽きにより成形され、回転糸切り技法により

切り離されている。焼成は良好で、内面はきわめてなめらかである。

蝶は拳大の大きさで、底面



第145図 A I区西23号墓出土遺物実測図



第146図 A I区西24号墓実測図

から30cmの高さから4個ほど出土した。

人骨は成人の骨である。残存状況が非常に悪く、埋葬時の体勢は不明である。

西24号墓（第146図）墓域の南端ほぼ中央に位置する。北側で西25号墓、南側で西23号墓と切り合っている。わずかに残存している壁面が直線的なことから平面は方形の素掘り土壙である。大きさは東西径が78cmを測る。深さはやや浅く、検出面から85cmを測る。主軸の方向はN-23-Wである。土壙内からは人骨及び遺物は出土しなかった。

西25号墓（第147図）墓域の南

に位置する。西23号墓の北となりに位置する。南側で西24号墓、

東側で西26号墓と切り合っている。

平面は正方形の素掘り土壙である。

大きさはやや小さく、長辺が70cm、短辺62cmを測る。深さはやや深く、

検出面から110cmを測る。主軸の方向

はN-78-Eである。土壙内からは人骨1体及び礫、遺物は鎌1・鉄製

金具・釘2・土師質土器皿1が出土した。

人骨は熟年の女性と考えられる。

立膝坐位でN-85-Wを向いている。

礫は拳大の大きさで、底面から50

cmの高さから4個ほど出土した。重

量は12kgを測る。

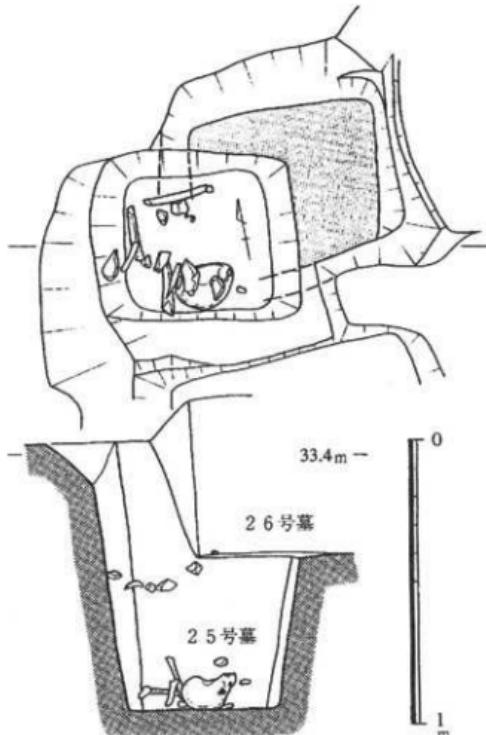
鎌（148図-1）壙底より50

cm上の礫に交じって出土した。

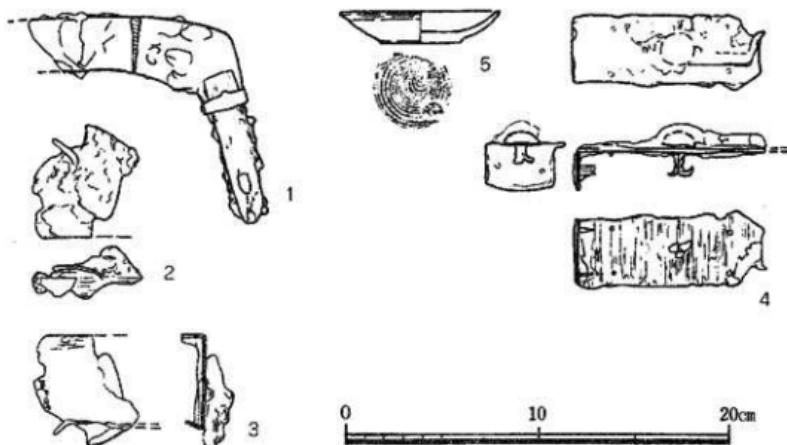
刃部の幅は2.8cmと薄いタイプのものである。刃部半分欠損している。研ぎ減りしている。

柄の部分の残存状況が良好で関の部分には、柄を固定するための責め金具があり、茎端に近い部分には目釘が残っている。床面からの高さから、西24号墓に伴う可能性もある。

鉄製金具（148図-3）板状の金具をコの字状に折り曲げたような形状をしている。正面は幅5.0cm、残存長2.8cmを測る。釘が打ちつけてある。



第147図 A1区西25・26号墓実測図



第148図 A1区西25号墓出土遺物実測図

鉄製金具（148図-4）板状の金具をL字

状に折り曲げたような形状をしている。正面は幅3.5cm、残存長10.0cmを測る。正面中央には径1.6cmの頭の鉢が留めてある。側面は長さ2.2cmを測る。正側面には小さい釘が2カ所打ちつけてある。内面には木質が付着している。用途は不明であるが、方形の木製品の角を留めたものであろう。



第149図 A1区西25号墓出土銭拓影

土師質土器皿（148図-5）頭骸骨に隣接して出土した。大きさは口径8.3cm、底径4.3cm、器高1.6cmを測り、色調は淡黄色を呈す。水挽きにより成形され、回転糸切り技法により切り離されている。

西26号墓（第147図）墓域の南に位置する。東側で西27号墓、西側で西25号墓・西24号墓と切り合っている。平面はほぼ正方形の素掘り土壤である。大きさはやや大きく、長辺が86cm、短辺77cmを測る。深さは浅く、検出面から62cmを測る。主軸の方向はN-85-Wである。土壤内からは人骨が出土していないが、錢貨が出土した。西25号墓と切り合い部分で西26号墓の遺物がでることから西25号墓のあとに西26号墓がつくられたものと考えられる。

錢貨（149図）銅製。いわゆる六道錢として納入されたものであり、寛永通宝である。内訳はハ寶銭2枚である。2枚とも残存状況は良好である。1枚は湯まわりが悪い。もう1枚はいわゆる”マ”通しである。

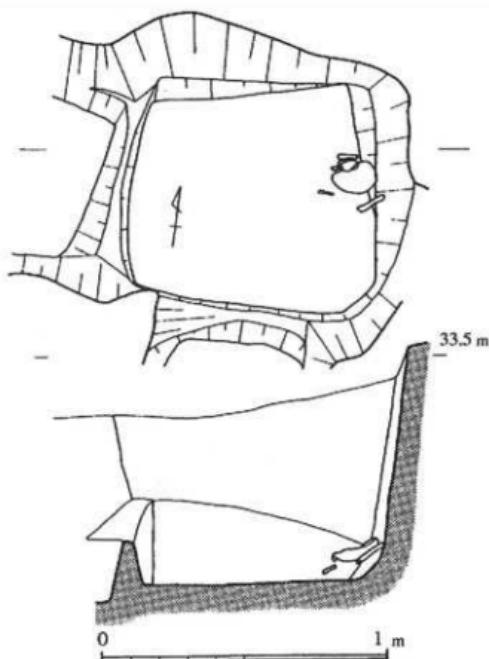
西27号墓（第150図） 墓域  
の南に位置する。南側で西22号  
墓、西側で西26号墓と切り合っ  
ている。平面はほぼ正方形の素  
掘り土壙である。

大きさは大きく、長径が110cm、  
短径99cmを測る。深さはやや浅  
く、検出面から85cmを測る。主  
軸の方向はN-85-Wである。  
土壙内からは遺物が出土してい  
ないが、人骨が1体出土した。

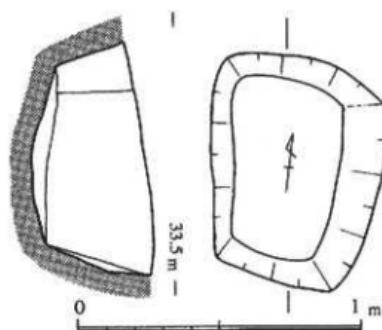
人骨は土壙下場の東壁際で頭  
蓋骨片が検出された。壮年～熟  
年の女性をうかがわせるが、出  
土状態が非常に悪く埋葬時の姿  
勢は不明である。

西28号墓（第151図） 墓域  
のやや南に位置する。西27号墓  
の北側に位置する。平面は隅丸  
長方形の素掘り土壙である。大  
きさはやや小さく、長径が81cm、  
短径59cmを測る。

深さは浅く、検出面から42cmを  
測る。主軸の方向はNである。  
土壙内からは人骨・遺物が出土  
していない。



第150図 A I区西27号墓実測図



第151図 A I区西28号墓実測図